I313.09
王158

河北大学教材出版基金资助出版

日本文学史

张如意 编著



河北大学出版社



编写说明

这本书是学习日本文学史的入门教科书。

对于中国大学日语专业的学生来说，日本文学是必须要学习的。日本文学史是日本文学中不可或缺的一部分。文学史不但能够帮助我们了解作品产生的时代背景和作者的情况，而且更重要的是可以让我们懂得文学发展的脉络和基本规律。不了解文学发展的历史，就不能很好地认识文学的现在和将来。正如我们为了了解现在和未来而学习历史一样，要想知道日本文学的现状和未来的发展趋势，就很有必要学习日本文学史。

我编写这本教材的最大目的就是想让日语专业的学生能够更快更容易地掌握日本文学史的要点和发展脉络。

本书由五章构成。在文史的分期上基本遵循着上代、中古、中世、近世、近代这一历史的划分方法。各个章节中，在简单介绍该时期文学产生和发展的背

景等文学概况的基础之上，按照诗歌、小说等不同的文学形式分别进行介绍，并对名家名作进行重点说明。为了清楚地认识同一种文学形式的演变过程，力争做到内容上的前后照应。

除此之外，为了便于中国学生学习，本书采用了横体文字，并对难读的汉字注上了假名。同时，为了尊重日本的记术习惯和照顾中国学生的学习习惯，在所有日本年号后面都附上了阳历时间。

虽然在编写上极为谨慎，但由于本人才疏学浅，且时间仓促，书中肯定存在不少缺陷，敬请读者批评指正。

编者　张如意

2004 年 5 月

目　次

第一章　上代の文学

第一節　文学の概況

一、時代と背景

日本列島に住んでいた人々が、いつごろ言葉を用いるようになったのか、はっきりとはわからない。 そして、文学と呼ぶことのできるものがいつ生まれてきたのかも、はっきりとはわからない。このような計りがたい太古の時代から奈良時代の終わりまでを、文学史では上代という。多くの小国家が分かれて存在していた一世紀ごろから、七九四年の平安京遷都までを上代という一説もある。

日本人の祖先がこの列島に住み着いてから数千年を経て、新石器時代を迎える。それは紀元前三世紀ごろまで続き、縄文文化時代と呼ばれる。そのころの人々は狩猟、漁労、採集の生活をしていたが、縄文文化時代の晩期には、稲作の技術が徐々に広まって農耕社會を形成し、人々は集団生

活をするようになった。紀元前三世紀ごろから二世紀ごろまでは弥生文化時代で、鉄製の農具の使用によって米の生産は飛躍的に高まった。このため定住生活がほぼ確立し、部族中心の小国家が発生した。四世紀には、これらの小国家が大和朝廷によって統一され、七世紀には中央集権的な律令国家に発展する。大陸との交渉が盛んになると、遣隋使が隋の文化をもたらして飛鳥文化が花開き、また、遣唐使が唐の文化をもたらして白鳳文化が栄えた。だが、政治的な争いが度重なり、律令制度に行きつまりが生じたため、延暦十三年(７９４年)平安京へ都を移したのだった。

二、文学形態と文学理念

まだ文字がなかった時代では、文学は語り継がれ歌い継がれていた。このような、文字によらない伝承の文学を口承文学という。原始的な社会では、人々は自然の恵みの中で暮らしていた。彼らにとって自然はすなわち神であり、人々は神との交渉―祭り―によって自然の恵みを祈った。

祭りの場では、共同体の願望を表す＜語り＞や共同体の感情を盛り込んだ歌謡が口に出され神の行為が模倣的に演じられた。ここに文学や演劇の起源があると考えられている。

語りとしての神話、伝説、説話、祝詞、そして共同体の

喜びや悲しみを表す歌謡は、各氏族の専門的な伝承者である語部によって継承されながら少しずつ洗練されていき、やがては文字で記録されることになる。

六世紀の仏教の伝来に先立って、日本に漢字がもたらされると、幾世代にもわたって伝承されていた語りや歌謡が、漢字を用いて記されるようになった。このような形態のものを記載文学という。

中国や朝鮮の文化に深く接するにつれ、歴史意識が至大に喚起され、日本を外国に対する一つの国としてとらえる国家意識がいっそう鮮明になる。これにより『古事記』『日本書紀』『風土記』などが編纂された。

食糧生産の技術の向上で共同体の生活が安定し、漢字が自由に使いこなせるようになると、集団の文学に取って代わって個人の文学意識が自覚されるようになり、漢詩文では『懐風藻』が、和歌では現存する最古の歌集である『万葉集』が編纂された。

上代の文学には、自然の恵みを祈る人々の気持ちや喜び、悲しみの気持ちを、率直に表現するという特徴がある。これを＜まこと＞の文学と称している。端的に言えば、「明き清き直き誠の心」であるといえる。

第二節　神話伝説と祭りの文学

一、口承文学から記載文学へ

人々が狩猟・漁労・採集によって生活していた原始の時代も、稲作中心の農耕生活に入った弥生時代[1]以後も、豊かな収穫は神の恵みのよると考えられていた。いわば自然と人間との未分化な関係が、長い間続いたのである。人々は自然の恵みを受けるために神々と交渉し、自然を魔術的に克服しようとした。それが祭りである。祭りの場では、神の事績や共同体の由来・地名の由来などが語られ、その<語りごと>は、経験豊かな村落の老人や氏族の語部[2]などにより記憶され継承された。

ところで、<語りごと>は実際には、古代の人々の創造力により生まれたものであり、時代の推移とともに、人々の解釈が加えられて表現も変化していった。神への語りかけにおけるこうした創造力や表現力を、日本の文学の誕生として位置づけることができる。五、六世紀ごろ、日本に漢字がもたらされると、伝承されていた<語りごと>は、

---

① 二千年ほど前に日本にあった古代文化の様式。水稲を作り、金属を使い、やや薄手の土器を焼いた。

② 宮廷や地方の豪族に隷属し、始祖に関連した神話・伝説などの詞章を代々伝え、口誦することを職掌とする世襲集団。

徐々に漢字を用いて記載されるようになる。また、外国との交流が盛んになるにつれて統一国家が形成されると、口承文学は集大成して記載された。それが、『古事記』『日本書紀』『風土記』などである。これらに掲載されている話の内容は、神話、伝説、説話の三つに分類することができる。神話は神々に関するさまざまな物語である。伝説は共同体の英雄や祖先の活躍などを物語にしたものである。説話は人々の周囲におこった興味深い出来事などをまとめたものである。

◎『古事記』

『古事記』は現存する日本最古の書物である。編者は太安万侶[①]、成立は和銅五年（７１２年）。内容は上・中・下の三巻から成る。上巻には天地創造に始まる神話が収まられ、物語性、文学性に富む。中・下巻は、天皇一代ごとの系譜を中心として、皇族や英雄の伝説が述べられている。『古事記』編纂の最大の目的は、諸氏族の持つ伝承を統一し、天皇支配の正当性を示して天皇を中心とした国家統一をすすめることにあった。しかし、そこに記されている神話や伝説などからは、古代人のものの見方や考え方、豊かな感情が感じられ、十分な文学性を持ち合わせているといえる。『古事記』の表記には、純粋の漢文体で書かれた序文のほか、漢

---

① 生年不祥。７２３年没。官吏、博学。『日本書紀』の編修にも加わったといわれる。１９７９年、奈良県から墓誌が発見された。

字の音訓をまじえた変則の漢文体で書かれたものもある。これは稗田阿礼の誦習する言葉を漢字で正しく表記するための工夫で、特に重要な語句などは一字一音節の万葉仮名で表記された。

◎『日本書紀』

編者は舎人親王[1]。成立は養老四年(７２０年)。中国などの諸外国に対抗できる日本の正史を作ることで、対外的に国威を示そうという目的のもとに初めて編まれた官撰の歴史書である。中国の史書の影響を受けて編年体[2]をとっており、以後の正史の規範とされた。また、これをはじめとして六国史[3]が編纂された。

◎「風土記」

和銅六年（７１３年）に官命によって編纂された。中央集権を推進する一環として諸国に作成させた報告文書であり、諸国の産物、土地の状態、地名の由来、伝承される説話などが記されている。多くは散逸しているが、五風土記[4]（播磨・常陸・肥前・豊後・出雲）が現存する。地方で独自に編ま

---

[1] 天武天皇の第三皇子で万葉歌人でもある。
[2] 年月の順を追って記述する歴史編纂の方法である。中国では『春秋左氏伝』などがある。
[3] （1）『日本書紀』（2）『続日本記』（3）『日本後記』（4）『続日本後記』（5）『日本文徳天皇実録』（6）『日本三代実録』。
[4] 播磨国、常陸国、肥前国、豊後国、出雲国の五つの国の「風土記」。

れたので、地方色が豊かである。当時の地方の暮らしを知る手がかりとしても重要である。

なお、諸氏族の私的な伝承として、奈良時代末期の『高橋氏文』、平安時代初期の『古語拾遺』がある。ともに他氏族との争いにおいて一族の優位を示すために、一族の由緒や祖先の功績などを、神話や伝説にさかのぼって説いている。

◎『日本霊異記』

成立は平安時代初期とされる。景戒によって編集された。正式には『日本国現報善悪霊異記』という。三巻からなっている日本最初の仏教説話集で、仏教が伝来してから、その布教のためにおこった仏教説話を集めたもので、因果応報の思想が主調。薬師寺の僧、景戒の集めた説話は奈良時代のものが多く、当時の人々の考え方や暮らしぶりなどが読み取れる。

二、祭りの文学

上代では、言葉には霊力があると信じられており、よい言葉や美しい言葉は＜幸＞をもたらし、悪い言葉が＜禍＞をもたらすとされていた。このような信仰を言霊信仰というが、特に祭りの場面ではこの言霊（言葉の霊力）が重視

され、人々は美しい言葉で神に祈ることによって、願望の実現を期待した。

◎ 祝詞

言霊信仰によって、神への祈りの言葉はより美しく文学的になっていく。これを祝詞という。祝詞には、対句や反復表現が多く用いられ、韻律が重んじられている。表記は宣命書き①である。

『延喜式』②の巻八に収められた二十七編と、藤原頼長の日記、『台記』の別記に収められた「中臣寿詞」のあわせて二十八編の祝詞が現存する。

◎ 宣命

宣命とは、天皇の詔を臣下に伝える和文体の詞章である。漢文体で書かれた詔勅とは区別され、表記は宣命書きである。

宣命は、即位や改元などの国家的大事の時に発せられたものであり、政治色が強く、大事に対する朝廷の解釈や主張などが読み取られる。表現は、技巧よりも伝達ということを重視して散文的である。

---

① 祝詞と宣命に用いられる独特の表記法。すべて漢字で記されるが、体言や用言の語幹は大きく、用言の語尾や助詞は一字一音の万葉仮名で小さく記される。かな交じり文の源流となる。
② 全五十巻。律令の施行細則を記したもの。

第三節　詩歌

一、上代歌謡と記紀歌謡

上代歌謡は、人々が共同体の祭りの場で歌った歌を起源とする。人々は労働の場や祭りの場で歌を歌い、さらに歌垣[1]という歌の場が形成された。そのような中で、歌謡は共同体の連帯感を高めてきた。

和歌が個人の思いを文字に記して詠まれるのに対して、歌謡は、集団の生活を基盤として歌われる歌であるという特性のために、多くは記載されることなく消滅していった。しかし、一部は『古事記』『日本書紀』「風土記」『万葉集』『古語拾遺』『琴歌譜』「仏足石歌碑」などに記載されて残っている。このうち、『古事記』『日本書紀』の歌謡をまとめて＜記紀歌謡＞と呼んでいる。

『古事記』『日本書紀』にある歌謡の数は、重複を避けて数えて約二百首ある。本来は、当時の人々の祭りや生活の中で伝承され歌われたと思われる歌謡が、記紀の神話や伝説に結び付けて引用されているものが多い。歌謡の内容は、狩猟・祭り・恋愛・酒宴などであり、人々の生活全般にわたり、生き生きとした思いが読み取れる。

---

[1] 男女が集まって、お互いに歌を歌い合い、踊り遊ぶ行事。求婚の場でも合った。

歌謡の歌体には、片歌(かたうた)・旋頭歌(せどうか)・長歌(ちょうか)・短歌(たんか)①などがあり、上代にだけ見られる歌体が存在している。ただし、音数は必ずしも五音、七音と整(ととの)ってはいない。また、このような歌体にあわせて、対句・反復・序詞(じょことば)・枕詞(まくらことば)②などの表現法が用いられる。

『万葉集』にも、本来は歌謡であったと推測される歌が多くある。また、奈良の薬師寺の境内(けいだい)にある仏足石歌碑③に刻(きざ)まれている二十一首の仏足石歌も、この時代の歌謡である。さらに、平安中期に書き写(うつ)された和琴(わごん)の譜本(ふほん)『琴歌譜』には、万葉がなで記された二十一首の歌謡がある。これには記紀歌謡と重複するものがあり、ほかの歌謡もほぼこの時代のものと思われる。

※　記紀歌謡

八雲(やくも)立つ　出雲(いづも)八重垣(やへがき)　妻(つま)ごめに　八重垣作る　その八重垣を

口語訳

---

①　片歌__五七七。問題歌の一つ。旋頭歌__五七七五七七。片歌が二首重なった形。長歌__五七五七……五七七。短歌__五七五七七。

②　和歌の修辞法の一つ、調子を整えながら、ある一定の語句を引き出す語のこと。

③　７５３年。万葉歌人の文屋真人智努が亡妻（亡母説も）追善のため、釈迦の足跡を石に刻み、板状の石碑に万葉仮名で二十一首の歌を載せる。薬師寺境内に現存する。

（八雲立つ＝枕詞）出雲の国に、八重垣の宮殿。妻がこもり住む宮殿を建てる。

その八重垣の宮殿よ。

——『古事記』上巻

二、『万葉集』の世界

◎『万葉集』

『万葉集』は現存する日本最古の歌集である。巻数二十巻で、約四千五百首の歌を収めている。先行の歌集を資料とし、これらを含む多くの歌を、何人もの人々の手で長期間にわたってまとめたものである。現在ある二十巻の形にまとめられた時期ははっきりしないが、八世紀後半、大伴家持①によってまとめられたとされている。

四千五百首のうち、短歌が約四千二百首、長歌が約二百六十首、旋頭歌が約六十首、連歌一首、仏足石歌一首などとなっている。基本構成は必ずしも統一されていないが、雑歌・相聞・挽歌②の三大部立が分けられる。また、巻によ

---

① （718年？～785年）大伴旅人の子。『万葉集』の最終編者とされる。

② 雑歌—相聞・挽歌に入らない歌。行幸・旅・宴会に関するものが多い。相聞—親子・兄弟など、親しい者の間の贈答の歌だが、恋愛の歌が最も多い。 挽歌—柩を挽く時の歌の意で、人の死を哀しむ歌。

っては正述心緒歌・寄物陳思歌・譬喩歌[1]などの類別がある。

作者層は、天皇から一般の人々にいたるまで幅が広く、地域は大和を中心としながらも、東国、九州などと、広がりがある。漢字を表音文字として用いた万葉がなは、表記の特徴となっている。

長い時代に詠まれた歌が萬葉集には収められているので、その中に歌風の推移変遷が見られ、普通には、次の四期に分けて考えられる。

第一期＿＿舒明天皇(６２９年即位)の時代から壬申の乱[2](６７２年)前後まで。この時期は政治的激動の時期であり、皇室を中心にさまざまな刺激を受けて個性の自覚が進んでいった。このような中で、歌は、上代歌謡のように集団の生活を背景にした歌から、個性的な叙情歌へと変化していった。感動を率直に表現した素朴な作風が特徴である。皇室歌人が多く出たが、中でも額田王[3]が代表的である。

---

[1] 正述心緒歌—比喩によらず、心情を直接に述べた歌。寄物陳思歌—事物・景物に心情を託して表現した歌。譬喩歌—心情を直接に表現せず暗喩によって表現した歌。

[2] 皇位継承をめぐる皇弟大海人皇子と第一皇子大友皇子との内乱。一時吉野に退いた大海人皇子は、天智天皇の死の翌年（壬申・６７２年）６月に反乱を起こし、一ヶ月あまりの戦いの末、敗走する大友皇子を長等山で自害せしめた。大海人皇子は都を近江大津宮から飛鳥浄御原宮へと遷都、翌年天武天皇として即位した。

[3] 『万葉集』を代表する女流歌人。初め大海人皇子の妻となり、十市皇女を生むが、後に天智天皇の妃になった。

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち
国見をすれば　国原は　煙立ち立つ　海原は　鴎立ち立つ　うまし国そ
蜻蛉島　大和の国は

___舒明天皇・巻一

口語訳

大和には多くの山があるが、その中でとりわけ立派な天の香具山、その山に登り立って

国見をすると、国土には炊事の煙がしきりに立ち、海には鴎がしきりに飛びまわっている。

美しい国よ、(蜻蛉島＝枕詞) 大和の国は。

第二期___壬申の乱(６７２年)前後から平城京遷都(７１０年)まで。律令国家が発展していった活気に満ちた時期で、宮廷歌人という専門の歌人が活躍し、皇室を称える歌も多く詠まれた。表現技巧が発達し、和歌の形式が完成したのもこの時期である。とくに長歌の発達は著しく、柿本人麻呂[①]によって完成された。

第三期___平城京遷都（７１０年）前後から天平五年（７３３年）ごろまで。律令国家が完成し、大陸の思想や文化が導入されると、多くの知識人が輩出され、知的で

---

① 生没年未詳。持統・文武朝に仕えた下級官吏。天皇・皇子女への賛歌や挽歌が中心。典型的な宮廷歌人で、山部赤人と共に後世「歌聖」と称される。

個性的な歌人が多く出た。彼らは個性豊かな歌を詠み、ここに万葉の最盛期（さいせいき）を迎える。最盛期の歌は繊細（せんさい）で洗練されており、初期の素朴さは失われていった。また、代表的な歌人として、山上憶良（やまのうえのおくら）①・大伴旅人（おおとものたびと）②・山部赤人（やまべのあかひと）③・高橋虫麻呂（たかはしのむしまろ）④などがいる。

第四期＿＿天平五年（７３３年）ごろから天平宝字三年（７５９年）まで。律令政治が行（ゆ）き詰（つ）まり、社会不安が表面化してくると、歌もこれを反映して、現実を離れた優美（ゆうび）で繊細な歌が多くなり、『古今和歌集』の歌風に近づく。代表的な歌人に大伴家持などがいる。

◎ 万葉がな

万葉がなは、漢字の音を利用した音がなと、訓を利用した訓がなに大きく分かれる。

音がな

正音	力士（りきし）	法師（ほうし）	塔（たふ）
借音	阿米都知（あめつち）	許己呂（こころ）	

---

① （６６０年～７３３年）７０３年遣唐使として入唐。大伴旅人と親しい。思想歌人と評される。

② （６６５年～７３１年）家持の父。三朝に仕える官吏。叙情歌人といわれる。

③ 生没年未詳。奈良時代初期の歌人。漢文の素養も高く、広い範囲で活躍した。

④ 生没年未詳。奈良時代初期の歌人。

訓がな

正訓	天(あめ)	古都(いにしへ)	情(こころ)
借訓	夏樫(なつかし)	待(まつ)	
義訓	寒(ふゆ)	丸雪(あられ)	

◎ 東歌と防人歌

『万葉集』の巻十四に東歌(あずまうた)が約二百三十首収められている。東国の歌は東国（現在の関東や東北）地方の人並びに東国関係の歌を指す。東国の民衆の生活を舞台に民謡で歌われており、素朴さを特徴としている。

防人歌(さきもりうた)は巻十三、十四、二十に収められ、約百首ある。防人(さきもり)は北九州の警備(けいび)のために派遣された兵士のこと。東国の人々が派遣されることが多かった。防人歌は遠い九州の地へ向かう辛さや別れの悲しみなどを率直に表現している。

三、漢詩文

遣隋使と遣唐使によって中国文化がもたされる中、漢籍(かんせき)が輸入されると、宮廷人や貴族が中心になって漢詩文を盛んに作るようになり、それは公的文学として確立した。天智(てんち)天皇が漢詩文を奨励(しょうれい)し、律令体制が中国の制度を真似(まね)たことも関係して、漢詩文の知識や創作が隆盛(りゅうせい)を極(きわ)め、いわば漢詩の習得(しゅうとく)こそが、律令官人(かんにん)の必須(ひっす)の教養であった。奈良

時代には、多くの作者が出てきて、いくつかの漢詩集が作られたが、現存するのは『懐風藻』だけである。

◎『懐風藻』

『懐風藻』は天平勝宝三年（７５１年）の成立で、編者不明。日本最古の漢詩集として知られる。近江・奈良の約百年間、六十四人の作品約百二十編を収める。宴席や遊覧の詩が多く、五言詩を主とし、中国六朝の古体詩を真似した作品が多い。

金烏臨西舎　鼓声催短命
泉路無賓主　此夕離家向

——大津皇子『懐風藻』

口語訳

太陽は西の家屋を照らし、鼓の音はわが短い命をさらに急き立てるかのようだ。死出の旅は自分独り、この夕べ家を離れて向かうのみ。

◎『歌経標式』

漢詩文の隆盛に伴ない、中国の詩学を和歌にもあてはめようとして、日本初めての歌学書が作られた。それが『歌経標式』である。漢詩と和歌の性質は違うので、中国の詩学をそのままあてはめたこの試みには無理があった

が、和歌への批評意識を理論化しようとした。そして、後の歌学・家論に大きな影響を与えた。

練習問題

(一) 次の各問いに答えてください。。

問一 共同体の<語りごと>の専門的な伝承者を何というか。

問二 次の（1）—（3）の説明として適当なものを、それぞれ下の（ア）—（ウ）の中から一つずつ選んでください。

（1）神話　（ア）共同体の英雄や先祖の活躍などを物語にしたもの

（2）伝説　（イ）人々の周囲に起こった興味深い出来事などをまとめたもの。

（3）説話　（ウ）神神に関するさまざまな物語。

(二) 次の（1）—（4）の説明に合う作品名を答えてください。

（1）現存するわが国最古の書物で、太安万呂が編纂した。

（2）薬師寺の僧，景戒が編集した仏教説話集。

（3）わが国最古の漢詩集。約百二十編の漢詩を収める。

（4）現存するわが国最古の歌集で、約四千五百首を収

める。

(三) 次の各問いに答えてください。

問一 次の（ア）―（ケ）の項目の中から、『日本書紀』に関係の深いものをすべて選んでください。

（ア）７１０年　（イ）７１２年　（ウ）７２０年

（エ）柿本人麻呂　（オ）舎人親王　（カ）稗田阿礼

（キ）文学的　（ク）歴史書的　（ケ）編年体

問二『日本書紀』の編纂の目的を簡単に述べてください。

(四)『万葉集』に関する次の各問いに答えてください。

問一『万葉集』の編者と考えられる人物はだれか。

問二『万葉集』の三大部立は「雑歌」「相聞」ともう一つは何か。

問三 次の（ア）―（カ）の歌人が活躍した時期（第一期―第四期）をⅠ―Ⅳの記号で答えてください。

（ア）大伴旅人　イ）大伴家持　（ウ）柿本人麻呂

（エ）高橋虫麻呂　（オ）額田王　（カ）山上憶良

問四 東北から北九州の警備に派遣された人々やその家族のつらさや悲しみを歌った歌を何というか。

第二章　中古の文学

第一節　中古文学の概況

一、時代と背景

桓武天皇の平安京遷都（７９４年）から、源頼朝が鎌倉幕府を開く（１１９２年）までのおよそ四百年間を中古とする。

八世紀半ばには公地公民制は崩れ、律令政治は動揺しはじめていた。朝廷は平安京に都を移し、律令政治の再建に努めたが、九世紀以後貴族たち、中でも藤原氏は荘園を多く所有しはじめ勢力を伸ばし、公地公民制を基本とした律令政治の根幹を揺さぶった。九世紀中頃、藤原良房が摂政となり実権を握ると、貴族階級の台頭が始まった。十一世紀初め、藤原道長の時に摂関政治は全盛を極めたが、十一世紀末、白河上皇が院政を始めると、藤原氏は次第に力を失っていた。院政は約百年間続くが、この間に武士階級が中央に進出し、十二世紀後半に、平氏が政権を

握ると、貴族階級は没落していった。

二、国風文化の復興

遣唐使による大陸との往来が盛んになるにつれて、唐風の文化が尊重されるようになった。貴族の間では漢詩文が流行し、『凌雲集（りょううんしゅう）』を皮切（かわき）りとして、『文華秀麗集（ぶんかしゅうれいしゅう）』『経国集（けいこくしゅう）』などの勅撰（ちょくせん）漢詩集が編まれた。しかし、九世紀末に唐が衰（おとろ）えると、日本は遣唐使を廃止し、唐風文化に代わって日本的なものを尊重する国風文化の復興の気運が高まった。とくに、漢字からかな文字が発明されると、和歌が多く作られるようになり、最初の勅撰和歌集である『古今和歌集（こきんわかしゅう）』が編まれ、和歌は、貴族の間で社交上欠かせない教養の一つとなった。

また、散文もかな文字で記されるようになり、物語（ものがたり）や日記が仮名で書き表された。その初めのものとしては、物語りでは作り物語である『竹取（たけとり）物語』、歌物語である『伊勢（いせ）物語』、日記では紀貫之（きのつらゆき）の『土佐（とさ）日記』がまず生まれた。

三、女流文学の開花

十世紀末から十一世紀にかけての、摂関政治の全盛期には、宮廷や後宮の女性たちによって、数多くの作品が生み

出された。ひらがなや和歌は女性たちがその内面を表現する手段として適していたからであろう。一条天皇の時代、道長が摂政のころには、清少納言の随筆『枕草子』、紫式部の『源氏物語』などが書かれ、女流文学が隆盛を極めた時代となった。ことに『源氏物語』はその長さとその完成度の高さにおいて、ほかに類を見ない作品となっている。全編には自然と人事が見事に溶け合い、＜もののあわれ＞の情趣が漂っている。その他、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』などの日記が書かれた。

四、物語の衰退

貴族階級が次第に没落していくと、その盛時を回顧する『栄花物語』『大鏡』などが書かれ、歴史物語という新しいジャンルが生まれた。また、作り物語の分野では、『源氏物語』以後にも『堤中納言物語』などの物語が多く書かれたが、『源氏物語』の模倣に終始するだけでそれを超えることはなく、華やかな王朝をしのばせるような物語は、急速に衰えていった。このような貴族社会の動揺の一方で、当時の人々の生活や思想を深く支配したのが仏教であった。仏教は文学にも影響を及ぼした。また、庶民の生活を描いた『今昔物語集』や、庶民の歌謡を集めた『梁塵秘抄』などは、広くこの時代の人々について教えてくれる。

第二節　詩歌

一、漢詩文の流行と衰退

中古初期の政治は、前代に引き続き律令性を基礎として、天皇のもとに唐風の官僚機構を整備充実した貴族官人による国家的な統制が目指された。そのため、中国の文物制度を修め、律令的な意識と思考を身につけた新しいタイプの貴族と官吏の育成が国家の急務とされ、いきおい文化的にも、唐風文化への傾倒が著しくなった。特に嵯峨天皇は魏の文帝の『典論』の「文章は経国の大業、不朽の盛事なり」に基づき、文学の意義を国家の盛衰に直結させた。

こうした背景において、文学の価値と政治とを結び付けて考える文章経国の思想が広まり、九世紀の前半は、漢詩文が空前の隆盛期を迎えた。『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』[①]の三勅撰和歌集が相次いで編集された。内容は、中唐期の華麗な詩風の影響を受け、前代に優勢だった五言詩から、七言の律詩・絶句の近代詩風に移っている。代

---

① 一巻。『凌雲新集』ともいう。成立は８１４年とされる。「雲を凌ぐ気概のある新しい詩集」の意。作者は小野岑守ら四人。嵯峨天皇の勅命による日本最初の勅撰漢詩集。　『文華秀麗集』＿＿三巻。８１８年に成立。撰者は藤原冬嗣ら。　『経国集』＿＿二十巻。現存六巻。８２７年に成立。撰者は良岑安世ら。

表的な詩人に嵯峨天皇・小野篁・空海[1]、やや遅れて都好香・菅原道真[2]・紀長谷雄らがいる。特に空海の詩文集『性霊集』や中国の詩論を体系的に編成した『文鏡秘府論』、道真の詩文集『菅家文章』『菅家後集』は、後世に大きな影響を与えた。

九世紀の中頃、律令体制が崩壊し、遣唐使も廃止（８９４年）されると、唐風文化に代わって再び国風文化への自覚が高まった。そして、かな文字の発明と普及にともなって、十世紀以後、かな文字による和歌文学と女流文学の興隆時代を迎えると、それにつれて漢詩文は次第に衰退していった。摂関政治[3]体制が確立し、藤原氏を中心とする一部の貴族によって要職が独占されると、漢詩文の才が立身出世の手段としてほとんど意味を持たなくなり、文章経国の理念そのものが形骸化したこと、漢詩文の主流が、文章博士家である菅原・大江の両家にほぼ固定されてしまったことも、こうした傾向には拍車をかける結果となった。しかし、漢詩文は時代を通じて＜晴れの文学＞として公的

---

[1] （７７４年～８３５年）。８０４年に唐に渡り、密教を学び、帰国後高野山に金剛峯寺を創建、真言宗を開いた。日本三筆（空海・嵯峨天皇・橘逸勢）の一人でまた弘法大師と呼ばれる。

[2] （８４５年～９０３年）。宇多・醍醐両天皇の重要を受け、右大臣に任ぜられたが、左大臣藤原時平との政争に敗れ、太宰府に左遷され、その地で没した。文人の評判高く、後世、天満天神として信仰された。

[3] 摂政（官吏名）と関白（官吏名）によって幼少の天皇に代わって政務の実権を取る政治形態。特に律令政治が形式化した十世紀前後から院政が成立した十一世紀中ごろまでの政治という。

な場で重んじられ、『白氏文集』[1]『文選』[2]などは男性貴族必須の教養として広く愛読された。また、和歌やかな文学に与えた影響もけっして少なくはない。したがって、創作活動こそ衰えはしたものの、享受活動という点から見れば、この時期の漢詩文も決して軽視されるべきものではない。作品としては、中古漢詩文の粋として重んじられた藤原明衡の『本朝文粋』のほか、『扶桑集』『本朝無題集』などがあり、人物としては、源順・大江匡衡などが注目される。

二、和歌

上代では、和歌が公的な行事において数多く詠まれていたが、中古では、初め唐風文化が尊重されて、宮廷や貴族の間ではもっぱら漢詩文がもてはやされた。和歌など日本固有の文学が衰退してしまって唐風全盛の時代に入った。史上一般に、これを国風暗黒時代と呼ばれる。この時期では、和歌は、わずかに男女の恋のやりとりなど、私的に壊される贈答歌としてのみ命脈を保ち、公的な行事や場ではまったく詠まれることがなくなっていた。しかし、九世紀の中頃、藤原良房によって摂関政治が始められる頃になると、平安

---

① 七十五巻で、唐の白居易の詩文集。平易流暢が特徴。
② 中国梁の昭明太子の撰で、周代から梁代までの詩文約八百編を収録。

時代初期に発明されたかな文字[1]が普及し、再び国風文化への関心が高まって、次第に伝統的な和歌に対する再評価への兆しが見え始めた。このころには、在原業平や小野小町など、いわゆる六歌仙と呼ばれる人々が活躍するが、九世紀の末ごろ、文芸愛好家として名高い宇多天皇の時代になると、その後宮には多くの歌人が集まり、晴れやかな歌も行事も盛んに行われるようになり、貴族の間にも急速に和歌への関心が高まった。こうした和歌復興の気運の中、日本最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が誕生した。

◎『古今和歌集』

『古今和歌集』は醍醐天皇の勅命により、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人に編纂され、延喜五年（905年）に成立した日本最初の勅撰和歌集である。全二十巻で、『万葉集』以後当代までの約百五十年間にわたる、約百三十人の歌人の歌、千百余首が収められている。歌風の上に変遷のあとが見られ、普通三期に大別して考えられる。

第一期　よみ人しらずの時代。該当する歌は全体の約四割りにおよび、平安朝初頭（850年ごろ）の作と思われる。『万葉集』に近い素朴で平明な歌風で、五七調の恋の歌が多い。前代に比べてより洗練されている。

---

[1] 漢字（真名）に対する語で、平安時代初期に万葉仮名の草書体が簡略化してひらがなができた。

春日野はけふはな焼きそ若草の妻もこもれりわれもこもれり

——巻一

口語訳

春日野は、今日は野焼きをしないでくれ、(若草の＝枕詞) 妻もこもっているし、私もこもっている。

第二期　六歌仙の時代。８５０年から８９０年ころまで活躍した在業原平・僧正遍昭・小野小町・文屋康秀・大伴黒主・喜撰法師の六歌仙の時代期で、いわゆる古今歌風のほぼ確立時代にあたる。七五調が優勢となり、縁語・掛詞などの知的な技巧が駆使されるようになった。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

——巻二、小野小町

口語訳

花は色あせてしまった。むなしく世を過ごして物思いに沈み、長雨の降り続いているうちに。

第三期　撰者の時代。８９０年から９０５年頃までの撰者の活躍時期で、古今歌風の完成期にあたる。縁語・掛

詞・比喩・見立てや擬人法などの技巧が発達し、表現がより洗練される。優美繊細な題材や技巧を駆使して、観念的・理知的に詠んでいる。七五調・三句切れが多い。

久方の光のどけき春の日にしづ心無く花の散るらむ

——（巻二、友則）

口語訳

（久方の＝枕詞）光がのどやかな春の日に、なぜ桜の花は落ち著いた心もなく散っていくのか

『古今集』には、漢文で書かれた真名序と、仮名で書かれた仮名序がそなわっている。とくに紀貫之に書かれた仮名序が仮名で書かれた文章として注目され、また、最初の歌論として後世のさまざまな評論への影響が大きい。

古今歌風は古今調と呼ばれ、『万葉集』のように実際の対象をそのまま読むのではなく、題詠①や屏風歌②に代表されるように、作者の観念によって構築されたいわば＜虚構の美＞として読まれる。したがって感情表現も直情的ではなく、比喩・見立てを中心に縁語や掛詞などの複雑な修辞を駆使して、機知的・理知的・観念的な読みぶりを特徴としている。また、『万葉集』の男的で素朴で雄大なくますら

---

① 歌合などで、題を決めて、それに応じた歌を詠むこと。
② 屏風に描かれた絵を詠んだ歌。画中の人物になったつもりで詠むこともある。

をぶり＞の歌風に対して、女性的で流麗な＜たをやめぶり＞である。宮廷社会の洗練された貴族趣味をよく表している。

『古今集』の仮名序　（紀貫之）

やまと歌は人の心をたねとして、よろづの言の葉とぞなりける。世の中にある人ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を、見るもの聞くものにつけて、いひ出せるなり。花に鳴く鶯、水にすむかはづの聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。……僧正遍昭は、歌のさまはえたれどもまことすくなし。たとえば絵にかける女をみていたづらに心をうごかすがごとし。在原業平は、その心あまりてことばたらず。しぼめる花の色なくてにほひ残れるがごとし。文屋康秀は、ことば巧みにてそのさま身におはず。いはば、あき人のよききぬきたらず。宇治山の僧喜撰は、ことばかすかにして、はじめをはりたしかならず。いはば秋の月をみるに、あかつきの雲にあへるがごとし。……小野小町は、いにしへの衣通姫の流なり。あはれなるやうにて強からず。いはば、よき女のなやめるところあるににたり。……大伴黒主は、そのさまいたし。いはばたきぎおへる山人の、花のかげにやすめるがごとし。……

口語訳

和歌は、人の心を根本としてたくさんの言葉となったのである。この世の中で生活している人は、いろいろな仕業が多いので、見るもの、聞くものに託して言いのである。春の花の中で鳴いているうぐいす、水に棲んで鳴いている河鹿の声を聞く

と、あらゆる生物は、どれが歌を詠まないだろうか、みんな詠んでいるではないか。……僧正遍昭は歌の風体は自分のものにしているが真実味が少ない。たとえば絵に描いてある美しい女がむなしく人の心を動かすようなものだ。在原業平は心情が十二分で、それに対する表現が伴なわない。いわば萎んだ花が、その色の美しさがなくなって、よき香りが残っているようなものだ。文屋康秀は表現が巧みで、歌の風体がそれに照応していない。言ってみれば商人が立派な着物を着たようなものだ。宇治山の僧喜撰は表現が奥深くうるわしくて、一首の首尾が一貫していない。いわば美しい秋月を見ているうちに暁の雲に逢ってはっきり見えなくなったようなものだ。……小野小町は昔の衣通姫の類である。歌はしみじみとした感情がこめられていて、強さにかける所がある。いってみれば美女が病んで悩んでいるところがあるのに似ている。……大伴黒主はその風体が卑俗である。いわば薪を背負った山人が美しい花の木陰で休憩しているようなものだ。……

◎ 三代集と八代集

『古今集』が撰進(せんしん)されたのち、五十年を経て『後撰集(ごせんしゅう)』、さらに約五十年の後に『拾遺集(しゅういしゅう)』が勅撰集として編まれ、『古今集』と合わせて三代集として尊重される。源順らいわゆる梨壷(なしつぼ)[1]の五人を撰者とする『後撰集』には贈答歌や詞書

---

[1] 五舎の一、昭陽舎の異称。庭前に梨を植えたから梨壷いう。 梨壷に和歌所が置かれ、梨壷の五人（梨壷の五歌仙、大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城））によって『万葉集』の訓読作業と並行して、撰集が行われた。

の詳しい歌が多く、当時流行の歌語りとかかわりを持っている。『拾遺集(しゅういしゅう)』は、はじめ十巻の『拾遺抄』が藤原公任(きんとう)①によって撰ばれたのを増補(ぞうほ)して、二十巻としたもので、その増補の部分には万葉集の歌が人丸(ひとまる)集・赤人集などを資料として多くとられている。『拾遺抄』の撰者公任は、古今集の歌風や貫之の歌論を正しく継承しようとし、當代に重んじられた歌人であったが、當時の女流文學の全盛期において、最も優れた歌人といえば、和泉式部(いずみしきぶ)であろう。その奔放(ほんぽう)な恋の歌には純粋切実なひびきで訴えるものがあり、まさに天性の歌人であった。

第四番目の勅撰集『後拾遺集』は、すでに院政期②に入り、白河院の家臣藤原通俊(ふじわらみちとし)によって撰ばれたが、その中には和泉式部の作や、後撰集時代の歌人で用語や表現に新奇な特色のある歌をよんだ曽根好忠(そねのよしただ)の作なども見られる。つづいて『金葉集(きんようしゅう)』が源俊頼(みなもととしより)を撰者とし、さらに『詞花集(しかしゅう)』が藤顕輔(けんふ)を撰者として先進され、この二つの集は『拾遺集』にならって十巻であったが、次に『千載集(せんざいしゅう)』が藤原俊成(しゅんぜい)により、ふたたび二十巻の集として編まれた。次の期の『新古今集』まで、古今集から数えて八代集と称する。

---

① （９６６年～１０４１年）関白頼忠の子で、当時歌壇の指導者。漢詩文・管弦・和歌の「三船の才」にすぐれる。

② 白河・鳥羽・後白河の三上皇が院政を行った時代。院政とは、上皇又は法皇帝が国政を行った政治形態。１０６８年白河上皇に始まり．承久の乱（１２２１年）以後衰える。

◎ 俊成と西行

『千載集』の藤原俊成（１１１４年～１２０４年）は、定家の父、保守派の藤原基俊の門人であったが、革新派の俊頼に傾倒した。顕輔や、その子清輔らの六条藤家に対抗して、独自の歌風と歌学をうち立てていった。清新な歌風を見せた源俊頼や、古典主義的な立場をとって俊頼と対立していた藤原基俊の考えをともに取り入れて、余情を重んじ、幽玄と呼ばれる世界を作り上げようとしていた。それが次の期の新古今集の歌風につながってゆくのである。

次の新古今集にもっとも多くの歌がとられ、後代に大きな影響を与えた歌人西行（１１１８年～１１９０年）が千載集に登場する。西行は、もと鳥羽院に仕える武士であったが、若くして出家し、各地を行脚修行し、多くの和歌を詠んだ。自然の中に浸かり、自らの人生を見つめて、その境地を淡々としたしらべにうたい上げ、人々に深い共感を与えた。家集『山家集』には、勅撰集にとられた西行の作とは異なった、現実を見据えた独自のよみぶりの

◎ 歌合と歌論

歌合は、左方と右方に分かれた歌人が詠んだ歌を左右一首ずつ詠み上げて優劣を競う遊戯のこと。歌を詠み上げるものを講師、優劣をつけるものを判者、その判定の根拠や理由を記したものを判詞という。歌合は九世紀の中ごろから始められ、初期は遊宴行事的な性格が大きい。それがだ

んだん和歌の優劣を競うことに重点がうつり、判者の批判内容を記録した判詞に、歌論としての深みが示されるようになってくる。俊頼・基俊らの歌合判詞を経て、俊成の判詞には、すでに歌論として見るべきものが多い。

歌論は、実質的には古今集の序にはじまるが、その後、歌合の隆盛に伴ない、その判詞と結びついて、数多くの歌論書が書かれるようになった。主な歌論書としては、公任の『新撰髄脳』以下、俊頼の『俊頼髄脳』、清輔の『奥義抄』『袋草紙』などがある。次期に入ってのことになるが、俊成の歌論が晩年に『古来風体抄』として集大成され、そこでは万葉集以来の歌風変遷の相を主体的に捉えて、和歌の本質に迫ろうとしている。

◎ 歌謡＿＿神楽歌・東遊歌・催馬楽・風俗歌

和歌と異なる道筋をたどって受け継がれた歌謡には、神楽歌・東遊歌・催馬楽・風俗歌がある。神楽歌は、神遊とも呼ばれ、神事に用いる歌舞のことで、八十首ほど現存する。東遊歌は、東舞ともいい、もと東国の民謡だったものが神事の歌舞になったもの。十首ほど現存。神楽歌・東遊歌が神事に用いられることに対して、、催馬楽・風俗歌が貴族の遊宴などで盛んに歌われたりした。このうち催馬楽は、もともと形式の自由な近畿地方の民謡だったが、唐楽風に仕立てられて詞章も旋律も楽譜として固定化され、大和笛・和琴・琵琶などの伴奏をつけて

歌われた。

◎ 朗詠____中期の歌謡

中期になると、朗詠(ろうえい)や和讃(わさん)などの歌う歌謡が流行した。朗詠とは楽器の伴奏つきで謡(うた)う歌謡のことで、これを集めたものに藤原公任撰の『和漢朗詠集』や藤原基俊の『新撰朗詠集』などがあり、後世の文学に多大な影響を与えた。『和漢朗詠集』は成立が１０１２年頃とされている。漢詩約五百九十編と和歌約二百二十首を収め、特に白居易の漢詩を多く収める。訓読された朗詠の詩句は、一種の翻訳文学としても貴重である。

◎ 今様____末期の歌謡

今様(いまよう)とは当世風(とうせいふう)の意で、遊女(ゆうじょ)や白拍子(しらびょうし)（男装で舞を舞った遊女）によって謡われた。主に仏・浄土・恋愛などを題材とする。院政期になると、今様という主に七五調の四句形式からなる新しい歌謡が大流行した。

この今様をはじめ、神事・仏会(ぶつえ)・遊宴などで当時流行していた各種の歌謡を総称して雑芸(ぞうげい)と呼び、『梁塵秘抄(りょうじんひしょう)』によって集大成された。『梁塵秘抄』は、撰者が後白河法王(ごしらかわほうおう)、成立が十二世紀後半で、二十巻中、現存するのは一割ほど。雑(ぞう)の歌には、庶民の生活に触れた野趣(やしゅ)豊かなものが多く、和歌の貴族趣味とは異なる世界を伝えている。

第三節　物語

一、物語の誕生、発展と衰退

八世紀初めの『古事記』や『日本書紀』編纂の際に、収録されることのなかった数多くの古伝承は、中国の伝奇類に影響されて、漢文や万葉仮名で筆録されるようになった。

やがて、かな文字が発明されて、日常語を用いた心情表現や情景描写ができるようになると、古伝承の型に準じつつも、上代の神話・伝説・説話とは性格の異なる、かな文字で記される物語という新しい文学形態に発展していった。

このような初期の物語には、古伝承などの架空の人物や事件を題材にした空想的な＜作り物語＞の系列と、これと前後して、当時の貴族社会で実際に語られていた歌物語を文字化し、あるいは歌の詞書を物語風に脚色して生み出されていた＜歌物語＞の系列との二つがある。

作り物語と歌物語の誕生に伴ない、この作り物語の虚構性と写実性、歌物語と和歌の叙情性、さらに日記文学の現実を凝視する内面性などを統合発展させて、『源氏物語』の出現にいたっては、物語は完成の段階になった。

『源氏物語』以後、数多くの長短編の物語が書かれたが、そのほとんどは散逸してしまい、わずかに『浜松中納言物語』

『夜半の寝覚』『狭衣物語』『とりかへばや物語』『堤中納言物語』などが現存するのみである。中古後期の物語類は、『夜半の寝覚』のように克明な心理描写に優れた佳作や、『堤中納言物語』のように近代短編小説的趣のある小品もあるが、多くは『狭衣物語』に代表されるように、『源氏物語』の影響を多分に受けており、その模倣の域を出ない。中には、『浜松中納言物語』のように、現実から遊離したものや、『とりかへばや物語』のように退廃的・官能的な内容の作品も表れ、衰退の兆を見せはじめた貴族社会の傾向を映し出している。こうして物語は、その土台であった貴族社会の衰退とともに創造力を失い、王朝時代を懐古する歴史物語や擬古物語へと受け継がれていくことになる。

◎『竹取物語』と作り物語の系列

作り物語は、中国の小説類、民間に伝わる古伝承、社会の出来事、あるいは身近な体験などを題材にしながら創作された物語なので、当初は伝奇的・空想的であったが、次第に現実的・写実的になった。

『竹取物語』は、作者は未詳、成立は九世紀末〜十世紀初めごろとされている。現存する日本最古の物語である。上代から伝わるさまざまな説話を題材として利用しつつ、貴族社会の現実を風刺を交えて鋭く描き出しており、上代の説話や伝説とは異なる物語としての独自性が認められる。

漢文訓読の和文体は平明かつ素朴で、美しく成長したかぐや姫(ひめ)が月の世界に昇天するという浪漫的・空想的な内容のこの物語は『源氏物語』の中で「物語のいできはじめの祖」と評される初期の物語の代表作である。

評論

竹の筒の中から見出(みいだ)された姫は、はじめは大層小さかったが、育てるうちに、ぐんぐん伸びて、普通の人の大きさになったという。竹は一夜(いちや)の中に、ぐんぐん伸びるので、古人はこれを不思議な植物として、神秘(しんぴ)的な力を持つものとして考えていた。それで櫛(くし)だの籠(かご)だのというような呪術(じゅじゅつ)に使う道具を竹で作った。かぐや姫を見つけ出した竹取の翁(おきな)は、その材料となる竹を採取する老人であった。竹も茸(たけ)も同じようにタケの語で呼ばれるが、その語は形容詞高しの語源を成すもので、いずれも急速に成長する性質に基づいて名づけられているのは、竹の精だからだとする解釈が成立するのである。竹の節のような、中のうつろな所に精霊が宿(やど)ると考えたのである。

——武田祐吉「竹取物語新解」

その後、作り物語は次々と書かれていたらしい。それらが多くは短編であったと思われる中で、長編物語としての『宇津保(うつほ)物語』が出現する。二十巻からなるこの物語は、俊蔭(としかげ)が唐へ渡る途中遭難して、波斯(はしこく)国へ着き、伝授を受け

たことの秘曲を娘に教えた話と、藤原の君と呼ばれた正頼の九の君あて宮をめぐる求婚の話が結びついて、長編となったもののようで、伝奇的な面と現実的な面を合わせもっている。また、物語の一つの類型となっていた継子(ままこ)いじめの話を、比較的手ぎわよくまとめあげた作品に『落窪(おちくぼ)物語』がある。

◎『伊勢物語』と歌物語の系列

歌物語は、歌を中心として筋が展開する物語であるため、すべて簡潔な文章で綴(つづ)られた短編で、叙情的・浪漫的である。

最初の歌物語は『伊勢(いせい)物語』で、作者は未詳、十世紀初め～中頃に成立したと推測されている。在原業平[1]になぞえられる主人公「昔男(むかしおとこ)」の生涯が、独立した百二十五段の短編によってほぼ一代風(いちだいふう)にまとめられている。物語に描かれる主人公の姿は、そのまま業平の実像に重なるわけではなく、さまざまな虚構が見られるそうした虚構の世界こそ人々が求めたものであり、時の権勢から退(ひ)き、「色好(いろこの)み」の世界に生きる主人公のひたむきな愛情の数々と優雅で洗練された＜みやび＞[2]の心が、優れた和歌と、簡潔で叙情

---

① （８２５年～８８０年）、平城天皇の皇子阿保親王の第五子、美男で恋多き歌人として知られている。

② 都会風に洗練された、上品で優雅な動作や状態をいう。『伊勢物語』の基調をなす美意識であると同時に、平安朝の人々の理想でもあった。

豊かな美しい文章によってつづられている。古来多くの人々に愛読され、『源氏物語』をはじめとする中古の物語、中世の謡曲など、後世の文学・文芸に与えた影響は極めて大きい。

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりにければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ふ。女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでなんありける。さて、この隣の男のもとよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ
　過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ
　君ならずして誰かあぐべき

などいひいひて、つひに本意のごとくあひにけり。

——『伊勢物語』二十三段筒井筒

口語訳

昔、田舎めぐりをしていた人の子供たちが、井戸のそばに出て遊んでいたが、大人になったので、男も女も互いに恥ずかしがっていたが、男はこの女をこそ妻にしようと思う。女はこの男を（夫に）と思っていて、親が結婚させようとしても聞き入れずにいた。さて、この隣の男のもとからこのように詠んできた。

筒井の井筒にくらべてはかった私の背丈も、井筒を越してしま

ったことだなあ。あなたに会わないうちに。

女からの返歌は、

あなたと長さを比べてきた振分髪も、もう肩を越してしまいました。あなた以外のだれのために結い上げましょうか。(ほかのだれとも結婚しない) などと詠みあって、とうとう念願どおりに結婚した。

山本健吉は、『古典と現代文学』の中で『伊勢物語』を次のように評している。

> 『伊勢物語』に描かれた業平の姿は、当時の青年たちの理想的な人間像としてであった。貴族の出で、容貌美しく、好色の聞こえ高く、また巧みな宮廷詩人として喧伝された男が、いろんな伝説・物語を、一首の結晶作用によって身のまわりに付着させ、ここに万人の理想とする肖像が出来上がったのである。

それに対してあとに成立した『大和物語』は、統一的な筋書きや主人公はなく、古伝承に取材した小説が雑然と収められている。『伊勢物語』に比べると写実的で、叙情性は劣るが、ともに後世、歌人必読の書として重んじられた。ほかには、色好み平中といわれた平貞文を主人公とした『平中物語』などがあるが、『伊勢物語』に見られた叙情性と奔放さは失われている。

◎ 紫式部と『源氏物語』

『源氏物語』の作者の紫式部は、生没年未詳。清少納言をはじめ多くのこの時代の女流作家がそうであるように、漢学の素養の深い国司の家の出である。祖父兼輔が名高い歌人。父藤原為時が当時屈指の学者である。幼年から和漢の教養を身につけており、学識の深さが高く評判された。結婚後二年余りの三十二歳ごろ一女とともに夫と死別する。これが契機となって、『源氏物語』を書き始めたといわれる。その後、道長の長女中宮彰子に仕えたが、１００８年ごろ宮廷での「源氏物語」の評判は非常に高かったことが知られる。１０１３年ごろ宮仕えを辞し、まもなく四十歳ほどで没したといわれる。

『源氏物語』の成立は、１００８年頃とされる。『枕草子』とつねに並んであげられる『源氏物語』は、日本文学の最高峰であるばかりでなく、今や世界文学史上での第一級の作品という評価を勝ち得ている。物語という虚構の世界を通して、主人公光源氏の生涯と、その子薫の半生を中心に、華やかな宮廷貴族社会の裏側に潜む愛と苦悩、理想と現実、人間の真実などの問題が真摯に追求され、写実的に描かれている。その期間は帝四代、七十年余にも及び、登場人物も約四百九十人にのぼるという、周到かつ巧妙な構想のもとに統一された、空前絶後の一大長編である。

五十四帖からなる物語は、主題の展開から、通常三部に分けて考える。

第一部は、「桐壷」から「藤裏葉」までの三十三帖で、主人公光源氏の出生から筆が起こされ、さまざまな恋の遍歴、失意の時代を経て、ついには准太上天皇の位に就き、栄化を極めるまでの華やかな青壮年期が描かれる。

第二部は、「若菜上」から「幻」までの八帖で、光源氏が正妻女三の宮と柏木の悲劇を通して、若き日の藤壷との許されぬ恋の罪に苦悩し、また最愛の紫の上をも失い、出家を覚悟するまでの晩年が語られる。

第三部は、「匂宮」から「夢浮橋」までの十三帖で、光源氏亡き後、その子薫(実は柏木の子)が出生への悩みから宗教に救いを求めながらも、宇治の姫君たちとの満たされぬ恋に落ちて苦しむ姿を中心として、姫君たちそれぞれの人生の哀感が切々と描き出されている。

このように、『源氏物語』は物語の展開とともに、またその主題も深まっていく。第一部では、従来の昔物語の伝統を多分に受け継いで非現実的な筋書きであったが、第二部では、その超人光源氏が悩み多き人間光源氏として生まれ変わり、第三部では、さらに現世の幸福よりも来世への憧憬が追求されるようになる。これは、九重の奥深くに理想の男性と世界を追い求めて書き始められた物語が、貴族社会の厳しい現実に触れて成長していく作者の姿と、忍び

寄る浄土(じょうど)思想①にゆれはじめた社会の姿とを映し出して、自律(じりつ)的に変貌(へんぼう)していった結果と言ってよい。

表現と文体は、自然描写の中に人間の心情を託すなど、心理描写にすぐれ、登場人物が類型的にならず、その性格や特徴を見事に書き分けてその内面も深く掘り下げられている。また、随所(ずいしょ)に趣ある和歌をちりばめつつ、繊細流麗(せんさいりゅうれい)な和文体でつづられたその文章は、かな文字で記された和文体の代表であるとともに、それを完成の域に導いたものとして名高い。

一方、全編、自然と人事とが微妙に融合した繊細な表現の中に、しみじみとした＜もののあわれ＞②の情緒(じょうちょ)を漂(ただよ)わせているが、これは成熟した王朝貴族文化の頂点を極める最高の美意識といえる。

> 須磨(すま)には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の「関ふき越ゆる」と言ひけむ浦波、夜夜は、げにいと近う聞こえて、またなくあわれなるものは、かかる所の秋なりけり。
>
> ——『源氏物語』須磨巻

---

① 浄土信仰。空也の説く「厭離穢土・欣求浄土」の思想で、ひたすら極楽往生を願う信仰。

② 人生や自然の折々にふれて起こるしめやかな情緒を指す。日本国学三大人の一人、江戸時代の国学者本居宣長は、『源氏物語玉の小櫛』の中で、『源氏物語の本質は＜もののあわれ＞にあると主張した。従来の儒教や仏教の功利的・道徳的文学観を否定して、文学の自立性を説いた批評意識の先駆として注目される。

口語訳

須磨では、ひとしおものを思わせる秋風のために、海はすこし遠いけれども、行平の中納言が「関ふき越ゆる」と詠んだという浦風に荒れる波音が、夜ごと、実にたいそう近くに聞こえて、この上なく心にしみるのは、こういう所の秋なのだった。

二、歴史物語

平安時代後期、隆盛を極めた貴族社会が次第に衰退しはじめると、貴族たちは過去の栄光時代を懐古し、それを記録として留めようとした。こうして歴史を記述しようとする気運が高まり、また、物語の復興を目指して、過去の歴史的な事実に題材を求めてかなで記された歴史物語が生まれた。この中に『栄化物語』と『大鏡』がある。

『栄化物語』は、日本最初の歴史物語で、正編と続編に分けられている。正編は１０２８年～１０３７年ごろ成立で、作者赤染衛門(あかぞめえもん)か、続編は１０９２年以後成立で、作者未詳。六国史の後を継ぎ、宇多(うだ)天皇から堀河(ほりかわ)天皇までの約二百年間の歴史が編年体でつづられている。『源氏物語』を模範として藤原道長[1]の栄化を中心に描き、道長との政争

---

[1] （９６６年～１０２７年）。藤原兼家に五男。一条天皇の中宮定子をはじめ、四人の娘を次々と入内させ、一条・三条・後一条の天皇三代にわたり、一の人として摂関政治の栄化を誇った。「この世をば我が世とぞ思ふ 望月のかけたることの無しと」の名句がある。

に敗れていった多くの貴族たちには強く同情を寄せながらも、道長の謀略については触れず、ひたすら道長を賛美している。全体的に感傷的な筆致で、政治の醜い部分については触れられず、歴史に対する批判性は欠けている。

十一世紀末ごろ成立した『大鏡』は、『栄化物語』と同じく、藤原道長の栄化を中心とした歴史物語で、最初の鏡物①である。文徳天皇に始まり後一条天皇までの十四代、百七十六年間が、紀伝体で書かれている。後一条天皇の１０２５年を現在として、百九十歳の大宅世継と百八十歳の夏山繁樹という二人の老人が、問答形式で百七十六年間の見聞を語るという戯曲的な形式をとっている。道長への賛美だけに終わらず、非情な政界についても描かれており、歴史に対する批判性を一つの特徴としている。物語という虚構の形式を用いながら、歴史の真実に迫ろうとする歴史意識が見られる。

評論

『源氏物語』の作者とその流派との仕事は、あくまで「後宮」的現実において営まれたのであり、気取っていえば、あそこに提出されている人生は、後宮の簾越しに眺めた、仄暗い世界なのである。そして、その世界を設定したのは、つまり後宮を経営したのは、当時の政治権力者たちであるが、それは帝王の歓楽のため

---

① 「鏡」とは、いにしえを明らかに写し出すものという意味。『大鏡』をはじめ、続く『今鏡』『水鏡』『増鏡』をあわせて、<四鏡>という。

に造られた人後楽園であり、権力者たちは、あの後宮の外で、政治を行い、生活を営んでいたのである。ということを、私たちに知らせてくれる貴重な書物が『大鏡』なのである。

——中村真一郎『王朝文学論』

三、説話

説話とは、広い意味では、民間に語り伝えられた物語・神話・伝説・童話などの総称のこと。狭い意味でいうと、作られた話に対して、民間に伝わる話のこと、つまり、人々の周囲に起こった興味深い出来事などをまとめたものである。

説話は、口承の時代からすでに存在し、『古事記』や『日本書紀』にその原形が見られるが、奈良時代後期になると、庶民の間に仏教が広がりはじめ、仏教を平易に説くために、高僧の事績やさまざまな出家譚などを述べた仏教説話が起こった。平安時代初期にはこれを集めた最初の仏教説話集『日本霊異記』が編まれ、つづいて『三宝絵詞』『打聞集』が編まれた。

一方、『源氏物語』を頂点とした物語文学が衰退しはじめると、貴族たちは庶民の生活に関心を向けはじめ、文学の題材はその周辺に求められるようになった。庶民の間で伝

えられた説話は世俗説話と呼ばれ、仏教説話とともに素朴な口調の文章で、物語文学には見られないような人間の生き生きとした姿を写し出している。

◎『今昔物語集』

十二世紀前半に成立した『今昔（こんじゃく）物語集』は、一千余りの説話が三十一巻（現存二十八巻）にまとめられており、天竺（てんじく）の部、震旦（しんたん）の部、本朝（ほんちょう）の部の三部から成っている。これらは仏教説話と世俗説話とに大別されるが、特に世俗説話はバラエティーに富み、強盗・殺人・詐欺（さぎ）などの話を集めた「悪行（あくぎょう）」の巻、前世の約束ごとによって現在の善（よ）し悪（あ）しが決まるという因果応報（いんがおうほう）の話を集めた「宿報（しゅくほう）」の巻、精・鬼・霊などの奇々怪々な話を集めた「霊鬼（れいき）」の巻などがある。そこには、庶民や武士、盗賊などさまざまな人々や、さらには鬼・狐・蛇などが、漢字かな交じりの簡潔な文体で生き生きと描かれており、この文体は、中世の和漢混交文の先駆ともなっている。

『今昔物語集』は近代にまで影響を及ばしており、芥川龍之介の『羅生門（らしょうもん）』『鼻』『芋粥（いもがゆ）』、谷崎潤一郎（たにざきじゅんいちろう）の『少将滋幹（しょうしょうしげもと）の母』、福永武彦（ふくながたけひこ）の『風のかたみ』などは、これに取材したものである。芥川龍之介（『今昔物語』鑑賞）は、次のような評がある。

『今昔物語』の作者は、事実を写すのに少しも手加減を加えていな

い。これは僕ら人間の心理を写すのにも同じ事である。尤(もっと)も『今昔物語』の中の人物は、あらゆる伝説の中の人物のように複雑な心理の持ち主ではない。彼らの心理は陰影(いんえい)に乏しい原色ばかり並べている。しかし今日の僕らの心理にも如何(いか)に彼らの心理の中に響き合う色を持っているであろう。銀座は勿論朱雀大路(すざくおおじ)ではない。が、モダアン・ボオイやモダアン・ガアルも彼らの魂(たましい)を覗(のぞ)いて見れば、退屈(たいくつ)にもやはり『今昔物語』の中の青侍(あおさむらい)や青女房(あおにょうぼう)と同じことである。

第四節　日記と随筆

一、日記

日記は、もともと備忘録(びぼうろく)として公務や行事・儀式などの記録をつけるために書かれたもので、主に男性官僚の手によって、漢文で書かれていたが、女性を中心としてかな文字が普及すると、自己の心情を自由につづったかな文字の日記が書かれるようになった。

この記録を目的としない日記は、紀貫之が女性を装(よそお)って書いた『土佐(とさ)日記』によって、一つの文学形態として確立され、『蜻蛉(かげろう)日記』を経て、宮廷の女性たちの手によって、盛んに書かれるようになった。

◎『土佐日記』

『土佐日記』は、作者紀貫之、成立９３５年頃で、かな文字で書かれた日本最初の日記文学である。

紀貫之（８７２年～９４６年頃）は、『古今集』撰者の一人であり、その「仮名序」で名高い。理知的な和歌を多く作った。歌人としての実力はあったが、官位には恵まれず、晩年（９３０年）、土佐の守（かみ）に任じられた。

『土佐日記』は、土佐守の任（にん）を終えた紀貫之が、９３４年に土佐を出発し、京（きょう）の自宅へ帰り着くまでの五十五日間を描いた旅日記である。貫之は自（みずか）らを女性に仮託し、当時女手といわれたかな文字を用いることで、土佐で亡くした幼い娘への哀惜（あいせき）を基調として、海路の不安や帰京の喜びなど、自己の私的な感情を、虚構を交えながら表現することに成功した。このように、自照的と虚構性を合わせもった『土佐日記』は、新しい日記文学の形態を創り出し、後の女流日記文学隆盛の火付け役ともいえる意義をもつ。

男もすなる日記（にき）といふものを、女もしてみんとてするなり。それの年の十二月二十一日（しわすのはつかあまりひとひ）のひの戌（いぬ）のときに門出す。その由、いささかにものにかきつく。

——『土佐日記』冒頭

口語訳

男も書くという日記というものを、女の私も書いてみようと思

って書くのです。ある年の十二月二十一日の日の戌の刻に出発します。その様子を、少しばかり紙に書き付けてみます。

◎『蜻蛉日記』

『蜻蛉日記』は、上・中・下の全三巻。作者藤原道綱母[1]、成立974年以後で、女性の手による最初のかな日記である。作者自身の満たされない結婚生活の苦悩と煩悶を、二十一年にわたって回想的に書き綴った作品である。中流出身で、権門の妻妾の一人となった道綱母が、夫の専心な愛を求めて苦悩を重ねながら、やがて一子道綱への愛に生きていくまでの作者自身の心情が、露骨なまでに描写されており、自照性を備えた女流日記文学の先駆けとして、『源氏物語』をはじめ後世の文学に与えた影響は大きい。たとえば、堀辰雄は『蜻蛉日記』を翻案し、小説『かげろふの日記』、その続編『ほととぎす』を、室犀星は『かげろふの日記遺文』を書いた。

かくありし時すぎて、世の中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、世にふる人ありけり。

かたちとても人にも似ず、こころたましひもあるにもあらで、かうものの要にあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすままに、……

——『蜻蛉日記』冒頭

---

[1] 生没年未詳。954年、二十歳のころ、藤原兼家と結婚し、翌年道綱を生んだ。歌才の高い美人である。

口語訳

若かりし日も過ぎ去って、世の中でたいそう頼りなく、どちらとも決め兼ねて結婚生活を送っている人がいた。

容貌も人並み以下で、思慮深さもろくになく、このように（夫から）必要とされずに過ごしているのも、当然だと思いながら、ただ寝たり起きたりして毎日を過ごしているうちに、……

◎『和泉式部日記』

『和泉式部日記』は、作者和泉式部[1]とされる。成立1007年で、和泉式部と帥宮敦道親王（そちのみやあつみちしんのう）との恋を、出会いから十ヶ月余りにわたって書き綴った物語風の日記である。和歌に優れた二人の百四十首余りの贈答歌を中心にして、二人の愛を抒情的に描いている。

夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日（うづきとおよひ）にもなりぬれば、木の下暗がりもてゆく。

——『和泉式部日記』冒頭

口語訳

夢よりもはかない人の世を嘆きはかなみ続けて、明かし暮らしているうちに、四月も十日過ぎになってくると、木の下がだんだん暗くなっていきます。

---

[1] 生没年未詳。和泉守橘道貞と結婚し、歌人小式部内侍を生む。中宮彰子に仕えた。恋多き情熱歌人として有名。

◎『紫式部日記』

『紫式部日記』は、作者紫式部、成立１０１０年で、紫式部は、中宮彰子に仕えていた時の宮仕えの記録で、彰子の出産を中心とした華やかな宮廷生活を描いている。後半部分には、消息文（手紙）があり、清少納言や和泉式部など、女房仲間に対する人物批評が書かれ、中でも、清少納言に対する批判は痛烈である。

清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書きちらして侍(はべ)るほども、よく見れば、まだいとたへぬこと大かり。……そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らむ。

——『紫式部日記』

口語訳

清少納言という人こそ、得意顔でひどくいやな人です。このように利口ぶって漢字を書き散らしていますのもよく見ると、まだたいそう十分でない点がございます。……そんな軽薄になった人の行く末が、どうしてよいものでありましょうか。

◎『更級日記』

『更級(さらしな)日記』は、作者菅原孝標女(すがわらのたかすえのむすめ)①、成立１０６０年頃で、

---

① （１００８年～？）、藤原道綱母の姪にあたる。『更級日記』のほか、多作の執筆者とされる。

作者の十三歳から五十二歳までの四十年間を回想した自伝的日記である。物語の世界にあこがれた少女時代から、親しい人々の死別・宮仕え・結婚生活を経て、夫と死別し、孤独に老(お)いてゆく晩年までが描かれている。底には、現実に傷付けられた作者の浪漫的で繊細な感性が現れている。

二、随筆

随筆とは、日記のような時間や場所などの制約や形式にとらわれることなく、筆者のとりとめもない思いや考えなどを自由につづったものであり、批評性や自照性に富んでいる。この文学形態は、清少納言の『枕草子』によって切り開かれ、鎌倉時代の『方丈記』や『徒然草』に受け継がれていく。

◎ 清少納言と『枕草子』

清少納言は、『枕草子』の作者で、生没年未詳。「梨壺(なしつぼ)の五人」の一人である歌人、清原元輔(きよはらもとすけ)の娘。女性ながら男性必須の教養である漢詩文に通じていた。二十八歳ごろの９９３年ごろに一条天皇の中宮定子(ちゅうぐうていし)に出仕(しゅっし)し、その寵愛(ちょうあい)を得るが、定子の死後、宮仕えを辞し、晩年は不遇(ふぐう)であったといわれる。

『枕草子』の成立は、１００１年頃とされる。内容と構

成については、作者が中宮定子[①]に出仕していた際、宮廷生活で見聞・体験した自然や人事について自由な筆致でつづっており、作者の自然に対する鋭い感性や美意識、また人間に対する知的な批評精神が随所に見られる。長短さまざまな三百二十の章段からなり、その内容から次の三つに分類される。

○ 類聚（るいじゅう）的章段　「ものづくし」と呼ばれる段で、作者の鋭い感性のままに、同種のものを列挙し、感性を述べたものである。「山は」「鳥は」などのような「―は」型のものと「うつくしきもの」や「すさまじきもの」などのような「―もの」型のものの二種がある。

○ 日記的章段　中宮定子を中心とした華やかな宮廷生活の回想がつづられており、日記回想的章段ともいう。定子の不遇には触れず、定子への賛美が中心になっている。また、作者と定子や殿上人との機知（きち）に富んだやりとりも記されている。

○ 随想的章段　もっとも随筆らしい章段で、「春はあけぼの」のように、自然や人事についての感想を自由につづっている。

文章の表現と文体は、簡潔で軽妙、単純明快な文章で、客観的な眼でとらえた対象を鮮明に描き出している。表現

---

① （976年～1000年）、藤原道隆の娘。一条天皇の中宮となり、道隆家の栄化を支えた。父道隆死後、兄弟の政界での失脚のため、道長の権勢に押され、不遇のうちに二十五歳の若さで亡くなった。

は多少皮相的ともいえるが、そのため作者の客観性や知性がより発揮され、『源氏物語』の＜もののあわれ＞の世界に対して、＜をかし＞[1]の世界を形成している。

春はあけぼの。やうやう白くなり行く山ぎは、少しあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうちひかりて行くもおかし。雨など降るもをかし。

——『枕草子』第一段

口語訳

春は明け方が情緒がある。次第に白んでゆく山沿いの空が、少し明るくなって、紫がかった雲が、細くたなびいているのが趣深い。

夏は夜だ。月の出ている頃は言うまでもないが、月の出ていない闇夜もやはりいい。蛍がたくさん飛び交っているのもいい。また、一匹、二匹と、かすかに光って飛んでゆくのも風情がある。雨が降るのもおもしろい。

---

① a、瞬間的な感動。 b、客観的・理知的・好意的。 c、あかるく華やか。 d、知性や批判意識を伴なう。これに対して、＜あわれ＞＿＿a、しみじみとした感動。 b、対象に没入して主観的。 c、詠嘆的でしめやか。

第五節　芸能

生活の安定と平安を祈る歌舞が、上代の祭りに引き続いて寺社や地方、庶民の間で行われる一方、宮中の式楽①は国風化の波に乗って、日本人の感性に合うように、整理・統合が行われ、外来の楽の追加、日本人による新作の創作、音階の改正、楽器種の整理、組織の改編などが行われた。

◎ 雅楽

雅楽は、唐、百済、新羅、高麗などから伝来した楽と、これに倣って作られた日本の楽を指し、舞を伴なうものを舞楽という。今日、宮内庁や大阪の四天王寺などに伝承されている。

当時、宮中や大寺社で行われる雅楽は、雅楽寮の専門の楽人が担当したが、やがて貴族の間にも広まり、楽器や舞そのものの習得が重んじられ、和歌に次ぐ貴族の教養としてその生活に浸透していき、宮中の年中行事や祝賀の場においては、貴族の子弟も楽舞に参加するようになった。『源氏物語』をはじめ、日記・随筆・歴史物語には楽舞の名手や楽舞にまつわるエピソードが多数描かれている。

---

① 儀式に用いる音楽や舞踊。律令体制下で外来文化の摂取が盛んなころに移入された伎楽・雅楽・散楽のうち、雅楽は今日まで残る式楽として、朝廷や大寺社の儀礼で行われてきた。

◎ 田楽

特定の楽人によってのみ伝承された雅楽が、儀礼的・形式的なものとなり、新鮮さが失われていく一方で、民間では、朝廷に吸収されなかった芸能が生き生きと行われていた。

古代の人々が、豊作を祈願して田の神を招き、笛や太鼓の伴奏で歌い踊った稲作派生した田楽は、平安末期、都で爆発的に大流行し、『栄化物語』や『今昔物語集』などにもその様子が見える。華美な衣装や躍動的な踊りが新鮮な印象を与え、貴族の間にも流行し、１０９６年には、堀河天皇や白河院までが見物するほどであった。現在でも田楽を伝承している寺社がある。

◎ 猿楽

雅楽とともに移入された散楽①は、曲芸や手品といった傾向のものであった。それに滑稽な物まねの芸をあわせた幅広い分野をもつのが猿楽である。専門な芸人が寺社の祭礼で行うことが多かったが、時に貴族の前で披露することもあった。田楽のように一時的に流行するだけでなく、次代へ受け継がれ、能や狂言に分化し、大成していった。また、平安後期には、男装した女性が今様を歌いながら、舞

---

① 唐の西域地方から伝わった民間芸能で、正式な楽である雅楽に対するものである。今中国の民間雑技に似ている。

う白拍子(しらびょうし)[1]の舞が行われた。

練習問題

(一) 次の「古今和歌集」に関する各問いに答えてください。

問一 撰集の勅命を出したのはだれか。

問二 選者はだれか。次の（ア）—（カ）の中から適当なものをすべて選んでください。

問三 「仮名序」を書いたのはだれか。

（ア）紀貫之　（イ）在原業平　（ウ）凡河内躬恒

（エ）紀友則　（オ）藤原俊成　（カ）壬生忠岑

問四 第二期の代表歌人である僧正遍昭．文屋康秀．在原業平．小野小町．喜撰法師．大伴黒主らを総称して何というか。

(二) 次の空欄（1）—（8）に入れるのに適当なものを、後の（ア）—（コ）の中から一つずつ選んでください。

「（1）」はわが国最初の作り物語で、かぐや姫を主人公とする浪漫的．空想的．神秘的な内容である。作り物語には、ほかに、最初の長編物語である「（2）」や、継子いじめの物語「（3）」などがある。

「（4）」は（5）になぞらえられる主人公「昔男」の生

[1] 男装して今様を歌い舞う女性の芸人。また当世風の即興的な歌舞の名。

涯を一代記風にまとめた歌物語で、優雅で洗練された（6）の心がつづられている。歌物語には、ほかに、平貞文を主人公とする「（7）」や特定の主人公をもたない「（8）」などがある。

（ア）平中物語　（イ）竹取物語　（ウ）大和物語

（エ）落窪物語（オ）伊勢物語　（カ）宇津保物語

（キ）在原業平　（ク）紀貫之　（ケ）みやび

（コ）をかし

（三） 次の各問いに答えてください。

問一 わが国最初のかな書きの日記はなんか。次の（ア）—（オ）の中から一つ選んでください。

（ア）「更級日記」　（イ）「紫式部日記」　（ウ）「蜻蛉日記」

（エ）「土佐日記」　（オ）「和泉式部日記」

問二 問一の（ア）.（ウ）.（エ）の作品の 作者として適当なものを、次の（a）—（c）の中から一つずつ選んでください。

（a）菅原孝標女　（b）紀貫之　（c）藤原道綱母

（四） 次の文中の空欄（1）—（6）に入れるのに適当なものを、後の（ア）—（コ）の中から一つずつ選んでください。

「源氏物語」は（1）によって書かれた古典文学の最高傑作といわれる作品で、主人公（2）の生涯と、その子薫

の半生を中心につづった全（3.）貼から成る長編物語である。江戸時代の国学者本居宣長は、「源氏物語」の本質は＜（4）＞にあると主張した。「源氏物語」以後その影響を受け、「（5）」、「夜半の寝覚」、「（6）」などの数多くの物語が書かれたが、物語は徐々に哀退したいった。

（ア）清少納言　（イ）紫式部　（ウ）百　（エ）五十四　（オ）もののあわれ　（カ）をかし

（キ）浜松中納言物語　（ク）伊勢物語（ケ）狭衣物語（コ）光原氏

（五）「枕草子」に関する次の各問いに答えてください。

問一 作者はだれか。

問二 作者の父はだれか。また、その人物が選者となった勅撰和歌集は何か。

問三 作者が女房と仕えていた人物はだれか。

第三章　中世の文学

第一節　中世文学の概況

一、時代と背景

鎌倉幕府成立（１１９２年）から江戸幕府成立（１６０３年）までのおよそ四百年間を中世とする。平安時代末、平氏が政権をとって以来、武家（ぶけ）が政治の中心となったが、権力をめぐる戦乱が相次ぎ、政権はめまぐるしく交代していく。この不安定な政情のもとで、貴族は没落しつつも文化的影響力を保ち、また、武士相互の対立は下剋上（げこくじょう）の風潮を生んだ。一方、生産性の向上や流通機構の整備・拡大により庶民や地方人の動きが活発した。こうした状況は人々の現実意識を高めるとともに、伝統的なものへの憧憬（しょうけい）、異文化への関心などに基づく多様な世界観・新しい価値観を生み出すことになる。

二、文学理念と文学形態

武士の時代になっても、貴族は王朝美の継承に努めた。揺れ動く現実から目をそらし、和歌の世界において、余情・妖艶の美を追求した。勅撰集の撰進が打ち切られる室町時代中頃までこの傾向は続いたが、美的理念として階層を超えて定着したのが幽玄である。奥深く、繊細で象徴的な情緒を意味する幽玄は、和歌ばかりでなく、ほかの分野にも及び、中世の中核でもあり、その後の日本人の美意識の一つの底流ともなるものである。

社会の変革と混乱の中で現世の無常を感じる人々の前に、新しい仏教が次々とおこった。念仏、あるいは題目を唱えることで浄土に導かれ、教われるというものである。新仏教はたちまちのうちに武士や庶民の間に広まった。この仏教的な無常間を背景にして人生や人間、社会を見つめて描いた文学が、中世を特徴づけている。物語や随筆の中にその傾向が見られ、それらには隠者と呼ばれる出家した人々が多く関わっている。

平安時代に発展した和歌の伝統は中世においても継承され、多くの歌集が編まれた。それに伴い、歌論も頂点に達した。古くから行われていた連歌も一つの形態として独立し、広く流行して、俳諧の連歌へと発展していく。物語で

は、『平家物語』に代表される軍記物語が盛んに書かれ、歴史物語や史論とともに、この期の特色をなしている。随筆や説話集も前代に引き続き書かれたが、御伽草子が新しい形態として登場する。また、芸能の分野では、世阿弥によって能が完成され、芸能としてだけでなく文学としての資質をも高めた。

三、表現者、表現言語と享受層の変化

貴族層は、没落しつつあったが、精神的には文化の動向に影響力をもっていた。とりわけ雅の世界である和歌においては、貴族の活動は無視できない。しかし、軍記物語や連歌、能の分野では盲目の法師や寺社に隷属した芸能民など、一般庶民が活躍している。商業の発達により町人層が文学の世界にも顔をだし、表現活動に参加するとともに、その享受者となり、また、能においては身分の上下を超えて味わい楽しむ雰囲気が生まれていた。

表現形態が多様化すると、その言語にも新しいものが見られるようになった。語り物である軍記物語として、和漢混交文という新しいスタイルが広まり、口語の使用による生き生きとした表現がとられた。武士や庶民の語り口がそのまま文章化され、それまでにない語法や音韻が表面化したためである。また、中世末には印刷機が移入され、近世に向かってさらに変化を促してゆく。

第二節　詩歌

一、和歌

若くして上皇となった後鳥羽院①は、政治の実権を握った武士階級に対抗するとともに、貴族の伝統文化である和歌に深い関心を寄せ、「六百番歌合」や「千五百番歌合」などの歌合や歌会を熱心に行い、藤原定家や藤原家隆などの新風歌人を取りたてて、歌壇は活況を呈した。中でも院自らが撰集に携わった『新古今和歌集』が、王朝的伝統の上に立ちながら、妖艶で象徴的な、空前の唯美的世界を築き上げたものとなった。その後、ますます武家社会が進展してゆく中で、「十三代集」と呼ばれる十三の勅撰和歌集が作られたが、保守的で新鮮味の乏しいものが多い。しかし、『新古今集』で示された象徴美の世界は、中世的伝統として連歌や能楽に引き継がれ、展開してゆくことになる。

◎ 『新古今和歌集』

１２０１年、後鳥羽院は、源通具・藤原有家・藤原定家・

---

① １１８０年～１２３９年。平家都落ちの直後に即位。１１９８年に譲位し院政を開始。１２２１（承久３）年、鎌倉幕府討伐を企てた承久の変を興し敗北。隠岐に流されて没する。和歌・連歌・管弦・蹴鞠のほか、文武両道にわたり多芸多才。

藤原家隆・藤原雅経・寂蓮の六名を選び、八番目の勅撰和歌集の撰進を命じた。１２０５年に完成披露が行われたが、その後も院自らの手で改訂作業が続けられ、「八代集」の最後を飾る『新古今集』が成立した。全二十巻で、上代から当代までの歌、約二〇〇〇首が収められているが、撰者ら当代歌人の歌と、西行・藤原俊成などの中古末期の歌人の歌が主流を占めている。

『新古今和歌集』の歌風は、「新古今調」と呼ばれ、古歌や王朝の物語などを踏まえたり、縁語・掛詞を多用したりしてイメージを重層化しており、また、初句切れ、体言止めによって映像を鮮明にし、言外に豊かで複雑な余韻余情を漂わせている。体験や感想を表現しようとするのではなく、美しい言葉の響きや組み合わせによって、虚構の美を表現しようとしており、その背景には、藤原俊成の唱えた＜幽玄＞①や、その子定家の唱えた＜余情妖艶＞②の美意識が流れている。

見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋と何思ひけん

――後鳥羽院　巻一

口語訳

見渡せば、山の麓が霞んでいる水無瀬川、夕暮は秋が一番だと、

---

①　直接見える形や言葉に表すことなしに、余情・気配として感得させる深遠で雅な美しさを指す。
②　言外に余情・気配として感得させる優雅であざやかな美しを指す。

なぜ思ったのだろう。

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮

___西行 巻四

口語訳

趣を解さぬ私の心にも、秋の哀感は感じられる。鴫に飛び立つ沢の秋の夕暮よ。

◎ 小倉百人一首

小倉山荘色紙和歌ともいう。撰者には定家撰、定家撰後人補訂の両説がある。

宇都宮頼綱（為家の妻の父）が、嵯峨の中院の山荘の障子に色紙を貼ろうとして、近くの小倉山荘に住む定家に選歌と揮毫を依頼し、１２３５年ごろ、定家がまず『百人秀歌』を選び、それを色紙に書いておくのが草案であろうといわれる。その『百人秀歌』は、『小倉百人一首』に見られない三人の人の歌が入っており、後鳥羽院・順徳院の歌がなく、源俊頼の歌が異なっており、歌の順序も異なっており、計１０１首の歌がある。それをもとに、後の人が手を加え、三人を省いて両院を加え、現在の『百人一首』になったと推定されている。

天智天皇から順徳院に至る百人の歌人の秀歌を一首ずつ収めている。江戸時代の初期には、歌がるたとして広く一

般に普及した。

◎ 源実朝と『金槐和歌集』

源実朝（１１９２年～１２１９年）は、源頼朝と北条政子の二男で鎌倉幕府の三代将軍。都に憧れ、和歌・管弦などに親しんだ。和歌の面では藤原定家に師事し、定家は歌論書『近代秀歌』を書き送っている。鶴岡八幡宮で甥の公暁により、二十八歳の若さで暗殺される。

『金槐和歌集』は源実朝の私家集で、１２１３年に成立した。鎌倉に武士による政治的基盤が確立すると、京都鎌倉間の往来が盛んになり、東国の武士社会にも都の文化は盛んに流入するようになった。その中で、京都の文化に強い憧憬を持つ三代将軍源実朝は、『新古今集』を入手したり、藤原定家から添削指導を受けたりして歌作に励み、自撰家集『金槐和歌集』を編んだ。これには実朝二十二歳までの歌が収められている。大らかで風格のある詠みぶりで、万葉調の歌に特色があり、正岡子規や斎藤茂吉らに高く評価された。

◎ 定家とその後

定家（１１６２年～１２４１年）は、藤原俊成の子、『新古今和歌集』の撰者の一人で、『新勅撰集』の撰者でもある。家集に『拾遺愚草』、日記に『名月記』がある。また、歌論も多く書いている。

超現実的な唯美的世界を構築することを目的とした藤原定家の歌は、最初は難解な歌として反発を受けたが、後鳥羽院に受け入れられると、新古今時代を代表するものとなっていた。特に、定家がその歌論書の中で和歌の最高の体として説いた＜有心＞①は、父俊成の説いた＜幽玄＞とともに中世歌論の重要理念となった。また、定家の示した非リアリズムの美的世界は、連歌や能楽などの中でさらに展開し、日本の芸術に一つの長い流れを形作るものとなった。

定家の没後、その子為家が御子左家として歌の家を継ぐが、為家の子の代で二条・京極・冷泉の三家に分裂した。それぞれの家が皇室内の政治的対立と関わって撰者の地位を争い、次々と勅撰和歌集を撰進した。

◎ ＜十三代集の撰進＞

『新古今和歌集』に続いて撰進された十三の勅撰和歌集を「十三代集」②と呼ぶが、「十三代集」の撰者としては二条派が主流であった。しかし、歌風の面では京極為兼の撰進した『玉葉和歌集』と、為兼の指導を受けた花園院が甥の光厳院らに作らせた『風雅和歌集』が新鮮で、鋭敏な感覚の叙景歌に秀作が多い。

---

① 心を澄ませて対象に精神を集中させるところから生まれてくる、心に響く深みのある表現。

② １、新勅撰　２、続後撰　３、続古今　４、続拾遺　５、新後撰　６、玉葉　７、続千載　８、続後拾遺　９、風雅　１０、新千載　１１、新拾遺　１２、新後拾遺　１３、新続古今

◎ 和歌論

平安時代の末から鎌倉時代にかけては、『古今集』などの伝統和歌を対象とする歌学が発達するとともに、藤原俊成・定家父子によって＜余情妖艶＞＜有心＞といった言葉で歌の理想が説かれるなど、当代の和歌のあり方が盛んに追求され、中世歌論が展開していった。歌論書も多く書かれ、藤原俊成[1]の『古来風体抄(こらいふうていしょう)』をはじめ、藤原定家の『近代秀歌』『毎月抄』、鴨長明(かものちょうめい)の『無名抄(むめいしょう)』、正徹(しょうてつ)の言葉を集めた『正徹物語』などが有名である。

また、歌の家を守ることに腐心(ふしん)した二条派には、頓阿(とんあ)や二条良基(にじょうよしもと)[2]などの優れた歌人が出て、平淡美を尊(とうと)び、『古今集』を範とする二条派歌学が継承される。一方、冷泉派の今川了俊(いまがわりょうしゅん)・正徹(しょうてつ)・新敬(しんけい)などは、彼らの歌論書の中で＜幽玄＞＜有心＞論を述べ、俊成・定家の風を慕(した)い、『新古今和歌集』を重視する主張をした。

二、連歌

十三世紀の後鳥羽院歌壇の隆盛期は、連歌が盛んになっ

---

[1] （１２８９年～１３７２年）、和歌を二条為世に学ぶ。兼好法師らと共に、和歌四天皇といわれる。

[2] （１３２０年～１３８８年）、北朝の最高貴族。和歌を頓阿に学ぶ。当時の文壇の指導者。

た時期でもある。連歌は、短歌の上の句と下の句を二人で分けて詠み、問答や掛け合いを楽しんだのが始まりで、上代から行われていた。しかしこの時代には、長句（五七五）と短句（七七）を交互につけながら、長くつなげてゆく長連歌（ながれんが）が流行し、新鮮味を失っていく和歌に代わって、目を見張るような発展・展開をした。

長連歌は、一貫したテーマをもつものではなく、前の句に新しい句がつけられるたびに情景や情緒が転じてゆくおもしろさを楽しむことができる。形式としては、五十韻（五十句）、百韻（百句）、歌仙（三十六句）などがある。第一句目を発句（ほっく）、二句目を脇句（わきく）、最後を挙句（あげく）という。

◎ 有心連歌と無心連歌

連歌は二句の間の機知や滑稽を楽しむものとして発生したが、新古今時代の貴族たちは、言葉遊び的な面を楽しみながらも、和歌的な優雅な情趣の長連歌を行うようになる。堂上（どうじょう）[1]歌人によって完成されたこうした連歌を有心連歌（柿本連歌）という。一方、滑稽・諧謔（かいぎゃく）を楽しむ連歌は、無心連歌（栗本連歌）と呼ばれ、庶民の間に流行し、十三世紀半ばごろには、地下（じげ）[2]の人々により都の寺社の境内（けいだい）の花の下などで盛んに連歌の会が催され、こうした連歌を「花の下（もと）連歌」とも称した。

---

① 清涼殿の殿上の間に昇殿を許された殿上人のことを堂上貴族という。
② 昇殿を許されない一般貴族や庶民。

◎ 連歌の指導者と俳諧連歌

南北朝時代（１３３３年～１３９２年）、時の関白であり、二条派和歌の大家でもあった二条良基は、地下の連歌師である救済の助力を得て、最初の連歌撰集『菟玖波集』を成立させた。これが勅撰集に準ぜられ、連歌の地位は大いに高められた。また、良基は、『応安新式』（連歌新式）を制定して連歌の式目（規則）を統一したり、＜幽玄＞を連歌の最高の美的理念として、『筑波問答』などの連歌論を著したりしながら多くの人を指導した。

室町時代（１３３３年～１５７３年）の中期、東山文化の時代には、連歌七賢と呼ばれる人々が現れ、その一人、心敬は、『ささめごと』などの連歌論書で、＜冷え＞＜寂び＞＜艶＞という言葉で連歌の理想の趣を説き、歌人の内面的充実を説いた。

応仁①前後の混乱期、宗祇によって連歌は完成された。弟子の肖柏・宗長が行った『水無瀬三吟百韻』は、連歌作品の最高峰とされた。また、準勅撰となる『新撰菟玖波集』を編み、多くの連歌論書を著した。

連歌の全盛期には有心連歌が主流であったが、室町時代

---

① （１４６７年～１４７７年）（応仁年間）、足利将軍家の相続問題をきっかけとして、東軍細川勝元と西軍山名宗全とがそれぞれ諸大名を率いれて京都を中心に対抗した大乱。京都は戦乱の町となり、以後、幕府の威令行われず、群雄割拠の戦国時代に入った。

末期になると、形式化した有心連歌にたいして遊戯性が高く滑稽・諧謔を旨とする俳諧連歌が流行し、山崎宗鑑の『新撰菟筑波集』や、荒木田守武の『守武千句』などが編まれた。この俳諧連歌の流れは、やがて近世の俳諧へと発展していく。

三、歌謡と漢詩文

◎ 歌謡

中古の後期に流行した今様を中心とる雑芸歌謡は、鎌倉時代に入ってからも貴族や武士たちに盛んに享受された。鎌倉時代後期になると、文化的に成熟してきた鎌倉を中心とする武家社会に、早歌（宴曲）①と呼ばれる中長編の歌謡が生まれ、明空によって大成され、『宴曲集』が編まれた。また、鎌倉時代を中心に、寺院で、民衆の教化のために、和語によって仏や高僧の徳を称え、節をつけて讃詠する和讃が創り出され、親鸞や一遍らが優れた作品を残した。

室町時代以降には、扇の拍子や一節切（尺八）の伴奏で口ずさむ短編歌謡である小歌が庶民の間に大流行し、その集成である『閑吟集』が編まれた。詩形・内容ともにさま

---

① 前代の催馬楽などに比べて拍子が早い。宴曲とも呼ばれる。和歌や王朝の物語や、中国の古典などを引用した和文脈と漢文脈の入り交じった美文である。

ざまで、口語的な表現も見られ、動乱の世の中をたくましく生きた庶民の感情を生き生きと伝える。また、中世後期には田植えに伴う神事や労働の時に歌われた田歌もあった。

中世の歌謡は、その担い手や行われた場などが変化に富んでおり、これら豊かで多彩な芸能が、能や、近世の歌舞伎・浄瑠璃などの芸術を生み出してゆく土壌となっていったといえる。

◎ 漢詩文と五山文学

平安時代末から鎌倉時代初期にかけて、中国大陸から新仏教である禅宗がもたらされた。それとともに帰化僧や留学僧によって、中国の禅林（禅寺）における漢詩文制作の風習も伝えられ、鎌倉末期から室町時代までの約三百年間には、五山①の禅僧を中心に、おびただしい量の漢詩文集が作られた。これらには、禅院で行われる儀式などの実用のために作られた漢詩文のほかに、優れた古詩・律詩・絶句・序・賦などがあり、「五山文学」と呼ばれる。

室町時代初期に活躍した義堂周信や絶海中津は、五山文学最盛期の双璧といわれている。この時代の漢詩文は、一

---

① 鎌倉と京都にそれぞれ整えられた臨済宗の五大官寺。鎌倉五山として建長寺・円覚寺・寿福寺・浄智寺・浄妙寺、京都五山として天龍寺・相国寺・建仁寺・東福寺・万福寺があり、さらにこれらの五山の上に南禅寺を位置づけた。以上の十一寺を五山と称した。

般の人々には難解なものとされたが、一方で、水墨画と組み合わせられるなど、絵画・建築・作庭・芸能・礼法など、多方面に影響を与えるところとなっている。

第三節　物語と説話

一、軍記物語

中世を代表する文学の一つが軍記物語である。これは、相次ぐ不安定な世情を反映した作品群で、争乱を直接、あるいは間接的に体験した人々の話や記録を母体にして、乱世に生きる人間群像を活写している。俗語や方言を交え、和漢混交文①でドラマチックに語るスタイルは従来の物語にない魅力を持っている

◎ 『保元物語』と『平治物語』

ともに作者未詳。鎌倉時代前期に成立とされる。平安末期の保元の乱②と平治の乱③を題材とした軍記物語である。『保元物語』は、皇位継承をめぐる戦乱を扱ったもので、

---

① 和漢混交文とは、仮名を用いた優雅な文体と漢語を用いた力強い間文体との混合した文体のことである。軍記物語で効果的に用いられて発達し、日本文の主流となしてきた。

② １１５６年、後白河天皇と崇徳上皇兄弟の間の皇位継承争い。

③ １１５９年、藤原信頼と少納言入道信西の不和に発した源氏と平氏との争い。

中でも源為朝（ためとも）の英雄的な奮戦（ふんせん）ぶりが生き生きと描かれている。『平治物語』は、貴族間の対立に端を発した戦乱の様相をあつかい、敗死した源義朝（よしとも）の子悪源太義平（あくげんたよしひら）の奮戦、愛人常盤御前（ときわごぜん）の逃避行（とうひこう）などの描写に力がこもっている。二作とも武士団の活躍に力点が置かれ、また、敗れた者への好意的の眼が特徴的である。

◎『平家物語』

十二巻で、十三世紀半ばごろに原形が成立していたらしいが、作者・成立に関して複雑な事情が考えられ、確実な資料はない。ただ、多くの語り手や読者の手を経て、琵琶法師の平曲（へいきょく）[1]が改訂・増補を繰り返し、現在の状態に成長していったものと思われる。『源平盛衰記』なども、こうした過程の中でできた『平家物語』の異本（いほん）の一つである。

『平家物語』は平家一門の隆盛と衰亡を描いた軍記物語の傑作である。約七十年間の平家興亡の歴史の中に躍動感あふれる合戦（かっせん）の様子が描かれている。また、人間の運命的な出会いや別離、生と死が感動的に語られ、中でも祇王（ぎおう）や建礼門院（けんれいもんいん）など女性たちの姿は哀切である。平家と源氏の武将とはじめとする多彩な登場人物も個性豊かに描かれており、仏教的な無常観[2]を思想基盤としながらも、人間そのもの

---

① 琵琶を弾きながら語る『平家物語』。盲目の法師生仏から始まったとされる。

② 万物は流転して永遠に変わらないものは何一つもないという仏教思想。

を語ろうとする思惑が感じられる。

文章は漢語・和語・俗語・仏教用語を取り混ぜた典型的な和漢混交文で、場面に応じて文体を変化させたり、対句や七五調などの技巧を用いたりして緊張感、勇壮感、悲哀感などを物語に与えている。これは、『平家物語』が平曲としての特徴である。

『平家物語』は表現、構成、素材など多くの面で後続の軍記物語、近世の小説、謡曲や歌舞伎などの戯曲に影響を及ぼしている。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ。

——『平家物語』巻一

口語訳

祇園精舎の鐘の音には万物をはかないものとする響きがある。釈迦入滅の際、白色に変わったという娑羅双樹の花は、勢い盛んな者も必ず衰えるという道理を表している。権勢をふるう人も長続きはしない。ただはかない春の夜の夢のようだ。勇猛な者も結局は滅びてしまう。ただもう風の前の塵と同じようなものだ。

◎『太平記』

十四世紀半ばごろに成立した『太平記』は、後醍醐天皇による鎌倉幕府討幕計画から建武の中興を経て、室町幕府成立と三代将軍足利義満に至る約半世紀の歴史を描いた軍記物語である。儒教理論を基盤にして政治の在り方や武士の生き方に真なるもの、善なるものを求めて、荒廃し混乱する時代相や人間像を批判的に描こうとした点が『平家物語』と異なり、また『平家物語』にある叙事詩的な情緒に欠ける。

文章は漢語や仏教用語を多用した漢文調の和漢混交文で、華麗な道行文①が含まれ、物語僧により語られ、近世には太平記読②によって講釈された。作者に小島法師の名もあげられるが、多数の人の手が加わっている。

◎『義経記』と『曽我物語』

ともに作者未詳。室町時代初期に成立。『義経記』は題名の通り、源義経を主人公にしたものだが、従者の弁慶の活躍を中心に義経の流浪、逃避の姿を悲劇の英雄として同情的に哀感を込めて描き、主従間の人間的な情愛が印象的で

---

① 旅行する途中の光景と旅情とを枕詞・掛詞・縁語などの修辞法で述べた文体の一つで、多くは七五調。芝居の世界で道行とは、相愛の男女が駆落ち・情死のために連れ立って行く途中を演ずること。
② 室町時代・江戸時代、『太平記』をリズムをつけて語ること、またはその人。

ある。

『曽我物語』は、曽我十郎・五郎の兄弟が、権勢を誇る父の仇工藤祐経を討ち取る復讐物語である。忍従・恩愛・義理などが兄弟の悲壮的な生き方の中から読み取れ、人々の心を揺り動かしてきた。以後、悲劇の主人公を扱ったこれらとまた同類の作品は、判官物[①]・曽我物[②]と呼ばれ、近世の謡曲・浄瑠璃・小説などに影響を及ぼしている。

二、歴史物語と史論

源平の争いに始まり、皇族と武士の争い、南北朝の動乱、群雄割拠の戦国時代まで、中世は常に揺れ動く時代であった。そのような時代環境は人々の不安と危機意識から歴史への関心を呼び起こし、今までにない史論というジャンルが生み出され、また前代の『大鏡』『今鏡』に続く歴史物語『水鏡』『増鏡』が書かれることになった。

鎌倉時代初期に書かれた『水鏡』は、編年体で『大鏡』以前の約千五百年にわたる歴史を記したものである。素朴

---

① 判官は検非違使のこと。判官であった義経の悲劇的末路への同情から生まれた芸能のこと。ここから敗者や弱者に同情する「判官びいき」の語が生まれる。
② 判官は検非違使のこと。判官であった義経の悲劇的末路への同情から生まれた芸能のこと。ここから敗者や弱者に同情する「判官びいき」の語が生まれる。

な文体で、物語としての魅力は『大鏡』に及ばない。

十四世紀中頃に成立した『増鏡』は、後鳥羽天皇から後醍醐天皇までの約百五十年の歴史を同じく編年体で記し、＜四鏡＞最後の作品である。流麗な擬古文の文章から、作者（二条良基か）の王朝文化への憧れが見られる。『大鏡』に次ぐ優れた歴史物語である。

史論は歴史物語と異なり、歴史的事実に基づいて歴史を貫流するものとそれに対する考えを論理的に構成したものである。その主なものに『愚管抄』と『神皇正統記』がある。

『愚管抄』は、慈円の著したもので、神武天皇から順徳天皇までの歴史とそれにかかわる史観を述べたものである。王法や仏法の衰退を嘆き、宗教家としての立場から独自の道理を強く主張している。

『神皇正統記』は、北畠親房が南朝の正統性を主張したもので、古代から後村上天皇までの歴代天皇の事跡、興亡を記している。日本を神国と位置づけ、建国の精神と国家の尊厳を説くともに南朝の立場を明確化したものである。

三、擬古物語

平安時代中期に『源氏物語』が成立して以来、これを模倣した作品が数多く書かれた。鎌倉時代に入ってもなお、王朝の貴族の宮廷生活や恋愛を描いた物語が次々と作られ、

また、改作を重ねられたことが『無名草子』や『風葉和歌集』によって知られるが、そのほとんどが散逸してしまい、現存するのは『住吉物語』『松浦宮物語』などわずかである。擬古物語と呼ばれるこれらは、結局は王朝の模倣や改作の域を出ることができず、宮廷社会が衰微していくと、新たに文学享受者となった人々に支持され続け得るものではなく、中世的な背景や内容を持つまったく新たな分野の物語に座を譲るしかなかったのである。

四、御伽草子

擬古物語が王朝的世界を描くことに終始したのに対し、室町時代を中心に、南北朝から江戸初期にかけて、登場人物も舞台も内容もきわめて多種多様な短編の物語が盛んに作られた。江戸時代中期に大阪の本屋が室町時代の物語二十三編を集めて「お伽文庫」として刊行して以来、御伽草子と呼ばれた。『文正草子』『鉢かつぎ』『浦島太郎』『物ぐさ太郎』『酒呑童子』『一寸法師』などがそれで、語りや絵入りの本や絵巻で後世の人々にまで楽しまれるものとなった。短編で表現も易しく、細やかな描写なしに筋が展開していく気軽に楽しめる通俗的、大衆的な物語で、物語の享受層が大きく広がった時代であることを示す作品群である。文学性は高くはないが、近世の仮名草子へと展開するものと

しての大きな意義を持つ。

五、説話と仏教説話集

平安時代の末から鎌倉時代にかけては、説話の黄金時代ともいわれるほど、文学作品に盛んに説話が取り入れられ、また説話集が次々と編まれた。『古事談』『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』などの世俗説話集のほかにも、宗教意識の高まった時代を反映して、僧侶や隠遁者が説話を通して出家者のあり方や神仏の霊験、人の迷いや醜さからの解脱を説くために編んだ仏教説話集が盛んに出された。

鎌倉時代前期に成立した『宇治拾遺物語』は、中古の『今昔物語集』と並んで説話文学を代表する作品である。長短約二百編の説話が感興のままに並べられている。帝や聖人から盗賊、にせ坊主、さらには鬼や動物の化身に至るまでを主人公とする怪異談など、多彩な話が穏やかな文体で描かれ、編者の人間に対する並々ならぬ興味と、寛容な精神が感じられる。なお、中に「鬼に瘤取らるる事」などのような民話を取り入れていることでも知られる。

１２５２年に成立した『十訓抄』は、十ヶ条の教訓を設け、これにしたがって約二百八十編の説話が編集されている。年少者に対する教訓的な啓蒙意識を基本として、実際的・具体的な処世訓を示している。

中世の仏教説話集としては、まず平康頼の『宝物集』が編まれ、続いて鴨長明の晩年の作で人の心の弱さを追究した『発心集』や、慶政の作といわれる『閑居友』、西行に仮託された僧の見聞した話を集めた『撰集抄』が都周辺で書かれた。また、鎌倉時代後期になると、地方でも民間伝承や庶民の生活を伝える説話集が編まれるようになり、主なものに巧みな語り口で民衆の教化をはかった無住の『砂石集』や室町時代の『神道集』『三国伝記』などがある。

第四節　随筆・日記・紀行

一、随筆

中世になると隠者[1]の手による文学作品が目立つようになる。その特色は、仏教的無常間に基づいて人間や社会、そしてその中に存在する自己を凝視する点にあるといえよう。それは変転きまわりない時代の中で、権勢に背を向けて自己と向き合う生き方の中から生まれるものである。

中でも、清少納言の『枕草子』と並んで古典三大随筆と

---

① 地位や身分にこだわらず、俗世間から離れて山に草庵をかまえたり、旅に出たりした人。世捨人、遁世者ともいう。自由な精神で和歌や漢詩・随筆を著した。それを隠者文学、または草庵文学と呼び、中世文学の特色をなす。

呼ばれるものが、鴨長明の『方丈記』、兼好法師の『徒然草』である。この二作は中世の隠者文学を代表するもので、作者の人間性と思想性が作品全体にみなぎり、社会や人間に対する鋭い洞察が見られ、現代にも通じる普遍性がある。

◎ 鴨長明と『方丈記』

『方丈記』の作者鴨長明（１１５５年～１２１６年）は、下鴨神社の神官の子であったが、神官への着任がうまくいかず、五十才ごろに出家遁世した。多くの歌会に参加、活躍したり、鎌倉に旅をして将軍実朝に会ったり行動的な面も見受けられる。説話集『発心集』、歌論書『無名抄』がある。

『方丈記』の成立は１２１２年で、作者が壮年期までに体験した大火・飢饉・疫病・大地震などの災厄を記述し、都や人心の混乱を描き、無常の世を嘆く。続いて、生涯を懐古し、その恵まれない境涯と家系、出家して大原そして日野山麓に庵を結ぶに至って、安心を得たことを記す。しかし、その末尾では草庵の閑居生活への安住に自ら疑問を抱き、自身の内面を問う形で結んでいる。全体として人生無常、厭離穢土の思想に貫かれているが、そのような仏教的考えを主張しようとした書ではない。むしろ解脱を得ることのできない人間の苦悩、孤独の様を描こうとしたものである。

文章は、漢文訓読調を交え、対句や比喩を取り入れた詠嘆的な和漢混交文である。短い作品だが対比的で論理的な構成を持っている。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず、よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまりたる例なし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。

——『方丈記』冒頭

口語訳

流れてゆく河の水は絶えないで、それでいてその水はもとの水ではない。流れのよどみに浮かぶ泡は、一方で消えたかと思うと一方で生じて、同じ泡が長く残っているという例はない。この世に存在する人間も住居も、やはり水や泡のような具合である。

◎ 兼好法師と『徒然草』

『徒然草』の作者兼好法師（１２８３年〜１３５２年）は、本名占部兼好(うらべかねよし)で、京都の吉田(よしだ)神社に代々仕えたので、吉田兼好ともいう。三十歳ごろまで悪くない地位で出仕(しゅっし)し、和歌の才能も認められていたが、やがて出家した。動機は不明。

１３３１年に成立した『徒然草』は、自然、社会、人間のありように対する思いを述べた随筆で、さまざまな角度から斬新(ざんしん)な感覚で切り込んだ作品である。王朝文化への憧

れ、有職故実(ゆうそくこじつ)[1]に関する心構え、日常生活上の処世訓、自然美の新しい見方、生と死についての対応姿勢など文章の素材、対象は多彩を極めている。それらは健全な常識家としての現実的、合理的解釈に基づいて率直に書かれ、また柔軟な感覚を働かせた兼好独自の個性的な批評の世界を開いている。思想的には仏教的無常観・老荘的虚無思想・儒教的倫理観が基盤にあり、和歌四天王(してんのう)[2]の一人に加えられただけに美的感受性にも優れている。『徒然草』はそういう兼好の全体が自在に語られた作品といえるだろう。動乱のさなかに生きた鴨長明と異なり、武士の支配する時代の中でより現実的な感覚を持ち合わせていたと考えられる。

そのことは文章にも表れ、流麗な擬古文あり、硬質の和漢混交文ありと言った具合であるが、全般的には平易・簡潔・明快である。二百四十四段から成っており、近世では処世訓として読まれた。

つれづれなるままに、日暮らし硯(すずり)に向かひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

——『徒然草』序段

---

[1] 古来の礼式・官職・法律・物事の由来などのこと。
[2] 兼好は二条為世に師事し、二十歳前後には和歌の才を評価され、頓阿・浄弁・慶雲とともに二条派の四天王と呼ばれた。

口語訳

これといってすることもない所在なさにまかせて、一日中硯に向かい、心に浮かんでは消えてゆくとりとめのないことを、なんということもなく書きつけていくと、奇妙にも狂おしい感じがしてくることだ。

二、日記・紀行

中世に入ってもしばらくの間、宮廷を中心とする女房の日記が書き綴られた。平家興亡(こうぼう)の中での悲哀を描き、家集としての性格も濃い『建礼門院右京大夫集(けんれいもんいんうきょうのだいぶしゅう)』から始まり、『建春門院中納言日記』、『弁内侍(べんのないし)日記』『中務内侍(なかつかえのないし)日記』『とはずがたり』と続き、南北朝期の『竹向きが記』で女房の日記は終わる。また、この時代には男性の手によるかな書きの日記も書かれている。

１３１３年に後深草院二条(ごふかくさいんにじょう)の手によって完成した『とはずがたり』は、後深草院の寵愛(ちょうあい)を受けた作者の自伝的な日記である。前半は後深草院をはじめとする貴人たちとの愛欲生活の苦悩を描き、後半は西行への敬愛に基づく旅の記録、後深草院の崩御(ほうぎょ)の悲しみとその後四十九歳までの生活をつづっている。誠実に、一途(いっと)に生きた女性の気迫(きはく)がみなぎる作品である。

鎌倉幕府が開かれ、京都・鎌倉間の往来が盛んになるに

つれて、旅の中で自己を見詰めようとする内省的傾向が顕著になり、紀行文学というジャンルが確立した。中でも阿仏尼の『十六夜日記』のうちの旅日記の部分は、最初の女流紀行文学といわれる。その他男性による『海道記』『東関紀行』も先駆的作品である。

『十六夜日記』は、 作者阿仏尼、成立１２８０年頃である。歌人藤原為家の後妻阿仏尼が、先妻の子為氏と愛児為相との間の相続争いの訴訟のために鎌倉へ下った時の紀行文である。叙情性に富んだ和文体の文章で、全体に子を思う母の心があふれている。

三、法語とキリシタン文学

鎌倉時代に次々とおこった新興仏教の開祖たちが、その思想や教義を分かりやすく、親しみやすい形で示したものが仮名法語、略して法語である。代表的な人物と作品は、法然（１１３３年～１２１２年、浄土宗の開祖）の『一枚起請文』、親鸞（ １１７３年～１２６２年浄土真宗の開祖）の『教行信証』『歎異抄』、道元（１２００年～１２５３年、曹洞宗の開祖）の『正法眼蔵』、日蓮（１２２２年～１２８２年、日蓮宗の開祖）の『立正安国論』、一遍（１２３９年～１２８９年、時宗の開祖）の『一遍上人語録』などである。これらは宗教的情熱にあふれていることはもちろん、

古典としての文学的価値もきわめて高い。

室町時代末期にはさらに新しい宗教としてキリスト教が伝来し、日本の文化にさまざまな影響を及ぼした。特に布教活動の一環として多くの著作が行われ、国語史的、文学史的価値の大きいものが残されている。宣教師の日本語習得のためのローマ字本『日葡辞書』、教義を説く『どちりなーきりしたん』、抄訳・解説本『天草本伊曽保物語』などである。いずれも当時の話し言葉が記されており、貴重な資料となっている。

第五節　芸能

一、能と観阿弥・世阿弥

平安時代末期に、貴族の間でも流行した田楽は、鎌倉時代に入ってもなお盛んに行われ、猿楽とともに民衆の間に広く浸透していた。猿楽は、曲芸や奇術のほかに演劇的な物まねの要素を持っていたが、やがて、田楽・猿楽ともに物まねの芸に重点が置かれるようになり、それぞれ田楽の能・猿楽の能と称し、今日の能の源流となった。これらの専門の芸人たちは、それぞれ田楽の座[①]・猿楽の座という集団を形成し、寺社に所属してその保護を受けるようにな

① 中世に発達した職業集団。生産・営業・興行の権を占有する組織である。

るが、十四世紀後半、猿楽の結崎座に観阿弥・世阿弥が出て能を発展させると、田楽は次第に衰えていった。

猿楽の座として、古くから奈良の興福寺・春日大社に属する大和四座①のうち、結崎座から出た観阿弥清次・世阿弥元清父子の果たした功績は大きく、足利義満②の支援を得て能を大成させた。

能は、シテ(主役)、ワキ(脇役)、ツレ(助演的な役割)の登場人物、謡や囃子に合わせて歌い舞う歌舞劇で、普通五番仕立てで興行する。日本の代表的な伝統芸能として、今も上演されている。

観阿弥(1333年～1384年)は、全称観阿弥清次、観世流の創始者で、田楽や近江猿楽の長所を取り入れ、物語性と物まねを重視する大和猿楽に歌舞伎の要素を加え、芸内容を変革し、深めていった。

世阿弥(1364年～1444年)は、全称世阿弥元清、父観阿弥の仕事をさらに洗練され、登場人物をできるだけ省略し、舞を中心とした幽玄な美をもつ複式夢幻能③を考案し、芸術的に高度な能を完成させた。素材を古典に由来

---

① 結崎座(観世流)、外山座(寳生流)、阪戸座(金剛流)、円満井座(金春流)。

② (1358年～1408年)。室町幕府三代将軍。南北朝を統一後、太政大臣となり、幕府の最盛期を招いた。五山文学や猿楽を保護して北山文化を形成。

③ 前後二段構成の能。前段で化身として登場したシテが、後段で正体を明かし、来歴を語る。象徴的な作劇法で、舞が見せ場となる。

する能作品（謡曲）も多く著し、縁語や掛詞、本歌取りなどを駆使した典雅な詞章で、人間の内面を象徴的に描いている。また、『風姿花伝』など多くの能楽論書を著し、能の芸術的理念を＜幽玄＞＜花＞という言葉で表現した。＜幽玄＞とは美的価値であり、優美艶麗の意で、＜花＞は感動の基準で、演者と観客の間に生まれる感動（珍しさ・おもしろさ）を現している。このように世阿弥によって大成された能は、以後、甥の音阿弥、娘婿の金春禅竹らに引き継がれていく。

二、狂言と幸若舞

猿楽の卑俗滑稽な部分を演劇的に表現したものが狂言である。狂言として分離する以前から風刺的要素があったが、それが一層洗練され、世態風俗への辛辣な批判の形を取るようになり、一方では喜劇的なだけではなく、大成以前の能と同様、祝言性も合わせもっていた。狂言は、能の中間でストーリーを説明したり、能の進行を補助したりして上演されたので、大和四座ではそれぞれ狂言の流派を抱えていた。また、能とは独立した形で行われる曲があり、それらは脇狂言・大名狂言・小名狂言などに分類できる。能と異なり、仮面をつけることはほとんどなく、写実的演技で当時の口語を用いて生き生きと演じた。即効的な要素

もある芸能である。

幸若舞(こうわかまい)は、能より後れて室町時代末に流行した芸能である。古くは曲舞(くせまい)ともいわれ、軍記物語の登場人物を素材として、太鼓・小鼓・笛を伴奏に抑揚(よくよう)の少ない節で単純な舞を舞うものである。その詞章を「舞の本」という。忠義や孝行の倫理をテーマとするところから戦国武将たちに愛好され、近世になると浄瑠璃などに大きな影響を与える。変化に乏しい単調な芸能だったため、そのあと衰退の道に辿(たど)った。

練習問題

(一)「新古今和歌集」と、この時代の歌人について、次の各問いに答えてください。

問一 何番目の勅撰和歌集か。

問一 成立したのはいつか。次の(ア)—(オ)のから選んでください。

(ア)1000年ごろ　(イ)1100年ごろ　(ウ)1200年ごろ　(エ)1300年ごろ　(オ)1400年ごろ

問三 和歌の興隆をはかり、「新古今和歌集」撰集の院宣を下したのはだれか。

問四「新古今和歌集」に関係深い事項を、次(ア)—(ケ)の中からすべて選んでください。

(ア) たをやめぶり　(イ) 余情妖艶 (ウ) 掛詞. 縁語　(エ) 素朴.雄大　(オ) 本歌取り　(カ) 歌数約二千首 (キ) 三大集 (ク) 紀貫之 (ケ) 藤原定家

問五　藤原定家の著作を次の（ア）—（カ）の中からすべて選んでください。

（ア）近代秀歌　（イ）無名草子　（ウ）明月記　（エ）長秋詠藻　（オ）壬仁集　（カ）拾遺愚草

問六　鎌倉幕府の三代将軍で和歌を定家に学び、万葉調の歌で知られる人物とその私家集の名前を書いてください。

（二） 次にあげた人物と関係の深い事項を後の(ア)—(オ)からそれぞれ選んでください。

1．二条良机　2. 山崎宗鑑　3．宗祗

（ア）新撰菟玖波集 (イ) 菟玖波集 (ウ) 新撰犬筑波集 (エ) 水無瀬三吟百韻　(オ) 応安新式

(三) 次の各問いに答えてください

問一　室町時代に庶民を対象に作られた短編物語を総称して何というか。

問二　後深草院二条が宮廷生活と諸国行脚の体験をつづった作品名を記してください。

問三　京から鎌倉への旅を記す、男性の手になる中世の紀行文学の作品を二つに記してください。

問四　四鏡と呼ばれる歴史物語の名前を成立順に記してください。

問五　「発心集」「無名集」の作者の名前とその作者の書いた随筆名を記してください。

問六　「徒然草」の成立は何世紀か。また、作者名を記してください。

問七　「平家物語」を琵琶の伴奏で語る音曲を何というか。

問八　「古事談」「今昔物語集」の流れをくみ、中世に成立した約二百話を集めた説話集の名前を記してください。

問九　仏教説話集「沙石集」「雑談集」の作者の名前を記してください。

（四） 次の各問いに答えてください。

問一　中世の禅僧によって、行われた漢詩文を総称して何というか。

問二　室町時代に「閑吟集」として集成された歌謡は何か。

問三　能を完成させた父子の名前を記してください。

問四　世阿弥が残した能楽論書の中で最も重視すべきものとして説かれているのは次のうち何か、記号で答えてください。

（ア）有心（イ）無心（ウ）わび　（エ）幽玄

第四章　近世の文学

第一節　近世文学の概況

一、時代と背景

江戸幕府成立（１６０３年）から大政奉還（１８６７年）までのおよそ二百六十年間を近世とする。

この時代は、幕府とその支配下にある藩によって国を統治する幕藩体制がとられた。幕府はこの幕藩体制を維持するために、朱子学（儒教）を採用し、士農工商という厳しい身分制度や家父長制度を設け、封建的秩序を築きあげていった。対外的にも、厳重な鎖国政策を取り、国内の秩序を守ろうとした。

また、政治や文化の中心が京都から江戸や大阪に広がり、その他の城下町も発展していった。これとともに士農工商の最下層である町人階級が成長して経済の実権を握るようになると、幕府の整えた封建的秩序は次第に乱れていった。

やがて幕藩体制そのものまでが動揺するようになっていったのである。

二、文学の普及と文学理念

近世に入って発達した木版印刷の技術は、書物を大量に出版することを可能にした。このことに加えて、教育が発達し寺子屋で庶民教育が行われるようになると、文学の享受層は一部の特権階級から町人階級にまで広がった。また、表現者の側でも町人階級が活躍したり、近世後期には享受層を意識したわかりやすい読み物が書かれたりして、文学は真に町人のものになっていった。

この時代の文学理念としては、蕉風俳諧の＜さび＞＜軽み＞、町人文学一般に通じる通・粋など、多種多様である。一方、浄瑠璃に見られる「義理」や、読本に見られる勧善懲悪なども重んじられ、儒教の強い影響力を窺い知ることができる。

三、上方文学と江戸文学

十七世紀後半から十八世紀のはじめにかけて、京都・大阪を中心とする上方文学が起こった。上方文学は、産業の発達に伴う京阪の新興町人階級の台頭を背景として、近世

きな影響を及ぼし、日本の古典研究を推し進めた。

第二節　詩歌

一、俳諧

俳諧とは俳諧連歌の略称であり、中世末期から流行してきたが、はじめは滑稽味のある連歌で、連歌の会の余興として行われるにすぎず、近世になってから手軽な文芸として庶民の間に流行しはじめた。このころ俳諧の様式を整えて和歌の一種として独立させたのが、松永貞徳である。

◎ 貞門俳諧

松永貞徳（１５７１年～１６５３年）は、京都の人。俳諧以外に和歌・歌学・狂歌・連歌にすぐれ、私塾を開き多くの門人を教育した。連歌師を父にもつ貞徳は、早くから細川幽斎・里村紹巴という当代一流の学者・文人に教えを受け、古典の豊かな教養を身につけた。そのため、俳諧を和歌・連歌に入るための段階と考え、俳諧の特質を滑稽と認めながら、下品猥雑な内容を退けた。そして連歌との区別を用語に求め、「俳言」[①]を使用に俳諧の特質を置いた。俗語の使用は題材の拡充をもたらし、また庶民にもわかり

---

① 和歌や連歌という伝統文芸には使用されない俗語や漢語。

やすかったので、大いに流行した。この貞徳を中心とする俳諧の一派を貞門と呼び、野々口立圃・北村季吟など多くの門人がいた。貞門では俳諧集『犬子集』の編集や、俳諧式目『俳諧御傘』の著述を行い俳諧の普及に努め、俳諧は全国に広まった。俳風は式目を守り、保守的で、滑稽を旨としたが、掛詞などの技巧を重視して言語遊戯的であった。

七夕なかうどなれや宵の月

——松永貞徳

口語訳

あの宵の月は彦星と織姫の仲人なのだろう。宵にだけ表れてひっこんでしまった。

◎ 談林俳諧

延宝期（１６７３年～１６８１年）に入るころ、貞門俳諧は『御傘』に定められた形式に縛られてマンネリ化し、人々に飽きられていった。このような貞門の衰退に代わって人気を集めたのが西山宗因を中心とする談林派である。西山宗因（１６０５年～１６８２年）は、連歌師・俳諧師で、とらわれない自由な感性で俳諧に新風を吹き込んだ。談林俳諧の祖といわれる。宗因のもとで、大阪のエネルギッシュな町人層の経済力を背景に成長してきた談林派は、俳諧を形式や連歌の伝統から解放し、自由奔放で大胆、

軽妙洒脱な作風で庶民の姿をリアルに映し出した。

談林派の俳人は数多いが、中でも特に活躍したのが浮世草子作者としても名高い井原西鶴である。西鶴は即興的な矢数俳諧[1]を得意とし、一昼夜に二万三千五百句を読むという記録を作ったが、この矢数俳諧の流行は同時に俳諧の遊戯化を促進し、談林俳諧は文芸性を失っていった。

すりこ木も紅葉しにけり唐辛子

——西山宗因

口語訳

唐辛子をすったこのすりこぎも秋の野山とともに紅葉したように紅をつけたことだ。

◎ 松尾芭蕉と蕉風

松尾芭蕉（１６４４年～１６９４年）は、伊賀上野の出身で、本名宗房という。はじめ北村季吟のもとで貞門俳諧を学び、のちに江戸に出て談林派と交流を持ちながら俳諧宗匠として暮らしていたが、都会の喧騒を嫌い、やがて郊外の深川に芭蕉庵を設けて移り住み、独自の句境を切り開いていった。人生を旅と見て、関西・東北・北陸地方などを旅を繰り返し、旅によって、貴い紀行文と俳諧が生まれる。最後、大阪で客死したが、辞世の際、「旅に病んで夢

---

① 一定の時間内に、独吟でどれだけの句ができるかを競う興行。

は枯野(かれの)をかけ廻(まわ)る」(旅の途中で病床に臥すことになったが、旅を諦められず、夢は枯野を駆け巡っている) の名句が残る。

芭蕉を中心とする俳諧の一派を蕉門という。その俳風を蕉風と呼び、芭蕉を初めとする蕉門の一派によって俳諧は芸術にまで高められた。

蕉風にはいくつかの変遷の跡(あと)が見られる。芭蕉ははじめ俳諧集『虚栗(みなしぐり)』に表れた漢詩文調の句を好んだが、貞享(じょうきょう)元年(1684年)、関西方面へ旅行し、風狂精神に満ちた新しい俳風を得た。この旅の記録は芭蕉の最初の紀行文『野ざらし紀行』に現され、また、旅の途中に完成した俳諧集『冬の日』は風狂精神にあふれ、芭蕉の基礎をなすものとして注目される。

以後、人生を旅と見た芭蕉は各地を歴遊し、『鹿島紀行(かしまきこう)』『笈(おい)の小文(こぶみ)』『更科紀行(さらしなきこう)』『おくのほそ道』という紀行文を著した。中でも元禄二年(1689年)、門人の河合曾良(かわいそら)を伴って東北・北陸を旅行した際の『おくのほそ道』は名文として名高い。これらの旅を経て芭蕉の詩心はますます磨かれ、元禄四年(1691年)には、幽玄閑寂(かんじゃく)な<さび>①、哀憐(あいれん)な情の表れた<しおり>②、微細に通じた<細み>③の理念を現した俳諧集『猿蓑(さるみの)』を刊行し、蕉風を完成させた。芭蕉は

---

① 蕉風俳諧の根本理念。句の色、つまり、中世以来の幽玄に、閑寂な色合いを加えた深くかすかな美的情緒という。
② 句の姿。つまり、対象を眺めるしみじみとした哀憐の情が自然に句の姿に表れたもので、用語や素材があわれっぽいものではない。
③ 作者の心が対象に一本筋で深く微細に通じていくことをいう。又これによって表現された繊細で微妙な句境。

風雅を第一として俗を超越し、俳諧を芸術の域まで高めることに成功したのである。また、芭蕉の晩年には、蕉風はさらに展開し、俳諧集『炭俵』には平淡で軽妙な＜軽み＞①の句境が表れている。

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。

——『おくのほそ道』

口語訳

月日は永遠の旅人で、次々と移りすぎて行く年もやはり旅人である。船の上で生涯を過ごし、馬を引きながら老いを迎える者にとっては、毎日が旅であり、旅を終生のすみかとするのだ。

蕉門には多数の門人がおり、全国に広がっていたが、中でも活躍したのが蕉門十哲と呼ばれる人々で、榎本其角は都会的で洒脱な句を、服部嵐雪は温雅で叙情的な句を詠み蕉風の発展に努めた。また、向井去来は『去来抄』を、服部土芳は『三冊子』を著し、＜不易流行＞②をはじめとする芭蕉の俳論を後世にまで伝えた。しかし、多くの門人

---

① さびから転じた理念で、重厚な俳風から脱し、日常感覚による率直な句風を指す。

② 「不易」は芸術の永遠に変わらないこと。「流行」は移り変わる芸術。芸術にはこの二側面があり、芸術はすべてその本質を離れてはならず固定してはならないという事。

たちによって蕉風はさまざまな流派に分かれ、やがて卑俗化して行くことになり、俳諧の低迷期を迎えるのである。

◎ 天明の俳諧と与謝蕪村

芭蕉没後、俳諧は卑俗化していったが、、芭蕉の五十回忌を機会に「芭蕉に帰れ」をスローガンとした俳諧復興の動きが見え始めた。この動きは安永・天明（１７７２年～１７８９年）のころ活発化し、天明の中興と呼ばれる。この時期には『炭太祇』に続いて、与謝蕪村・三浦樗良などが活躍し、横井也有は優れた俳文『鶉衣』を著した。彼らはそれぞれ独自の句境を目指していたが、概して清新な叙情性にあふれた唯美的な句詠んでいる。

摂津国毛馬村（現大阪市）に生まれた与謝蕪村（１７１６年～１７８３年）は、天明の中興を代表する俳人である。早くから江戸に出て絵画や俳諧を学び、芭蕉の跡を慕って奥羽を行脚し、京都に移ってからは画家として身を立てるが、五十歳をすぎたころから、俳人としても活躍した。夜半亭を名乗り、弟子を育てた。代表作には、俳諧集『あけ烏』と「春風馬堤曲」という名作の和詩がある。蕪村の句は、画家らしい美意識による印象鮮明で色彩豊かな句や、古典趣味の艶麗で浪漫的な句が多く、離俗的である。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな

口語訳

野分（台風）の吹き荒れる中、武士が五、六人、鳥羽殿へ向かって馬を走らせている。

◎ 幕末の俳諧と小林一茶

天明の中興の諸家が没した後の化政期（１８０４年～１８３０年）には、俳諧は庶民の社交的遊戯としていよいよ広まり、俳風が低俗化していった。天保期（１８３０年～１８４４年）には月並俳諧[1]が流行し、平凡で陳腐な月並調[2]が主流になる、俳諧の大革新は明治の正岡子規の出現をまたなければならなかったが、その中で異彩を放っていたのが人間感情を直叙した小林一茶である。

小林一茶（１７６３年～１８２７年）は、信州の出身であった。継母との折り合いが悪く十四歳で江戸に出て俳諧を学んだ。以来、継母との確執や妻子との死別など生涯家庭的に恵まれず、俳諧には孤独や弱者への同情、権力への反抗心が感じられ、野性と率直な感情に富んでいる。一茶には『おらが春』などの文句集がある。表現には、日常卑近な生活感情を俗語や方言・擬態語などを自由に駆使し、野性的で率直にうたい上げている。

---

[1] 毎月定例で行われた俳諧の会。平凡で新鮮味がない。
[2] 陳腐卑俗で理屈っぽい俳風。

痩蛙（やせかへる）まけるな一茶これにあり

——一茶

口語訳

痩蛙よ、負けるな。ここに一茶がついているぞ。

二、狂歌と川柳

江戸時代の庶民は韻文形式を利用して、笑いやパロディを表現するのに巧みで、狂歌や川柳などが栄えた。そこに町人文化のエネルギーと教養の深まりを見ることができる。

◎ 狂歌

狂歌とは狂体の和歌という意味で、和歌の形式を借りて滑稽を詠み込んだものである。滑稽・ユーモアを交えた歌の起こりは古く、既に『万葉集』の中の戯笑歌（ぎしょうか）にその源流を見ることができる。しかし、狂歌という呼び方で、正統の和歌に対する独特の詩の形式として意識されたのは鎌倉時代で、暁月坊藤原為守（ぎょうげつぼうふじわらためもり）が元祖といわれる。

近世に入ると、狂歌もほかの文学と同様に上方を中心として盛んになり、上方狂歌と呼ばれた。上方狂歌は、生白堂行風（せいはくどうぎょうふう）などを経て、大阪の町人永田貞柳（ながだていりゅう）に至って最盛期を迎えるが、この期の詠風は古歌のもじりや駄洒落（だしゃれ）などが主で、遊戯的な域から出ることはなかった。

近世の後期になると、狂歌は江戸で展開を見せはじめ、唐衣橘州・四方赤良・朱楽菅江らが表れた天明期（１７８１年～１７８９年）に頂点に達し、天明三年（１７８３年）には四方赤良によって『万載狂歌集』が編まれた。このころの狂歌は天明狂歌と呼ばれ、江戸市民の好みに合った軽妙洒脱で機知に富んだ詠風を特徴とする。その後、宿屋飯盛らが活躍したが、天明期に見られたほどの魅力は失われていった。

月見酒下戸と上戸の顔見れば赤坂もあり青山もあり

——唐衣橘州

世の中にたえて女のなかりせばをとこの心のどけからまし

——四方赤良

◎ 川柳

川柳は、十八世紀はじめごろから流行した雑俳（季語や切れ字のない滑稽を主とした句）の一種である前句付けの付け句が独立したものである。前句付けとは、ある前句（七七）に付句（五七五）をつけ、点者が句の優劣を決める。古くは宗祇の『菟筑波集』に次のような例がある。

きりたくもありきりたくもなし　　（前句）

ぬす人をとらへてみればわが子なり　（付句）

十八世紀中頃、前句付けの点者（批評点を加える人）として活躍していた柄井川柳（からいせんりゅう）[1]が撰んだ前句付けの作品の中から、呉陵軒可有（ごりょうけんあるべし）という本屋が、付け句だけでも意味の通るものを集めて出版したのが『俳風柳多留（はいふうやなぎだる）』である。これが好評を得て、この文学形式を創始者の名を取って川柳と呼ぶようになった。

盗人にあへば隣でけなるがり　（盗まれる物のある隣家をうらやむのである）

寝ていても団扇の動く親心

役人の子はにぎにぎをよく覚え　（賄賂政治への痛烈批判）

——『俳風柳多留』

川柳は、俳句のように形式にとらわれることなく、人間生活の隠れた面に目を向け、そこに見られる人情の機微や人間の愚かさ、あるいは社会の矛盾をうがち、笑いや風刺を詠んでおり、江戸町人の好みに合って流行した。形式としても馴染（なじ）みやすく、やがて文芸性は低くなるものの、現在にいたるまで愛好され続けている文学様式である。

---

[1] （１７１８年～１７９０年）、江戸浅草の名主。四十歳で前句付けの点者となり、以後三十三年にわたって活躍した。

三、和歌と国学

庶民のエネルギーの上に展開した俳諧と異なり、長い伝統を背景とする和歌は、簡単には変貌できなかった。むしろ、儒学・漢学に対抗しておこってきた国学の成果と密接につながることによって、徐々に近世的性格を獲得していったといえる。

◎ 和歌

中世歌学の主流であった二条派の歌人細川幽斎は、伝統を重んじる二条派の歌風を近世に伝え、これは堂上（公家）を中心に広まった。幽斎には、松永貞徳をはじめとする多くの門人があり、その一派は近世初期の歌壇の中心となっていたが、その中で、木下長嘯子[1]は二条派の伝統にとらわれない自由で清新な和歌を詠み、自由な文芸観を主張した。また十七世紀末になると、江戸の戸田茂睡[2]が著書『梨本集』において、二条派の保守的な歌風を攻撃し、その伝統とする詠作上のきまりを無意味なものと批判した。

近世後期、つまり十八世紀末ごろには、はじめ冷泉派の

---

[1]（１５６９年～１６４９年）、豊臣秀吉の正室ねねの甥。清新な歌風で旧派から批判されるが、和歌革新の原動力となった。

[2]（１６２９年～１７０６年）、任官の不遇から隠遁生活へ。古典研究の業績が大きい。

堂上歌学を学んだ京都の小沢蘆安（１７２３年～１８０１年）は、これを否定し、また当時主流を占めていた真淵と宣長の主張に対抗し、万葉調の歌をも否定して、飾り気のない日常語を用いて自然な感情を詠むべきだとする＜ただごと歌＞を主張した。これを受け継いだのが桂園派の祖の香川景樹（１７６８年～１８４３年）である。景樹は蘆安の影響の下に『古今集』を理想とし、平明な言葉で感情をそのままに詠んで生じる＜しらべ＞を重視した＜しらべの説＞を説いた。家集に『桂園一枝』があり、その門を桂園派と称し、熊谷直好・木下幸文・八田知紀らを門下に、明治初期まで勢力を振るった。

その他、幕末期には各地に優れた歌人が表れ、越後の良寛、越前の橘曙覧、筑前の大隈言道、備前の平賀元義、京都の大田垣蓮月などが個性的な歌を詠んだ。

◎ 国学の確立と国学三大人

木下永嘯子に和歌を学んだ下河辺長流（１６２４年～１６８６年）は、師と同じく伝統からの脱却を目指し、また、当時あまり顧みられることのなかった『万葉集』を研究し、『万葉集管見』を著した。長流の友人であった契沖①は、長流の研究を引き継ぎ、元禄三年（１６９０年）、『万葉集』

---

① （１６４０年～１７０１年）、十一歳で出家。下河辺長流と生涯にわたって親交があり、徳川光国の依頼で長流にかわって『万葉代匠記』を書き上げた。その古典研究の方法が後の国学者たちに多大な影響を与えた。

の注釈書『万葉代匠記（だいしょうき）』を著したほか、文献学的・実証的な方法で多数の古典研究を行い、国学成立の基礎を築いた。

十八世紀のはじめごろ、契沖の影響を受けた荷田春満（かだのあずままろ）①は、『古事記』や『日本書紀』などの研究を通して、儒教や仏教などの外来思想に対して日本古来の精神を追究する国学を提唱した。春満の門人の賀茂真淵（１６９７年～１７６９年）は、契沖の古典研究の方法と春満の思想とを継承して国学を学問として確立し、『万葉集』の研究書『万葉考』を著したほか、多くの古典研究を行った。真淵はまた、歌人としての功績も大きく、『万葉集』の歌風を＜ますらをぶり＞として尊重し、万葉調の歌を多く詠んだ。その一派を県井派（あがたいは）と呼び、古今調を好んだ村田春海（はるみ）や加藤千蔭（ちかげ）、万葉調を好んだ楫取魚彦（かとりなひこ）や田安宗武（たやすむねたけ）らがいる。また、宗武の三男である松平定信（まつだいらさだのぶ）は、流麗な擬古文で自然や芸術・政治などについてつづった随筆『花月草子（かげつぞうし）』を著した。

国学を大成した人物は本居宣長（１７３０年～１８０１年）である。伊勢松坂の医者であった宣長は、契沖の著書に影響を受けて国学を志し、やがて賀茂真淵に師事し、三十年余りの歳月を費（つい）やして『古事記伝』を著した。これは、宣長の生涯における大著で、『古事記』の本文を忠実に実証的に研究し、そこに表れた古代日本人の＜まこと＞の精神を理想として説いていた。また、宣長は多くの文学論を著し、

---

① （１６６９年～１７３６年）、京都の神官の子。国学の提唱者で、国学三大人と呼ばれる。

従来の倫理的・道徳的な文学観を打破し、文学の本質は物事に感動する心の働きにあるとして文学の独自性を主張した。中でも『源氏物語』の本質は＜もののあはれ＞にあるとした『源氏物語玉の小櫛』が優れている。和歌では『新古今集』を理想とし、家集に『鈴屋集』があり、一門を鈴屋派と呼ぶ。宣長没後は伴信友や本居春庭が文献的・実証的な古典研究の側面を、平田篤胤が古代日本人の精神を追究する思想面を受け継いだ。特に篤胤の思想は神道と関わって積極化され、明治維新の思想基盤となった。

日本の国学研究においての貢献が大きいことから、後の人が、荷田春満・賀茂真淵・本居宣長を国学三大人と呼ぶ。

四、漢学と漢詩文

鎌倉時代初期に渡来したといわれる朱子学が、徳川幕府によって保護され盛んとなったが、陽明学・古義学・古文辞学などの反朱子学も現われ、江戸時代も後半になると、特に漢詩文にすぐれた学者・詩人が輩出した。

◎ 漢学

中国の諸制度や儒学に関する学問を漢学という。漢学は上代から中古にかけても盛んであったが、近世では幕藩体

制を支える学問として儒学が発達し、中でも朱子学[1]は徳川家康によって官学として採用され、幕府の保護のもとに発展、普及していった。

朱子学の学者では、徳川家康に起用された林羅山[2]や、六代・七代将軍を補佐した新井白石[3]などが優れているが、新井白石は自叙伝『折たく柴の記』を著し、また白石と同じ木下順庵門下の室鳩巣が随筆『駿台雑話』を著すなど、和文の方面でも優れた著述を行った。

一方、朱子学に反対する学問も表れた。まず表れたのは中江藤樹[4]が推奨した陽明学[5]¥[5]で、これは形式化した朱子学に対して実践を重んじる学問である。ついで朱子学や陽明学を介さずに直接経書を研究することを説いた古学が表れた。古学には伊藤仁斎[6]が提唱した、道徳の実践を重んじる古義学や、荻生徂徠[7]が提唱した、古語を研究することで孔子や孟子の真意を知ろうとする古文辞学などがある。また十八世紀の中ごろには、これら既成の学問の長所を

---

[1] 南宋の朱熹が体系付けた儒教哲学で、節義や名分を重んじる厳格な道徳主義。

[2] （１５８３年～１６５７年）、京都の裕福な町人の家に生まれた。朱子学に通じ、家康に登用され文治政治を行った。

[3] （１６５７年～１７２５年）、十八世紀初めごろ政治を担当し、その政治を正徳の治と呼ぶ。

[4] （１６０８年～１６４８年）、近江の出身で、日本の陽明学の祖。

[5] 明の王陽明が体系化した儒教哲学で、知行合一を唱え、朱子学の弊を越えようとした。

[6] （１６２７年～１７０５年）、京都の出身で、古義学の祖。

[7] （１６６６年～１７２８年）、日本の古文字学の祖。

取捨選択した折衷学も表れた。

◎ 漢詩文

近世前期の漢詩文は主として漢学者の余技としての傾向が強く、朱子学の影響下で文学的情趣に乏しいが、その中にあって、隠者であった石川丈山と元政が前期漢詩文の双璧として並び称された。また古文辞学派からは、荻生徂徠を筆頭として、古典研究を通して優れた詩才を身に付けた詩人が表れ、服部南郭らが注目される。

十八世紀の中ごろになると、多くの詩社が形成されるなど、漢詩文に新しい動きが見られるようになった。地方にも優れた詩人が輩出し、備後の菅茶山は平明で清新な詩を詠み、豊後の広瀬淡窓は雅やかで端正な作風の詩を詠んだ。また、史書『日本外史』を著した頼山陽は詩作にも優れ、各地を転々としながら多くの詩を詠み、特に歴史のエピソードを題材とした詩に特徴がある。ほかに、放浪の詩人としても知られた梁川星巌が自由な態度で詩を詠んでおり、その妻張紅蘭は、頼山陽門下の江馬細香と並ぶ女流詩人として名を残した。以上のように近世後期の漢詩文には統一的な詩風はないが、さまざまな作者が個性的な作品を著し、漢詩文の全盛期を現出した。

第三節　小説

江戸時代、町人の経済力が増大し、寺子屋[①]をはじめとする教育の普及に伴ない、中世以来のお伽草紙から、もっと生活に密着した読み物を求める民衆の動きに応じて、浮世草子をはじめとする江戸時代特有の小説形態が誕生した。政治・文化の中心が上方から江戸に移るに従い、小説形態も多様化し、読本・洒落本・人情本など多彩をきわめ、滑稽本には民衆の笑いやパロディが表現され、黄表紙(きびょうし)・合巻(ごうかん)などの草双紙に人気が集まったが、江戸時代末期には、昔の活力を失い、新しい時代に即応できなくなっていった。

一、仮名草子と浮世草子

近世になると、幕府の文治(ぶんち)政策や印刷技術の発達によって、一部の人間に独占されていた書物は、広く一般書民の手にわたることになった。これに合わせて、庶民の啓蒙・娯楽を目的としたさまざまな書物がかなで書かれるようになった。これが仮名草子である。

仮名草子は近世のごく初期から表れ、浮世草子が表れるまでの約八十年の間に、『うらみのすけ』『醒睡笑(せいすいしょう)』『竹斎(ちくさい)』

① 江戸時代、庶民の子供に読書・習字などの初等教育を行った所。

『清水物語』『伊曾保物語』『可笑記』『二人比丘尼』『浮世物語』『御伽婢子』など、たくさんの作品が著された。これらの執筆にあたった人々は、江戸幕府の誕生によって職を失った浪人や公家、僧侶たちで、高い教養を持った人々であり、その代表として『浮世物語』や『御伽婢子』を著した浅井了意[1]があげられる。このように、仮名草子は庶民のために知識人が著した文学であったが、やがて庶民による文学としての浮世草子を生む基盤となった点で特筆される。

◎ 井原西鶴と浮世草子

元禄期（１６８８年～１７０４年）になると、町人たちは経済的余裕を得て享楽を追い求めるようになり、文学にも享楽を求められるようになった。そこで表れたのが井原西鶴に始まる浮世草子である。浮世草子とは仮名草子が質的に変化したもので、現実の生活や風俗を正確な観察によって描き出した小説群を指し、大きく分けて西鶴の時代と八文字屋本の時代に分けられる。

井原西鶴(１６４２年～１６９３年)は、本名平山藤五で、大阪の裕福な町人の家に生まれ、家業を手代に譲って母方の姓を名乗り、俳諧師となるが、後に家庭的には恵まれず、若くして妻に三人の子を残して先立たされ、そのうちの一

---

[1] （?～１６９１年)、僧侶。追放された父の寺の再興に生涯を尽した。ほぼ五十年にわたり仮名草子作者として活躍した。

人の子は盲目であった。談林派の俳人であった西鶴はもともと矢数俳諧を得意としていたが、西山宗因の死後散文に転向した。彼は俳諧においても古典趣味を離れ、世俗的要素を強くしたが、小説においても仮名草子のように古典に対する教養を基にして啓蒙的なことを書くのではなく、現実生活の風俗を見つめ、官能を肯定した作品世界を創り出した。中でも第一作の『好色一代男』は、主人公世之介の七歳から六十歳からまでの五十四年間の好色生活を、『源氏物語』五十四帖に倣って描いており、桜や月を鑑賞する古典趣味ではなく、好色という視点から浮世の人間生活を曇りのない目で見つめ、中世的な物語の世界から脱したという点で、仮名草子から浮世草子へと名称を変更するにふさわしい内容を持った作品といえる。

『好色一代男』が広範囲な読者の支持を得て成功した後、西鶴はさらに題材を広げ、多数の作品を生み出し、それらは、愛欲の世界を描いた武家社会をモデルとする武家物、説話に題材を求めた雑話物、町人と金とのかかわりを描いた町人物の四つに分類される。好色物としては、『好色一代男』に続いて『好色五人女』や『好色一代女』などが著され、西鶴は浮世草子作者としての地位を確立した。続いて西鶴は、武士の仇討談を集めた『武道伝来記』や武士の義理を描いた『武家義理物語』などの武家物や、『西鶴諸国ばなし』や『本朝二十不孝』などの雑話物を次々と著した。

また晩年は、町人の生活に眼を向けた町人物を著し、『日本永代蔵（にっぽんえいたいぐら）』では成功した町人の姿を描き、それまでの金儲けに否定的な社会に真っ向（まっこう）から挑戦した。さらに『世間胸算用（せけんむねさんよう）』では大晦日（おおみそか）に焦点を合わせ、容易に年を越せない町人の生活を、明るくユーモアに満ちた筆致で描いた。そこに西鶴の人間を見詰める目の鋭さが表れているといえる。

桜もちるに歎（なげ）き、月はかぎりありて入佐山（いるさやま）。ここに但馬（たじま）の国かねほる里の辺（ほとり）に、浮世の事をほかになして、色道ふたつに寝ても覚めても夢介（ゆめすけ）と替え名呼ばれて、名古屋三左（なごやさんざ）・加賀（かが）の八（やつ）などと、七つ紋の菱（ひし）にくみして身は酒に浸（ひた）し、一条通り夜更けて戻り橋。ある時は若衆出立（わかしゅでたち）、姿をかへて墨染（すみぞめ）の長袖、又は立て髪かつら、化物が通るとは誠にこれぞかし。

——『好色一代男』

口語訳

桜もすぐに散ってしまって歎きの種だし、月も限りがあって山の端に入ってしまう。但馬の国のかねほるの里の辺りから、世事を捨てて京にのぼった男は、花や月よりも限りない女色男色の道に打ち込んで、夢介とあだ名されていた。名古屋三左や加賀の八などと七つ紋の菱を印とする仲間を組んで、身は酒浸かしとなめ、一条通りを夜更けて戻ってゆく。ある時は若衆の格好、またある時は僧侶の格好、またある時は立て髪かつらをかぶったり、化け

物が通るとはまさにこのことである。

西鶴のめざましい活躍によって、浮世草子は次々に刊行され、出版元が本の作者となる形も多く行われた。しかし、大半は西鶴の亜流(ありゅう)で、彼を超えるものは表れなかった。そんな中で、京都の出版元八文字屋[①]が浄瑠璃作品も書いていた江島其(えじまき)セキと組んで送り出した。役者評判記を工夫した『傾城色三味線(けいせいいろじゃみせん)』などに始まる八文字屋本が注目される。とくに、『世間子息気質(せけんむすこかたぎ)』『浮世親仁気質(うきよおやじかたぎ)』などは気質物(かたぎもの)[②]と呼ばれ、停滞する浮世草子に新風を吹き込み好評を得た。

二、読本

絵を中心として文章で説明を付けた絵本に対して、文章を中心として挿し絵をつけた読み物を読本といい、実際には浮世草子が衰えはじめた十八世紀中ごろから現われた、中国の白話小説の翻案を中心とした伝奇小説を指す。読本は、中国の本格的な小説に刺激された知識人によって著され、彼らの思想や世界観をよく表している。

また、上方を中心として流行した読本は、やがてその中

---

① 八文字屋から出版された江島其セキらの著作をいうが、広くは十八世紀当時の浮世草子全般を指す。

② 特定の身分・職業などに話を限定して、そこに属する人間に特徴的な性格・癖・趣味などを誇張して滑稽に描いた風俗小説。

心を江戸に移し、上方を中心とした時期のものを前期読本、江戸を中心とした時期のものを後期読本と呼んで区別している。

◎ 前期読本と上田秋成

十八世紀中ごろ、最初の読本『英草紙（はなぶさぞうし）』、その続編『繁野話（しげしげやわ）』が読本の始祖といわれる大阪の儒医都賀庭鐘（つがていしょう）①によって著された。これらは雅俗折衷の和漢混交文でつづられ、後の読本に大きな影響を与えた。また、建部綾足（たけべあやたり）は『西山物語』『本朝水滸伝』を著し、上田秋成（うえだあきなり）は『雨月（うげつ）物語』を著して前期読本を完成に導いた。

上田秋成（１７３４年～１８０９年）は、歌人・国学者・読本作者で、四歳で大阪堂島の紙油商の養子（ようし）となるが、大火で家を失い医者となる。俳諧や国学を学び、さらに都賀庭鐘からの影響を受けて、中国の怪異小説をもとに『雨月物語』を著した。秋成はこの作品の世界を超現実の世界に設定することで、現実の世界にとらわれない生き生きとした人間を描き、文体についても、和文に漢語を交えた秋成独自の流麗な雅文体を創造した。ほかに晩年の作『春雨（はるさめ）物語』も注目される。

---

① （１７１８年～１７９４年）、大阪の人で、医者である。中国語に通じ、当時流行した白話小説の翻案を試みた。

◎ 後期読本と滝沢馬琴

秋成らの後、十八世紀末ごろになると読本の中心は次第に江戸へ移っていった。初めは、黄表紙　洒落本から転じた山東京伝[2]と、その弟子である滝沢馬琴の二人が、互いに相手を意識し競い合いながら作品を発表していった。京伝は「忠臣水滸伝」「桜姫全伝曙草紙」などで評判を取るがその後ふるわず、読本作者としては馬琴に道を譲ることになった。

滝沢馬琴（１７６７年～１８４８年）は、別号曲亭。江戸の下級武士の家の出身で、中国の小説をヒントにし、整然と組織化された構成の中に勧善懲悪[2]・因果応報の姿勢をはっきりと示した。また歴史上の事件に題材を採ったいわゆる史伝物を著した。保元の乱以後、伊豆から琉球にわたった源為朝の活躍を描いた『椿説弓張月』は、その中での傑作とされる。また『南総里見八犬伝』は彼の代表作で息子の死や自らの失明という不幸を乗り越え、完成まで前後二十八年を費やした大作である。この作品では善と悪がはっきりと分けられ、八犬士がそれぞれ八つの徳を表すという発想や血生臭い戦闘の描写など、その作品世界は現代の劇画そのものの世界である。近代では、生きた人間が描か

---

[1]　（１７６１年～１８１６年)、江戸深川の生まれ。北尾政演の名で浮世絵師として活躍。後、戯作文学に進み、読本以外に黄表紙や洒落本に代表作を残した。

[2]　善事を勧め、悪を懲らしめることで、江戸時代の重要な文学思想である。

れていない、ストーリーに偶然が多いといった理由で批判されることにもなるが、スケールの壮大さ、波乱万丈の展開など、ほかの作家には真似のできない迫力のあるものであった。

三、洒落本・人情本・滑稽本

◎ 洒落本

洒落本とは、吉原などの遊里を舞台として、そこでの遊興のありさまを会話体の文章で克明に描き出した短編小説であり、客や遊女の風俗や心理などが細かく描写されている。それを通して、どうすることが流行に通じていて遊びの何たるかを知っているということなのかを示そうとしており、通[①]その反対の野暮というものを主題にした小説である。

初め上方に起こった洒落本は、田舎老人多田爺の『遊子方言』によって様式が確立され、江戸に定着した。その代表的作家は山東京伝であり、『通言総まがき』『傾城買四十八手』などの作品が知られている。京伝は誰よりも遊里に対する愛情の深い町人作家であり、暖かい人間性に裏付けられた鋭い観察でその世界を描いたが、寛政

---

① 通は、遊里などの事情をよく知っていて、適切な行動や態度が取れるような洗練された状態をいい、表現する場合も知識を自慢しない。反対は野暮。

の改革の禁に触れて処罰され、以後、洒落本は衰退していった。

◎ 人情本

末期の洒落本は男女の恋を感傷的に描き、舞台も時として遊里から一般社会にまで広がった。人情本は、これと通俗的傾向の強い読本が合流したもので、町人社会での恋愛や人情の葛藤を描いて婦女子の涙を誘ったので、初期には泣本（なきほん）とも呼ばれた。代表的な作者は為永春水（ためながしゅんすい）（１７９０年～１８４３年）で、多く、一人の男に二人あるいは三人の女を配してそのさまざまな恋愛模様を描いた。代表作は『春色梅児誉美（しゅんしょくうめごよみ）』とその続編にあたる『春色辰巳園（しゅんしょくたつみのその）』で、色男丹次郎（たんじろう）をめぐる女たちの心情がよく描かれている。ここに粋（いき）[1]に生きる女性たちの姿がある。ほかに、曲山人（きょくさんじん）の仮名文章娘節用（かなまじりむすめせつよう）』などが注目される。

人情本は、十九世紀前半に大流行したが、天保の改革で春水が処罰されると、次第に衰えていった。

◎ 滑稽本

滑稽本は笑いを目的とした小説である。当時は中本と呼ばれ、値段も手ごろで内容もそれに伴なった読みやすくおもし

---

[1] 江戸の遊里から出て一般化した美的理念で、九鬼周造によれば「垢抜して、張のある、色っぽさ」。情にもろく、また義に強い美意識で、特に人情本では色街の女性が身につけている。

ろい読み物であった。滑稽本は前期と後期に分けられる。

前期滑稽本は、宝暦年間（１７５１年～１７６４年）を中心に流行したもので、静観房好阿の『当世下手談義』や風来山人の『根南志具佐』『風流志道軒伝』などがある。これらは談義本と呼ばれ、滑稽の中に教訓性と風刺を含んだ点に特徴がある。後期滑稽本は、享和二年（１８０２年）から刊行された十返舎一九[1]の『東海道中膝栗毛』に始まる。この作品は、弥次郎兵衛と喜多八の東海道中記で、屁理屈や駄洒落を盛り込んだ会話体で道中の失敗を滑稽に描いた通俗的な小説である。同じ通俗的な滑稽本で成功したのは式亭三馬[2]である。彼は当時の江戸庶民の社交場であった銭湯や床屋を舞台に『浮世風呂』『浮世床』を著し、そこでのかれらの会話を通して庶民の姿をユーモラスに生き生きと描いている。

四、草双紙

十七世紀後半から明治初期にかけて出版された絵本は草双紙と呼ばれ、赤本―黒本・青本―黄表紙―合巻の順に展開した。赤本の名は表紙の朱色にちなんでおり、その内容は『花咲かじじい』や『桃太郎』などの民話を主とした幼児向けのものである。黒本・青本も表紙よりその名が

---

[1] （１７６５年～１８３１年）、下級武士の家の生まれで、戯作者。
[2] （１７７６年～１８２２年）、江戸の人。戯作者。

あり、歌舞伎の粗筋紹介や戦記など、より大人向けの内容を持っていた。

◎ 黄表紙と合巻

恋川春町の『金々先生栄花夢』に始まる黄表紙は、黒本・青本からさらに進んだもので、文と絵にほとんど同等の重さが置かれ、完全に大人の読み物として耐え得るものとなった。また、洒落や滑稽・風刺を多分に含んでおり、山東京伝が『江戸艶気樺焼』を発表した十八世紀後半には大いに流行した。

合巻は、幕府の干渉によって敵討物に流れた黄表紙が長編化して何冊かを合冊にして出版したものである。式亭三馬の『雷太郎強悪物語』を初め、多くの作品が著されたが、合巻の第一人者である柳亭種彦の『偐紫田舎源氏』が大好評を得た。

以後、合巻はますます長編化し、明治二十年ごろまで続いた。

第四節　劇文学

近世では、舞楽は宮中や大社寺で儀式の際開催されるにすぎず、また能は、武家の式楽として催され、その謡曲は武士や一部の町人の嗜みとして広く行われたが、曲目は武

家の好みに合わせて固定化していった。一方、庶民の間では多岐にわたる芸能が継承、生成され生活に深く根づいていたが、近世芸能の主流となったのは人形浄瑠璃と歌舞伎である。

一、浄瑠璃と近松門左衛門

浄瑠璃は人形浄瑠璃のことで、三味線を伴奏として物語を語り、それに合わせて人形を操る芸能である。平曲以来、語り物は根強く行われていたが、室町時代末に伝来した三味線と伝統的な人形遣いとが結びついて人形浄瑠璃が誕生したのである。初め、京都で栄えた浄瑠璃はやがて江戸でも流行し、さまざまな流派を生んだが、荒々しく剛勇な金平が悪者を退治するという勇壮な金平物が、江戸町人の気質に合って人気を呼んだ。また京都では、金平物の流行に対抗して、謡曲や平曲、幸若舞などの曲節を重視した京都風の味わいを特色とする宇治加賀掾嘉太夫節が流行した。

近松門左衛門（１６５３年～１７２４年）は、武家の出身で、本名杉森信盛。二十代半ばから戯曲を書き始めた。加賀掾に座付作者として起用され、『世継曽我』を書いて世間に名を広めた。これ以後、近松は人形浄瑠璃作者として活躍する。貞享元年（１６８４年）、加賀掾の弟子の

竹本義太夫[1]が独立し、大阪道頓堀に竹本座を起こすと、近松は『出世景清』を書いて贈り、以来二人はコンビを組むことになり、義太夫節をもって浄瑠璃全盛の時代を築き上げた。近松はおよそ百二十の浄瑠璃作品を著したが、それらは世話物と時代物とに分けられる。

世話物は、現実に起きた事件をもとに脚色した作品で、町人の義理と人情の哀切な世界を抒情的に描いたものを言う。『曽我崎心中』『冥途の飛脚』『心中天網島』『女殺油地獄』などが好評を得た。

この世のなごり。夜もなごり。死にに行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜。一足づつに消えていく。夢の夢こそあはれなれ。

——『曽我崎心中』

口語訳

今は、この世との別れ、夜も今夜が最後。死んで行こうとする私たち二人をたとえるなら、道の霜が一足ごとに消えていくのと同じで、夢の中の夢のようにはかなく哀れだよ。

時代物は、江戸時代以前の公家や武家にまつわる歴史的事件や伝説を素材とし、事実よりも人間の対立葛藤に重点をおいた物語性豊かな作品をいい、『出世景清』『傾城反魂

---

① （１６５１年～１７１４年）、浄瑠璃節のさまざまな傾向を取り入れた義太夫節で注目を浴び、義太夫節は大流行し、現代まで伝えられている。

香』『国性爺合戦』などがある。

近松の演劇は、穂積以貫の『難波土産』に＜虚実皮膜論＞として述べられているが、虚（創作・虚構）と実（事実・現実）との間の皮膜（微妙な違い・紙一重の差）にこそ芸術は存在するもので、事実をそのまま描写しても真実に迫ることはできないとした。

二、歌舞伎

歌舞伎は中世の風流踊りから派生したもので、派手な衣装で踊るものであった。そのような人目に立つ身なりや異様な行動をすることを「傾く」といい、歌舞伎の語源となっている。

◎ 初期歌舞伎

慶長八年（１６０３年）ごろ、出雲大社の巫女といわれる出雲の阿国が京都で歌舞伎踊りを踊った。男装をして刀を差し、派手な衣装をまとい遊女と戯れる阿国の歌舞伎踊りが影響を与え、諸国に女歌舞伎が流行したが、幕府は社会秩序を乱すとの理由で禁止してしまった。次に、美少年の演じる若衆歌舞伎が人々の人気を集めたが、これもまた同じ理由で禁止された。そのため歌舞伎は一時途絶えたが、町人たちの願いを受け、女性と少年の出演を排除する条件で幕府はこれを許可した。それが野郎歌舞伎である。女歌

舞伎や若衆歌舞伎に対して容色の魅力に頼らず、踊りのない、せりふとしぐさを中心とする男ばかりの演劇だが、狂言風の滑稽で単純な写実劇から、次第に内容に工夫を凝らし、二場面以上に展開する続き狂言へと発達していった。

◎ 元禄歌舞伎

元禄期までに、歌舞伎は人々の支持を受けて大いに発展し、京都や江戸には常設の劇場もできた。このころの代表的な役者は、京都の坂田藤十郎（さかたとうじゅうろう）と江戸の市川団十郎（いちかわだんじゅうろう）である。藤十郎は、近松門左衛門を座付作者に採用し、京都の文化的環境に合った柔らかみのある写実的な演技を見せ、その芸風は和事（わごと）①といわれる。一方団十郎は、『参会名護屋（さんかいなごや）』などの作品を書いて自演自作した。勇壮な主人公が弱者を助けるというテーマで一貫しており、その芸風を荒事（あらごと）②という。この時代は、団十郎のような俳優による脚本もあったが、近松のような専門の劇作家が誕生したという点で、戯曲の歴史上注目に値（あたい）する。

元禄期以後、人形浄瑠璃の圧倒（あっとう）的な人気に押されて京阪での歌舞伎は下火（したび）になるが、江戸歌舞伎は新作の上演、劇場施設の改良、人形浄瑠璃の技巧の摂取（せっしゅ）により活発な動き

---

① 世話物などで主人公の男女が情緒たっぷりに心のうちを表現し、観客の気持ちを刺激する恋愛の場の演技。

② 江戸歌舞伎の特徴をなす芸で、悪を制圧する場面の豪快で荒々しい演技をいい、様式化されている。

を見せた。それが上方にも影響を与え、浄瑠璃の衰退、歌舞伎の隆盛を招いた。主な作者に並木正三・並木五瓶・桜田治助・奈河亀輔がいる。

◎ 化政期の歌舞伎と河竹黙阿弥

滝沢馬琴（曲亭馬琴）や小林一茶が活躍した文化文政のころ、劇作家として活躍したのが四世鶴屋南北[①]である。世相や風俗に取材した写実的な生世話狂言を得意とし、早変わりの趣向や大道具の仕掛けなどを用いて迫力ある舞台構成を心掛けた。代表作には『東海道四谷怪談』がある。

幕末から明治にかけて、優れた戯曲を発表したのが河竹黙阿弥である。黙阿弥（１８１６年～１８９３年）は、江戸時代末期の歌舞伎作の集大成者であり、生涯に約三百六十の作品を作った。生世話狂言の中でも盗賊を題材とした白浪物を得意とし、勧善懲悪のテーマと五七調のせりふ、魅力的な人物を配慮した作品は観客の心をよくとらえた。代表作には『鼠子紋東君新形』『三人吉三廓初買』『青砥稿花紅彩画』などがある。また、明治期には時代の傾向にそった新しい作品を著した。

---

① （１７５５年～１８２９年）、怪談や幽霊物を得意とする。

練習問題

(一) 次の各問いに答えてください。

問一 次の（1）—（3）の人物と最も関係の深いことがらを、後の（ア）—（ク）の中からそれぞれ二つずつ選んでください。

（1）松永貞徳　（2）西山宗因　（3）松尾芭蕉

（ア）蕉門（イ）貞門　（ウ）談林派　（エ）桂園派（オ）「俳諧御傘」（カ）鶉衣（キ）向井去来　（ク）井原西鶴

問二 松尾芭蕉の紀行文で、一六八九年の東北への旅を記録したものは何か。

問三 蕉風俳諧の理念を四つ挙げてください。

問四 蕉門の人物で、芭蕉の俳論をまとめて「三冊子」を著したのはだれか。

問五 天明の中興のころ、俳文「鶉衣」を著したのはだれか。

問六 天明の中興を代表する俳人で、絵画的な句を詠んだのはだれか。

問七 小林一茶の代表な句文集で、亡き娘への追悼を込めた作品は何か。

(二) 次の各問いに答えてください。

問一 （1）狂歌と（2）川柳に最も関係の深い人物を次の（ア）—（エ）の中から一つ選べ。

良寛　（イ）柄井川柳　（ウ）四方赤良　（エ）上田秋

成

問二　「万葉代匠記」を著し、国学の基礎を築いたのはだれか。

問三　国学の大成者で、「古事記伝」を著したのはだれか。

(三)　次の文章の空欄（１）―（１２）にあてはまる言葉を、後の（ア）―（セ）の中から一つずつ選んでください。

中世末期の御伽草子の後を受けて、近世初期には仮名草子が盛んに書かれ、次いで（１）の「好色一代男」に始まる（２）が庶民の人気を集めた。（１）は好色物．町人物などの作品を著した好評を得たが、（１）没後、（２）は衰え、代わって（３）の「雨月物語」や曲亭馬琴の（４）を代表とする（５）や、洒落本．（６）．人情本などが書かれるようになった。洒落本の代表作家は（７）で、（６）では（８）を著した十返舎一九や「浮世風呂」を著した（９）が、人情本では「春色梅児誉美」を著した（１０）が代表的である。

また、婦女子向けの絵本に草双紙があり、（１１）では恋川春町の「金々先生栄花夢」、合巻では柳亭種彦の（１２）が名高い。

（ア）浮世草子　（イ）八文字屋本　（ウ）読本　（エ）赤本　（オ）滑稽本　（カ）黄表紙　（キ）山東京伝　（ク）上田秋成　（ケ）式亭三馬　（コ）井原西鶴　（サ）為永春水　（シ）「偽紫田舎源氏」　（ス）「南総里見八犬伝」

（セ）「東海道中膝栗毛」

（四） 次の各問いに答えてください。

問一　浄瑠璃の全盛期を現出した近松門左衛門の作品を次の（ア）—（カ）の中からすべて選んでください。

（ア）「曽根崎中心」　（イ）「義経千本桜」　（ウ）「国性爺合戦」　（エ）出世景清　（オ）「冥途の飛脚」　（カ）「難波土産」

問二　歌舞伎作者鶴屋南北の代表的な怪談は何か。

問三　「三人吉三廓初買」の作者を答えてください。

第五章　近代の文学

第一節　近代文学の概況

一、近代文学の誕生と発展

明治維新から現在までの日本の歴史を、通常、近代・現代と二分して扱う。なお、明治以降現在までを一括して近代と呼ぶことが多く、また、近代・現代と二分するときは第二次世界大戦までを近代、戦後を現代とする考え方が一般的である。

明治の新政府は、文明開化の掛け声のもと、欧米諸国を模倣した近代化を急速に進め、明治二十年代の初めには、帝国憲法発布、帝国議会開設と続き、新しい国家体制が整備された。明治維新から約二十年間は、近世から近代への過渡期(かとき)といえ、文学の世界でも啓蒙的なものが目立ち、文学的価値のあるものはあまり見られない。しかし、封建制を脱し、新時代を希求する気運の中で、人間尊重・個性開

花の芽は、とくに青年たちの間で着実に育っていった。二十年をすぎると、訳詩集『於母影』がヨーロッパの浪漫性を伝え、短歌界では、「浅香社」から与謝野鉄幹らのすぐれた歌人が出た。また俳句では、正岡子規が、新聞「日本」紙上で俳句革新に着手した。一方散文では、言文一致体が完成し、尾崎紅葉を中心とした「硯友社」の隆盛とともに、幸田露伴・森鴎外・北村透谷らが文壇に影響を与えた。この時期は近代文学の胎動期という。

近代文学の誕生は明治二十年以後とされる。明治二十七年（１８９４年）、日清戦争に勝利した日本は、日露の戦いに向けて国家主義の思想をいよいよ強めていった。日清戦争後は、目覚しい経済発展の中で資本主義体制が確立されていく。このような進展の中で、個人主義、自由主義思想が強まり、文学の上でも、自我の解放を試みた浪漫主義が盛んになる。島崎藤村の詩集『若菜集』は、その香気ある清新さで文学愛好の青年たちをひきつけ、『明星』を創刊した与謝野鉄幹らとともに、詩・短歌の世界で空前の盛況を誇った。一方、資本主義社会に表れる社会の矛盾や悲惨な現実に対し、批判を試みた悲惨小説が起こったが、文芸運動としては微力なものに終わった。

日露戦争の勝利により世界の強国の仲間入りをした日本の社会は、急激に発展したが、それとともに現実認識を要求する風潮も強まり、十九世紀のヨーロッパ文学の主流で

あった自然主義が、日本独自の方法で取り入れられた。その出発点としては島崎藤村の『破戒』があげられるが、この自然主義の思潮は、島村抱月の理論の裏付けのもとに、まず散文の世界に急速に広まった。さらにこの思潮は詩歌にも波及し、口語自由詩の試みや、日常の生活を歌う石川啄木らの歌人たちの出現、自由律俳句の芽生えなどをもたらした。

一方、自然主義一色の文壇にあって、これに批判的な立場から独自の文学を主張する人々も表れ、中でも理性と知性を主体とした夏目漱石は余裕派と呼ばれ、森鷗外と当時の文壇を二分した。ここまで来ると、近代文学はとうとう成立した。それからまもなく最盛期を迎える。

明治の末から大正の初期にかけて、美を最高のものとする芸術至上主義の立場をとった、享楽的・退廃的な耽美派と呼ばれる一派が出現する。小説では永井荷風・谷崎潤一郎、詩では北原白秋があげられる。大正三年第一次世界大戦が起こると、日本社会は飛躍的な発展を遂げ、政治的にも自由主義の気運がみなぎり、折りからの理想主義的な世界思潮が流入してくる。個性の尊重、生命の創造力を信ずる思想を、文芸上で実行したのが、雑誌「白樺」の同人たちであり、武者小路実篤はその思想的指導者だったが、大戦後の社会は不景気に転じ、観念的な理想主義の足場が崩れた結果、雑多な個性が自己に即してそれぞれの内面的真実を

掘り当てようとする、現実的傾向が旺盛になった。新現実主義と呼ばれる文学がそれで、この運動は雑誌「新思潮」の同人たちが中心となった。またこの時期、短歌では「アララギ」、俳句では「ホトトギス」が主流であるが、荻原井泉水は、無季自由律を主張した。

第一次大戦後の不況の中で労働運動が活発化し、大戦中のデモクラシーの思想は、ロシア革命の成功に刺激されて社会主義思想へと変化していった。「種蒔く人」「文芸戦線」などの雑誌に集まったプロレタリア文学の作家たちは、階級対立の現実を直視し、労働者の解放をめざした。一方、文学の芸術の立場を維持し、感覚の論理に従うことを主眼とした新感覚派が登場する。横光利一や川端康成ら新感覚派の作家たちは「文芸時代」を中心に活動を展開し、後の新興芸術派・新心理主義に影響を与えた。

プロレタリア文学は、昭和三年、全日本無産者芸術連盟（ナップ）が結成されて以来、当時の文壇に君臨するに至るが、昭和六年の満州事変の前後から、社会の情勢は次第に軍国主義へと進み、政府の厳しい弾圧のもとで、プロレタリア作家たちは活動の自由を失い、転向せざるをえない状況に追い込まれた。これ以後昭和二十年の敗戦まで表現の自由を奪われ、文学者たちは国策文学・戦意高揚文学に向かうか、あるいは沈黙するかの選択を強いられ、暗黒の時代が続く。俳壇においては、戦争批判の句を発表してい

た俳人たちが検挙される「京大俳句事件」が起こる。

二、戦後の文学

敗戦によって日本の社会は一変し、思想・表現の自由が保障されると、文壇の復興も著しく、雑誌の復刊・創刊があいついだ。谷崎潤一郎ら既成作家の活動、プロレタリア文学を継承する民主主義文学の中心となる「新日本文学」の創刊、戦後文学の中心となる「近代文学」の創刊などが大きな流れを作った。一方桑原武夫の「第二芸術論」は、俳壇・歌壇に大きな論議を巻き起こした。また詩壇では、「荒地」「列島」の詩人たちが戦後詩の出発に力を示した。

昭和二十年代後半から三十年代にかけて社会は安定期に入り、四十年代には高度成長期を迎える。豊かな大衆社会は複雑化・多様化し、マスメディアの発達とともに文学の大衆化が進む。ボーダーレスの時代ともいわれ、純文学と大衆文学の間も縮まり、作家たちはさまざまな場面や分野で活躍している。一方短詩型の分野を初めとして女性の進出が著しく、趣味の域を超えた人たちの活躍など、裾野の広がりは、今後の新しい時代を期待させる。

三、近代の演劇

演劇は政府主導の改良運動に始まり、明治三十九年の文芸協会設立を起点にして、島村抱月の芸術座と、小山内薫の自由劇場を中心に進んだが、それぞれ大正中期には衰退した。日本の近代劇運動の成熟は、大正十三年の築地小劇場結成を待つことになる。最初、翻訳劇中心であった戯曲も純粋な劇作家の登場で、さまざまなテーマの力作が上演され、プロレタリア文学の影響も受けながら、新しい演劇を模索していく。第二次大戦後は、すぐにいくつかの劇団が成立し、活況を呈するようになる。

第二節　詩歌

一、近代詩

◎ 新体詩

日本の近代詩は、『新体詩抄』によって提唱された「新体詩」から始まる。明治十五年（１８８２年)、文明開化の改良主義に基づいて、新しい時代の思想や感情を表現できる新しい詩形が模索されていた時期に、新詩形の誕生を告げる『新体詩抄』が刊行された。『新体詩抄』は、外山正一・

矢田部良吉・井上哲次郎の三人の学者による編著であったが、詩歌といえば漢詩や和歌を指していた当時の伝統的な詩形を否定する立場から発表された初めての詩集となった。三人は、西洋の詩に倣って、詩自体の革新に意識的に取り組もうとし、新詩形の探求、用語の自由・日常語化、題材の拡充などを試みたが、実作においては七五調の長詩を可能にしただけで、詩人としての資質にも恵まれていなかったため、内容面での完成度はあまり高くなく、文学的評価を得ることはできなかった。

しかし、『新体詩抄』によって示された意欲は、当時の青少年たちに広く浸透し、大きな影響を与えた。そして、ここまでの試みは課題として残され、本格的な模索が明治二十年前後から始まった。明治二十年代には浪漫的な気運がおこり、西洋詩の形式的な模倣を一歩進めて、新体詩は芸術的完成を見ることになる。ドイツから帰国した森鴎外[1]を中心とする新声社同人の訳詩集『於母影』（１８８９年）は、ヨーロッパの浪漫主義の香りを伝えようと、西洋詩の翻訳をさまざまに工夫し、古典的かつ気品のある言葉と用いた技術的努力によって、大いに愛唱される訳詩集となった。

---

[1]　（１８６２年～１９２２年）、小説家。本名林太郎。島根県生まれ。東京帝国大学医学部を卒業し、陸軍軍医となり、若々しくてドイツへ留学へ。帰国後、医学・文学両面で活躍し、後陸軍軍医総監となった。夏目漱石と併称される文豪。

◎ 浪漫主義の詩

明治二十六年（１８９３年）、キリスト教思想を中心とする浪漫主義運動を展開する「文学界」が創刊され、「文学界」の同人、北村透谷①は、長詩『楚囚之詩』（１８８９年）を書き、青年の苦悩、自我と現実の葛藤を表現した。透谷の影響を受けた島崎藤村は、青春の切実な恋愛体験を、新しい時代の息吹を伝える清新な詩風によってうたい、詩の新時代の幕開けを告げた。第一詩集『若菜集』（１８９７年）は、近代日本の青春と藤村自身の青春とが重なる「青春の詩集」となったが、『一葉舟』（１８９６年）・『夏草』（１８９８年）・『落梅集』（１９０１年）と刊行するにしたがって、次第に青春への惜別が語られ、現実へのまなざしが深められていった。後にこの四冊は『藤村詩集』（１９０４年）にまとめられた。藤村は、日本人の情緒を西洋の近代詩の形に乗せることで、青春の苦悩と漂泊の思いを伝統的な七五調の表現として定着させた点で高く評価される。

藤村とともに明治三十年代に活躍した詩人に土井晩翠②がいる。晩翠は漢語を駆使した力強い詩風で、和語をもって叙情詩を詠んだ藤村と好対照をなしている。晩翠は特に雄壮な長編叙事詩にすぐれていた。彼の代表的詩集としての『天地有情』（１８９９年）の「星落秋風五丈原」は特に有

① （１８６８年～１８９４年）、自由律の叙事詩『楚囚之詩』を作った。
② （１８７１年～１９５２年）、詩人。

名である。

◎ 象徴詩

薄田泣菫や蒲原有明らは、藤村の影響を受けて詩作を始めた詩人である。泣菫は、藤村が確立した浪漫的な詩風を受け継ぎながらも、より理知的で技巧的な傾向を、『暮笛集』（１８９９年）・『ゆく春』（１９０１年）で表した。さらに『白羊宮』（１９０６年）では、象徴詩の試みとともに、古語や雅語を自在に駆使した清冽な詩を作った。

『草わかば』（１９０２年）や『独絃哀歌』（１９０３年）のころの有明は、『若菜集』以来の浪漫詩の完成者であったが、『春鳥集』（１９０５年）では、フランス象徴詩の影響を受けながら、日本の象徴詩法を開花させた。さらに『有明集』（１９０８年）では、それを深化・発展させ、近代詩の成熟に足跡を残した。

明治三十八年（１９０５年）に刊行された上田敏の訳詩集『海潮音』は、象徴詩の完成に大きな役割を果たしたのである。上田敏は、１８７４年東京都に生まれ、１９１９年没。東大英文科を経て留学。帰国後、京大教授となる。ヨーロッパ文学研究のほか、翻訳家・評論家・詩人・小説家として活躍した。森鴎外とともに、後の耽美主義の理論的支柱となる。彼は、主として高踏派や象徴派の作品を創作に匹敵する美しい韻律で紹介した。ボードレール、マラ

ルメ、ヴェルレーヌなどの象徴詩を移入した功績は大きい。

◎ 耽美主義の詩と北原白秋

上田敏や永井荷風らの影響を受けて、北原白秋・木下杢太郎①・三木露風②らは、「スバル」（１９０９年）を創刊し、明治四十年代から大正にかけて、耽美主義の新風を掲げて活動した。白秋（１８８５年～１９４２年）は、福岡県出身。「スバル」に集まった「パンの会③」を代表する詩人で、官能の解放を求めた異端的な象徴詩集『邪宗門』（１９０９年）をはじめ、『思ひ出』（１９１１年）や『東京景物詩及其他』（１９１３年）などを発表した。『思ひ出』の序文「わが生ひたち」は名文として広く知られる。次はその冒頭の引用である。

> 私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠のにほひには日に日に廃れてゆく旧い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。

また杢太郎は、異国情緒溢れる南蛮詩を作り、『食後の

---

① （１８８５年～１９４２年）、詩人・劇作家・小説家・歌人・医学者。
② （１８８９年～１９６４年）、童謡「赤とんぼ」の作者として知られる。
③ 「パン」とは「牧羊神」のことで、耽美主義の芸術家の談話会として、明治４１～４５年ころまで続いた。

唄』(１９１９年)によって江戸情緒に迫った。一方露風は、叙情詩集『廃園』（１９０９年）や、『白き手の猟人』（１９１３年）を発表し、情調象徴詩という形を創り出した。

◎ 口語自由詩の芽生え

自然主義の文学運動は、口語自由詩の気運をも生じさせたが、川路柳虹は、「塵溜」（『路傍の花』収・１９０７年）で、自由な形式と平明な口調により日常の生活実感を表現し、石川啄木は、実作を試みるとともに、評論『食ふべき詩』で、口語による実生活に根差した詩を主張した。

◎ 高村光太郎と理想主義の詩

高村光太郎（１８８３年〜１９５６年）は、東京都の生まれ。彫刻家・詩人。早くから「明星」や「スバル」に詩や評論を載せ、耽美的傾向を示していたが、やがて、後に妻となった長沼智恵子との出会いや、「白樺」の理想主義・人道主義に共鳴して、生の賛歌に満ちた『道程』（１９１４年）を刊行した。これは完成された口語自由詩の最初の収穫であり、特に後半は、人道主義的理想主義の情熱が強くうかがえる内容となっている。

僕の前に道はない
僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ

父よ

僕を一人立ちにさせた広大な父よ

僕から目を離さないで守る事をせよ

常に父の気魄を僕に充たせよ

この遠い道程のため

この遠い道程のため

___高村光太郎『道程』

「白樺」を代表する詩人であった千家元麿（せんげもとまろ）は、『自分は見た』（１９１８年）で、庶民感覚と生命賛歌を、平易な口語自由詩としてまとめた。また、福士幸次郎（ふくしこうじろう）は、生の尊厳を『太陽の子』（１９１４年）で示し、尾崎喜八は、田園生活と自然への感動を『空と樹木』（１９２２年）で歌い、キリスト教伝道師の苦悩から人道主義に進んだ山村暮鳥（やまむらぼちょう）は、『風は草木にささやいた』（１９１８年）・『雲』（１９２５年）で、人生と自然に順応（じゅんおう）した詩風を見せた。

一方、法華経（ほけきょう）の影響を強く受けた宮沢賢治（みやざわけんじ）[1]は、『春と修羅（はるとしゅら）』（１９２４年）を、熱烈なキリスト教信者の八木重吉（やぎじゅうきち）は、『秋の瞳（ひとみ）』（１９２５年）を刊行したが、ともに当時無名の詩人であった。

---

① （１８９６年～１９３３年）、岩手県生まれ。詩人・童話作家。『注文の多い料理店』・『銀河鉄道の夜』などの童話の名作がある。

◎ 萩原朔太郎と『月に吠える』

萩原朔太郎（１８８６年～１９４２年）は、群馬県生まれ。詩の本質は感情の表現にあるとして、大正五年（１９１６年)、北原白秋を通して知り合った室生犀星①とともに「感情」を創刊し、翌年には詩集『月に吠える』（１９１７年）を出版した。ここに近代詩は、『新体詩抄』以来の歩みの到達点を迎える。

朔太郎は、『月に吠える』で、近代人の孤独意識を生理的な恐怖としてとらえ、それを病的ともいえる豊かなイメージに託して表現した。また、日本語に内在する音楽性を生かした独自の口語自由詩を確立し、近代詩の領域に新しい分野を開拓する画期的な業績を残した。『月に吠える』は、その思索と感覚とを深化させ、憂愁と倦怠に満ちた『青猫』（１９２３年）とともに、従来の叙情とは異なる生の意義を追い求めた詩精神を示したとで、同時代や次代の詩人たちに大きな影響を与えた。

光る地面に竹が生え、
青竹が生え、
地下には竹の根が生え、

---

①　（１８８９年～１９６２年)、詩人・小説家。石川県出身。不幸な幼年時代を経て、北原白秋の影響のもと、朔太郎とともに詩作に励み、後小説にも染めた。

根がしだいにほそらみ、
根の先より繊毛が生え、
かすかにけぶる繊毛が生え、
かすかにふるえ。
かたき地面に竹が生え、
地上にするどく竹が生え、
まつしぐらに竹が生え、
凍れる節節りんりんと、
青空のもとに竹が生え、
竹、竹、竹が生え。

――― 萩原朔太郎『月に吠える』

人道主義溢れる特異な叙情を美しく感覚的に表現した犀星は、救済としての愛が主題の『愛の詩集』(1918年)、故郷への屈折した思いを歌った『抒情小曲集』(1918年)により、詩人としての立場を確立した。また、佐藤春夫①も古典的な叙情の世界を展開した。死後、ようやく真価が認められた宮沢賢治は、信仰と農村生活との中で、特異な詩的宇宙を築き上げていった。『春と修羅』(1924年)の詩集や多くの童話が残されている。

日夏耿之助・西条八十らは、芸術至上主義的立場をとった。耿之助は、『転身の頌』(1917年)・『黒衣聖母』

---

① (1892年〜1964年)、詩人・歌人・小説家・評論家。和歌山県出身。詩集『殉情詩集』、小説『田園の憂鬱』・『都会の憂鬱』がある。

（１９２１年）で孤高の世界を、八十は、『砂金』（１９１９年）で、繊細な感覚と仄かな哀愁を支えた幻想的なイメージを描いた。

◎ プロレタリア詩の誕生

大正期は、象徴詩の芸術派と平易な口語詩の民衆派との対立の中で発展し、口語自由詩の成立で近代詩の完成をみたが、大正末期には、ヨーロッパの前衛主義芸術運動[①]の影響のもとに、この両者を否定する動きが起こった。大正十年（１９２１年）、平戸廉吉の「日本未来派宣言運動」を先駆に、高橋新吉は『ダダイスト新吉の詩』（１９２３年）を発表し、萩原恭次郎は、雑誌「赤と黒」（１９２３年）を創刊して、詩の変革を目指した。また、「亜」（１９２４年）を創刊した北川冬彦や安西冬衛らは、短詩・新散文詩運動を展開した。さらに堀口大学は、フランスの象徴詩からシュールレアリスム（超現実主義）運動までの成果を、訳詩集『月下の一群』（１９２５年）で紹介した。

一方、プロレタリア文学運動は詩の世界にも及んだ。プロレタリア詩は、階級革命運動の思想宣伝に使用されたため、主義・主張に終始した未熟な作品が多かったが、中野重治は、刊行とともに発売禁止となった『中野重治詩集』（１９３５年）に、生活の実に即したしなやかな作品を

---

① 第一次大戦前後からヨーロッパ各地におこった芸術運動の総称。既成の芸術観念を否定・破壊して、革新的な芸術を創造しようとした。

書いた。そのほか、窪川鶴次郎・小熊秀雄・壷井繁治・小野十三郎らも独自の風刺と抵抗の作品を書いた。

◎ モダニズムの詩

文学にも次第に政治による制限が加わる中で、昭和三年（１９２８年）、春山行夫らは「詩と詩論」（のち「文学」と改題）を創刊し、<エスプリ・ヌーヴォー（新しい精神）>を提唱した。主情的な詩を否定し、主知的な詩を作ろうとするこの運動は、「モダニズム詩運動」として定着した。また西脇順三郎は、独自のシュールレアリズム理論を展開したが、これに反対する北川冬彦らは、「新現実主義」を唱えて「詩・現実」（１９３０年）を創刊した。いずれにしても、この「モダニズム詩運動」からは、西脇の『Ambarvalia』（１９３３年）、北川の『戦争』（１９２９年）、安西冬衛の『軍艦茉莉』（１９２９年）、北園克衛の『白のアルバム』（１９２９年）、竹中郁の『象牙海岸』（１９３２年）、村野四郎の『体操詩集』（１９３９年）などの収穫がもたらされた。

◎ 「四季」派と「歴程」派

昭和十年代は、日本の古典や思想を見直そうとする中で、叙情の復興を目指す試みがなされた。思弁的な傾向の「コギト」（１９３２年）、有力な叙情詩人を集めた「四季」（１

９３３年)、本能的世界を示した「歴程」(１９３５年)が創刊され、詩壇をにぎわした。

「四季」は、堀辰雄・三好達治・丸山薫を中心に、戦争へと向かう暗い時代の中、知性と感性の調和にもとづく叙情詩を掲げた。堀は、卓抜した編集感覚を紙面で示し、モダニズムから出発した三好は、『測量船』(１９３０年)で、短詩・散文詩に完璧な世界を見せた。三好はその後、独自の古典的叙情詩を書いた。丸山は、『帆・ランプ・鴎』(１９３２年)で、海への憧れを形象化した作品を書いた。

「四季」の代表的詩人として、立原道造[1]と津村信夫がいる。立原は、ソネット形式の十四行詩で、清純な魂の憧れと不安を歌った。詩集に、『萱草に寄す』・『暁と夕の詩』(１９３７年)がある。津村は、『愛する神の歌』(１９３５年)で、清新な詩風を示した。

「コギト」の詩人でもあった伊藤静雄は、『わがひとに与ふる哀歌』(１９３５年)で硬質な叙情詩を書き、萩原朔太郎から激賞された。『青い夜道』(１９２９年)・『山鴫』(１９３５年)の田中冬二は、自然や素朴な日常に寄せて自己の心象をうたった。其の他、田中克己・竹中郁・中原中也・竹村俊郎・坂本越郎・神保光太郎・蔵原伸二郎・朔太郎・室生犀星も同人であった。

「歴程」は、個性的な詩人たちのゆるやかな集まりの場

[1] (１９１４年～１９３９年)、東京都生まれ。詩人・建築家。

で、中心は、『第百階級』(１９２８年)・『蛙』(１９３８年)の草野新平であった。岡崎清一郎・尾形亀之助・高橋新吉・中原中也・菱山修三・土方定一・逸見猶吉が創刊に参加し、その後、山之口貘・吉田一穂・伊藤信吉らが加わった。物故した宮沢賢治や八木重吉の詩も誌上で紹介された。

早熟多感な中原中也[①]は、「四季」「歴程」などで詩作を続け、虚無と悲哀に満ちた作品を、『山羊の歌』(１９３４年)・『在りし日の歌』(１９３８年)に残し、立原道造とともに昭和を代表する詩人となった。

汚れつちまつた悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れつちまつた悲しみに
今日も風さへ吹きすぎる
汚れつちまつた悲しみに
たとへば狐の革裘
汚れつちまつた悲しみは
小雪のかかつてちぢこまる

——中原中也『山羊の歌』

◎ 戦中の詩

時代の激動の中、詩人たちは、戦争支持の「戦争詩」を書

---

① (１９０７年～１９３７年)、山口県うまれ。詩人。

くか、あるいは沈黙するかの選択を強いられた。戦時下の詩は、詩人が戦争をどう見ていたかを探(さぐ)る意味でも重要で、昭和十八年(１９４３年)に刊行された『辻(つじ)詩集』は、数ある戦争詩集の中でも最大規模で、モダニズムからプロレタリア系の詩人まで約二百余名が執筆している。そうした中で、疎開先(そかいさき)でひそかに反戦詩を書き続けた金子光晴(かねこみつはる)や、大阪で批評精神を持続した小野十三郎(おのとおざぶろう)など、抵抗の姿勢を失わなかった詩人もいた。

反戦詩人として有名な金子光晴（１８９５年～１９７５年）は、愛知県生まれ。世界を旅しながら、詩作を作った。中でも、『鮫(さめ)』(１９３７年)や戦後公表された『落下傘(らっかさん)』(１９４８年)で、戦争に傾斜(けいしゃ)する国家権力を象徴的技法で痛烈に批判した。大阪生まれの小野（１９０３年～ ）は、『大阪』(１９３９年)で、大阪周辺の重工業地帯とその前に広がる荒涼(こうりょう)とした芦原(あしわら)の風景を描くことで、戦争に従属する資本主義への抵抗を示した。

落下傘がひらく。

じゅつなげに、

旋花のやうに、しをれもつれて。

青天にひとり泛びただよふ

なんといふこの淋しさだ。

雹や

雷の
かたまる雲。
月や虹の映る天体を
ながれるパラソルの
なんといふたよりなさだ。
だが、どこへゆくのだ。
どこへゆきつくのだ。
おちこんでゆくこの速さは
なにごとだ。
なんのあやまちだ。……

——金子光晴『落下傘』

敗戦に先立つ、広島、長崎への原爆投下による惨状は、峠三吉や原民喜らによって記録されたが、ガリ版刷りの峠の『原爆詩集』(1951年)には、原爆への激しい怒りと悲しみが記されている。

◎ 戦後の詩

昭和二十年（1945年）八月の敗戦とともに、西脇順三郎・金子光晴・高橋新吉・村野四郎・草野新平らは、新たな詩の開拓に努め、その完成期を迎えることとなった。草野らは「歴程」を復刊して、会田綱雄・山本太郎・那珂太郎・宗左近らの新たな世代をも巻き込みながら、個性的な世界を展開した。また、中村真一郎・福永武彦・加藤周一

らは『マチネ・ポエティク詩集』(１９４８年)を刊行した。
しかし、戦後詩の出発にきわめて重要な足跡を残したのは、「荒地」（１９４７年）と「列島」（１９５２年）に属した詩人たちである。
「荒地」の鮎川信夫・北村太郎・木原孝一・黒田三郎・田村隆一・中桐雅夫・三好豊一郎らは、戦争体験を踏まえて現代の生と死を問い、荒廃した戦後の現実の中で人間性の回復を図ろうとした。田村の『四千の日と夜』(１９５６年)、黒田の『ひとりの女に』（１９５４年）などがある。ほかに石原吉郎、詩人の戦争責任を問うた吉本隆明らがいる。
「列島」の井手則雄・木島始・関根弘・長谷川龍生らは、プロレタリア詩を批判的に継承し、政治と芸術の前衛的な立場をさまざまな角度から検証しようとした。安東次男・黒田喜夫らの抵抗詩は、戦後詩に新領域を開拓することとなった。安東の『六月のみどりの夜は』（１９５０年)は、柔軟な発想と明晰な社会意識とを示した。
その後、「櫂」は昭和二十八年（１９５３年）に、川崎洋・茨木のり子によって創刊され、大岡信[1]・谷川俊太郎[2]・中江俊夫・吉野弘・岸田衿子・飯島耕一・友竹辰らの若い詩

---

[1] （１９３１年～　）、静岡県生まれ。詩論・評論も数多く、『抒情の批判』や『紀貫之』などがある。また１９７９年1月から始まった「折々のうた」(「朝日新聞」連載)はずるく繊細な短評の魅力で好評を博している。
[2] （１９３１年～　）、東京都生まれ。

人たちが参加した。さらに翌年には、堀川正美・三木卓・江森国友らの「氾」、大岡・飯島・清岡卓行・入沢康夫・多田智満子らの「今日」が、昭和三十年（１９５９年）には、大岡・飯島・清岡・吉岡実・岩田宏による「鰐」が創刊された。

谷川の『二十億光年の孤独』（１９５２年）は、その透明で硬質な叙情の世界が高く評価され、飯島の『他人の空』（１９５３年）、大岡の『記憶と現在』（１９５６年）も、戦後を代表する詩集となった。そのほか、中村稔・金時鐘・辻井喬・渋沢孝輔・高橋睦郎らが、この時期に詩作を始めている。

人類は小さな球の上で
眠り起きそして働き
ときどき火星に仲間を欲しがったりする

——谷川俊太郎『二十億光年の孤独』

二、短歌

明治中期、落合直文（１８６１年～１９０３年）による和歌革新運動は、鉄幹らの浪漫主義運動に引き継がれ、同時に正岡子規も写生を説いた。自然主義隆盛には石川啄木らが活躍したが、大正中期以降、子規の流れをくむアララ

ギ派が歌壇を制した。一方、プロレタリア短歌や反アララギ派も現われ、第二次大戦後、短歌批判・否定論も出たが、今なお広く創作・鑑賞されている。

◎ 明治の短歌革新

明治の中ごろまでになっても、歌壇は、桂園派を中心とする旧派によって占められ、歌人としては御歌所派の高崎正風の名が上げられる程度である。このような状況の中、落合直文は、明治二十六年（１８９３年）に浅香社を結成し、新時代の新しい精神を、新しい言葉と調べで表そうと、理論を実作に移そうとしたが、その歌風は、新旧両派の折衷といったものであり、近代的性格を有するとは言い難いものであった。しかしこの浅香社からは、後の歌壇を背負う与謝野鉄幹・金子薫園・尾上柴舟などの優れた歌人が育った。また明治三十一年（１８９８年）には、竹柏会の佐々木信綱が歌誌「心の花」を創刊し、新歌風の普及に努めたが、不徹底なものに終わった。その門下には、木下利玄・川田順などがいる。

◎ 明星派

与謝野鉄幹①は、歌論『亡国の音』（１８９４年）で旧派を激しく攻撃し、万葉調の＜ますらをぶり＞の歌を提唱し

---

① （１８７３年～１９３５年）、詩歌集『東西南北』・『天地玄黄』の雄壮な作風は虎剣調と呼ばれた。

た。明治三十二年（１８９９年）、新詩社をおこし、翌年「明星」を創刊して、その浪漫的な歌風で多くの文学愛好者の若者たちを引き付けた。中でも、鉄幹の妻となった与謝野晶子[①]の『みだれ髪』（１９０１年）は、大胆な恋愛賛美、奔放な官能解放によって、歌壇に旋風を巻き起こした。ここに浪漫主義短歌は全盛期を迎える。明星派からは、窪田空穂・吉井勇・木下杢太郎・北原白秋・石川啄木らが出た。

われ男の子意気の子つるぎの子詩の子恋の子ああもだえの子

——与謝野鉄幹

髪御五尺ときなば水にやはらかき少女ごころは秘めて放たじ

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

——与謝野晶子『みだれ髪』

◎ 根岸短歌会

愛媛県松山出身の正岡子規（１８６７年～１９０２年）は、俳句・短歌の革新運動、随筆・小説と病床にありながら精力的に活躍した。明治三十一年（１８９８年）、『歌よみに与ふる書』で、「貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候」として『古今集』を酷評し、『万葉集』

---

① （１８７８年～１９４２年）、多くの歌集のほか、『新訳源氏物語』など、古典の訳も多い。

を推賞した。また事物をありのままに写す「写生」を主張し、明星派の浪漫性に対抗した。根岸短歌会を開き、伊藤左千夫・長塚節らを育てた。後に左千夫は＜叫びの説＞を提唱して、「ほろびの光」五首（１９１２年）で頂点を極め、節は大作「鍼の如く」二百三十二首を残した。

◎ 自然主義傾向の短歌

明治四十年代になると、自然主義文学の影響を受けて、浪漫主義中心の歌壇に反発する動きが出てくる。彼らは、現実生活を凝視し、自己の真実をうたおうとした。みずみずしい感覚で近代人の悲哀を歌った若山牧水、日常の生活感情を平明に歌った前田夕暮がいる。また、生活派歌人と呼ばれる土岐哀果・石川啄木[①]は、ともに社会への関心が深く、歌を生活に接近させようとした。哀果の試みた歌の三行書きは、啄木にも影響を与えた。啄木は、貧困と病弱に苦しみながら、『一握の砂』（１９１０年）・『悲しき玩具』（１９１２年）において、その感傷性と現実性の両面を、散文的、直接的に歌い上げた。

◎ 耽美派

明星の廃刊後、その直系の雑誌「スバル」によった吉井勇や北原白秋・木下杢太郎らは、耽美的・享楽的な歌を詠ん

---

① （１８８６年～１９１２年）、岩手県出身。詩人・歌人・小説家。

だ。勇は『酒ほがひ』（１９１０年）で、青春の絶望的な激情や積極的な享楽を歌い、白秋は『桐の花』（１９１３年）で、近代的な感覚を印象派風に歌った。

◎ アララギ派と反アララギ派

子規没後、伊藤左千夫は歌誌「アララギ」（１９０８年）を創刊し、アララギ派の基礎を作った。その後、島木赤彦・斎藤茂吉[1]を中心に、この派は大正中期以後歌壇の主流となった。赤彦は子規の「写生」を発展させ、事象と心とが触れる中核を写生する事が大事で、そのため厳しい文学実践である「鍛煉道」を唱えた。茂吉は、「実相に観入して自然・自己一元の生を写す」ことを説き、対象と自我との一体化の生を詠もうと、第一歌集『赤光』（１９１３年）で、たくましい生命力と官能を、鋭い感覚で歌った。他にアララギ派の歌人として、中村憲吉・土屋文明・釈迢空・石原純らがあげられる。

大正十三年（１９２４年）、木下利玄・川田順・釈迢空らは、「日光」を創刊して、反アララギの立場を明確にした。「心の花」から出た木下は、口語的な発想や俗語を取り入れ、格の高い歌を詠んだ。また「明星」から出た窪田空穂は、アララギとは異なる立場で、しみじみとした味のある自然・人生詠ですぐれていた。

---

[1] （１８８２年～１９５３年）、山形県出身。

◎ 昭和の短歌

大正末から昭和にかけて、プロレタリア短歌が行われるようになり、口語自由律①の短歌とも結びついて、「アララギ」を中心とした既成歌壇が大きく揺さ振られる。この時期のアララギ歌人としては、茂吉のほかに土屋文明の存在が大きい。文明は歌才を日常生活に広げ、散文化傾向を強めていった。、昭和十年（１９３５年）、北原白秋は「多磨」を発刊し、浪漫精神の復興を図り、その門からは木俣修や宮柊二らが出た。一方、歌壇を離れて、会津八一が独自の歌風を示した。昭和七年（１９３２年）、プロレタリア歌人同盟は戦時体制下にあって解散し、幾重の思想統制のもと、歌壇も次第に愛国調を強めていった。

◎ 戦後の短歌

戦争が終わり、戦後の混迷の中、プロレタリア系の「人民短歌」が昭和二十一年（１９４６年）に創刊され、新時代の到来を告げた。また、首都圏の若手層が結集して新歌人集団が結成され、近藤芳美・宮柊二らは、昭和二十年代の歌壇の牽引者となった。木ご修・久保田正文は「八雲」（１９４６年）を創刊し、佐藤佐太郎・近藤芳美・宮柊二らが活躍した。

---

① 日常口語を用い、定型短歌の原則を積極的に破壊しようとすること。

一方桑原武夫[1]は、論文「第二芸術」（１９４６年）、「短歌の運命」（１９４７年）などを相次いで発表し、俳句・短歌などの短詩型文学を批判して、第二芸術論議を巻き起こした。昭和二十年代後半から三十年代になると、塚本国雄の第一歌集「水葬物語」（１９３１年）を皮切りに中城ふみ子・寺山修司・岡井隆らの前衛歌人が精力的に作品を発表し、短歌における自己主張の領域を拡大しようとした。昭和三十一年（１９５６年）には、青年歌人会議が結成され、多彩な個性の開花は、四十年代へと続いていく。四十年代の佐々木幸綱・清原日出夫らの若い世代は、柔軟な感性の広がりをもち、身体で捉えるという体性感覚で歌を詠んだ。その後五十年代にかけては、政治経済の安定のもと、歌は次第に内向化し、観念的な歌が多く見られるようになる。さらに昨今では女性歌人の作歌活動も盛んで、俵万智の『サラダ記念日』（１９８７年）は、旧来の短歌概念を打ち破った清新なイメージと現代感覚で、空前のベストセラーとなった。

三、俳句

俳句とは、俳諧の発句という意味で、江戸時代から用いられたが、一般用語とはいえず、正岡子規が発句のみを意味する語として使用して以来、広く用いられるようになっ

[1] （１９０４年～１９８８年）、福井県出身。仏文学者、評論家。

た。明治二十年代に子規によって俳句革新が始まり、写生[1]を重視したが、自由律俳句も現われた。大正初め、高浜虚子が復帰してホトトギス派が主流となった。昭和に入り、水原秋桜子が新傾向俳句を唱え、戦時中や戦後の批判にも耐え、再び広く日本国民に浸透していった。

◎ 正岡子規と俳句の革新

明治初期は、天保期以来のいわゆる月並(つきなみ)俳句[2]が行われていたが、それは、風流を小主観で解釈し、社会から遊離したものであった。そこで正岡子規は、明治二十五年（１８９２年)、新聞「日本」に『獺祭書屋俳話(さいしょおくはいわ)』を連載し、俳句革新に着手した。次いで旧派の偶像(ぐうぞう)であった芭蕉を批判し、蕪村の客観的絵画的表現に共感して、「写生」を唱えた。明治三十年（１８９７年）には、俳誌「ホトトギス」を刊行し、病苦の中で後進を指導した。その門には、内藤名雪(ないとうめいせつ)・夏目漱石・高浜虚子(たかはまきょし)・河東碧梧桐(かわひがしへきごとう)・荻原井泉水らがおり、「日本派」と呼ばれた。

柿(かき)くへば鐘が鳴るなり法隆寺(ほうりゅうじ)

——子規

糸瓜(へちま)咲て痰(たん)のつまりし仏か

——子規

---

① 事物を印象鮮明に客観的に描くこと。
② 何の個性もない、伝統にとらわれた、旧派の平凡な句を指す。

◎ 新傾向俳句

子規没後、碧梧桐は新聞「日本」の俳句欄選者を引継ぎ、虚子は「ホトトギス」を主宰し、それぞれの立場を主張した。虚子は、漱石の『吾輩は猫である』（１９０６年）に刺激されて小説に没頭し、一時俳句から離れた。一方碧梧桐は全国を行脚し、季題から離れて、実感を重んじた個性的な俳句を唱導する「新傾向」運動を推進した。碧梧桐を理論的に支えたのが大須賀乙字である。「新傾向」運動は自由律運動に展開し、中塚一碧楼・荻原井泉水らは、自由律・無季を主張した。井泉水の門から出た尾崎放哉・種田山頭火は、印象・象徴的な句を井泉水から受け継いだ。

◎ ホトトギス派と高浜虚子

子規と同じ松山出身の虚子（１８７４年～１９５９年）は、一時俳壇を離れた後、明治四十五年（１９１２年）、俳壇に復帰し、新傾向俳句に対抗して自ら「守旧派」と称し、十七字の有季定型を主張した。高浜虚子は大正時代前半には主観主義の立場をとったが、後半には「客観写生」を唱え、事物の微細な描写を主とする傾向に転じた。「守旧派」の有力作者に、渡辺水巴・村上鬼城・長谷川かな女・原石鼎・飯田蛇笏・前田普羅などがいた。昭和に入ると、虚子は「客観写生」を発展させた「花鳥諷詠」を主張し、その門から

は、四Ｓと呼ばれる水原秋桜子・山口誓子・阿波野青畝・高野素十をはじめ、日野草城・富安風声・川端茅舎・松本たかし・杉田久女・中村汀女・中村草田男らが輩出した。

遠山に日の当りたる枯野かな

___虚子

◎ 新興俳句運動

四Ｓのひとりである秋桜子は、虚子の説く「花鳥諷詠」に飽き足らず、「馬酔木」（１９２８年）を主宰し、昭和六年（１９３１年）に「ホトトギス」から離脱する。叙情の自由な解放を目指した秋桜子の論は明快で、「馬酔木」には加藤楸邨・石田波郷などの新人が台頭し、新興俳句運動の口火が切られた。さらに昭和十年（１９３５年）、山口誓子が「馬酔木」に加わると、新興俳句運動は急速な展開を見せた。一方吉岡禅寺洞主宰の「天の川」（１９１８年）、平畑静塔を中心とした「京大俳句」（１９３３年）、日野草城が創刊した「旗艦」（１９３５年）などに集まった新しい人々は、反「花鳥諷詠」の立場から、俳句近代化の実験を試みようとした。こうした中、無季俳句の容認をめぐって、有季派の秋桜子・誓子と、無季派の禅寺洞・草城らが激しく対立し、「馬酔木」は新興俳句運動から次第に離れていった。

その後、運動は急進化し、折りから国を挙げて戦時体制

を固めていく中、一部の作家はプロレタリア俳句運動と相通じ、軍の意図を直接的に批判するに至った。その結果、昭和十五年（１９４０年）、「京大俳句」関係の作家が検挙される、いわゆる「京大俳句事件[①]」が起こる。この弾圧によって、新興俳句運動は挫折を余儀なくされた。

学問のさびしきに堪へ炭をつぐ

——誓子

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

——桜秋子

◎ 人間探求派

新興俳句運動の隆盛期より遅れて、「ホトトギス」と新興俳句の中間的な存在として、中村草田男・加藤楸邨・石田波郷らが登場する。彼らは「ホトトギス」に対してはその低回趣味を非難し、新興俳句に対してはその素材主義やモダニズムの軽薄な傾向を批判した。俳句によって人間性を表現し、作者の内面の欲求を深く探求しようとした彼らは、「人間探求派」と呼ばれ、戦後においても、引き続き活躍を続けた。

◎ 戦後の俳壇

終戦後、俳壇の復興は速やかで、つぎつぎに俳句雑誌が

① 西東三鬼らの『京大俳句』のグループが共産党活動の疑いを受け、昭和１９４０年〜１９４１年に多くの青年が検挙された。

復刊、または創刊された。昭和二十一年（１９４６年）、桑原武夫が発表した「第二芸術―現代俳句について」①は、俳壇に大きな刺激を与え、深い反省と緊張を生むと同時に、再出発の起点となった。昭和二十三年（１９４８年）には、誓子によって「天狼」が創刊され、「根源俳句」②を主張する実作追求が始まった。次いで、昭和二十五年（１９５０年）に勃発した朝鮮戦争を背景に、既成の傾向に飽き足らない新人たちの間で、開かれた個―社会化された私―をいかに表現すべきかを課題として、＜社会性論議＞③が巻き起こった。一方、金子兜太らを中心に、「前衛俳句」の④気運も高まり、その実験的作品は、形態の奇抜さにおいて耳目を引いた。

昭和三十六年（１９６１年）になると、草田男・波郷らは、＜現代俳句協会＞（１９３７年結成）を脱退し、＜俳人協会＞を設立するが、これによって俳壇は二分され、＜現代俳句協会＞には、無季容認の前衛的傾向の人々が集まり、＜俳人協会＞には、有季定型を俳句の必須条件とする

---

① 桑原武夫は、俳句という形式が近代の思想・感情・現実を盛るにはふさわしくないもので、もし芸術というなら「第二芸術」というべきであろうと論じ、さらに俳壇の閉鎖性・封建性を衝いた。

② 山口誓子は、「酷烈なる俳句精神」を説き、対象を極限において把握し、生命の根源に迫ることを主張した。

③ 雑誌「俳句」誌上で、山本健吉・金子兜らが社会性俳句について意見をたたかわせたこと。

④ １９５９年ごろ金子兜らを中心に唱えられたもので、季語を排し造形が試みられた。

俳人が集まった。現在、戦後五十年以上を経て、俳句は成熟期を迎え、俳句ブームといわれるほど実作者の数は増大しているが、量的な隆盛が必ずしも質的な向上に結びついているとはいいがたい面もある。

第三節　近代の小説と評論

一、啓蒙期の文学

◎　戯作(げさく)文学終焉(しゅうえん)

明治に入っても、初期の文学の中心は依然(いぜん)、近世以来の戯作①であった。戯作者として、明治初期の戯作復興に多大な貢献をした仮名垣魯文(かながきろぶん)は『西洋道中膝栗毛(せいようどうちゅうひざくりげ)』（１８７０年～１８７６年）や『安愚楽鍋(あぐらなべ)』（１８７１年～１８７２年）で開花風俗を巧みにとらえ、パロデイの才能も発揮して人気を博したが、その手法は旧態依然のものであった。一方、時流(じりゅう)に便乗(びんじょう)した魯文とは異なり、成島柳北(なりしまりゅうほく)は『柳橋新誌(りゅうきょうしんし)』（１８７４年）によって反近代主義の姿勢を取り、文明開化への風刺を展開した。しかし、これらの主な読者であった旧武士の崩壊により、戯作は徐々に顧(かえり)みられなくなった。

---

① 戯れに作った作品という意で、洒落本や人情本など、近世後期からの娯楽的な通俗小説類を指す。

◎ 近代の啓蒙思想

明治維新以降、欧米の思想を普及させ、人々の意識を高める啓蒙活動を行ったのが、明六社(めいろくしゃ)[1]の一員である福沢諭吉(ふくざわゆきち)[2]であった。諭吉は『学問ノススメ』(1872年～1876年)で、功利主義の立場から独立自尊と実学の必要性を説いた。その他の主な啓蒙思想家に『西国立志編(さいこくりっしへん)』(1870年)の中村正直(まさなお)や、『日本開花小史』(1877年～1882年)の田口卯吉(たぐちうきち)らがいる。

◎ 翻訳小説と政治小説

啓蒙思想と文明開化による未知の世界への関心によって、明治十年代には翻訳物が盛んに出版され、近代文学にも影響を及ぼした。丹羽純一郎(にわじゅんいちろう)の『花柳春話(かりゅうしゅんわ)』(1878年～1879年)はその代表である。その後自由民権運動の高まりとともに、政治に関する翻訳も多く行われた結果、翻訳小説は後の政治小説の源流となった。一方、自由民権運動の宣伝手段として書かれたものが政治小説で、主なものに、矢野龍渓(やのりゅうけい)の『経国美談(けいこくびだん)』(1883年～1884年)、

---

[1] 明治六年(1873年)、アメリカから帰国した森有礼の呼びかけで結成された学術団体。機関誌『明六雑誌』も刊行。1875年解散。日本の文明開化への貢献が大きい。

[2] (1834年～1901年)、啓蒙思想家。大阪の生まれ。幼年塾に学び、江戸に出て私塾(慶応義塾)を開設。西洋文明の導入と人間平等を主張。

東海散士の『佳人之奇遇』（１８８５年～１８９７年）、末広鉄腸の『雪中梅』（１８８６年）などがあった。政治への理想を真剣に描いた政治小説は、当時の若い知識人の文学への関心を拡大させたが、その文学性の低さから、やがて衰退の道をたどった。

二、写実主義

日本の本当の意味においての近代文学のスタートは明治二十年代ごろからである。これを言うには、まず、写実主義、またその提唱者の坪内逍遥と理論を明確にし、具体化した二葉亭四迷をあげなければならない。

◎ 坪内逍遥と『小説神髄』

坪内逍遥（１８５９年～１９３５年）は、文学の理論書として『小説神髄』（１８８５年～１８８６年）を書き、小説は芸術であり、文学の中で優位を占めるものであるという位置づけを行った。さらに、小説は人情や世態を写すとの写実主義を唱え、近世の勧善懲悪から脱して人間の心理を描くことの重要性を説いた。その実践として『当世書生気質』（１８８５年～１８８６年）を書いたが、この小説は理論とは異なり、勧善懲悪的に展開し、前近代的な通俗的リアリズムから抜け出せずに終わった。また逍

遥の理論には、政治小説が内包していた小説の思想性までを否定してしまう欠点や、写実の本質を十分に把握していないなど未熟な点も見られる。逍遥は『細君(さいくん)』を最後に小説の筆を折り、その後は「早稲田文学」を創刊したほか、演劇改良や教育にも力を注いだ。

> 小説の首脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ。人情とはいかなるものをいふや。
> 曰(いわ)く、人情とは人間の情欲にて、所謂(いわゆる)百八煩悩是(こ)れなり。
>
> ――坪内逍遥『小説神髄』

◎ 二葉亭四迷と『浮雲』

二葉亭四迷(ふたばていしめい)は、東京都の生まれで、本名長谷川辰之助という。若い頃、ロシアの軟化政策に反対するため、東京外国語大学に入学したが、逆にロシア文学に関心を深める。坪内逍遥の影響を受けた四迷(１８６４年～１９０９年)は、逍遥の理論を一歩進め、『小説総論(しょうせつそうろん)』(１８８６年)によって模写(もしゃ)の必要性を提唱した。そして、そのためには勧善懲悪小説を排して、写実主義(リアリズム)を重んじなければならないと説き、その実践として小説『浮雲(うきぐも)』(１８８７年～１８８９年)を書いた。『浮雲』は未完に終わったが、言文一致(げんぶんいっち)の文体や、独立した自我を通して人間性の追究を試みている点、さらには、文明開化の日本を象徴する典型的な人物を配して当時の社会の様相をとらえようとした

点などから、近代文学の出発点ともいえる作品となっている。

「少しお噺し……お……」

「今用が有ります。」

邪けんに袂を振払ツて、ついと部屋を出仕舞ツた。

其跡を眺めて文三は呆れた顔……「此期を外しては……」と心附いて起ち上りてはみたが、正可跡を慕ツて往かれもせず、萎れて二階へ狐鼠狐鼠と帰ツた。

「失敗ツた、」と口へ出して後悔して後れ馳せに赤面。「今にお袋が帰ツて来る『慈母さん此此の次第……』失敗ツた、失策ツた。」

——二葉亭四迷『浮雲』

彼はまた、洗練された言文一致の文体でツルゲーネフを初めとするロシアの文学を翻訳し、国木田独歩や多くの文学者に影響を与えた。中でも『あひびき』(１８８８年)・『めぐりあひ』（１８８８年〜１８８９年）が有名である。

三、擬古典主義

◎ 紅露時代

明治十八年（１８８５年）、東大在学中の尾崎紅葉（１８６７年〜１９０３年）と竹馬の友山田美妙①らは、日本で最

① （１８６８年〜１９１０年)、文学改良家として、小説・詩・評論の各方面で活躍。不幸な事件や病気で悲惨な晩年を送った。

初の文学結社である硯友社を結成し、同人雑誌「我楽多文庫」を創刊した。当初の硯友社は遊戯的要素の強いものであったが、のちには外国文学や写実主義の影響も受けて文学的姿勢を高め、和洋折衷のロマンチシズムを主潮とするものになった。『武蔵野』（１８８７年）により四迷とともに言文一致[1]の先駆をなした美妙が退社した後、苦境に立たされた硯友社を率いたのは紅葉であった。紅葉は『二人比丘尼色懺悔』（１８８９年）が出世作となり、その後も『金色夜叉』（１８９７年～１９０２年）などの擬古典主義の代表的作品を次々と発表した。紅葉は、西鶴のリアリズムと逍遥の理論とに学び、文章の近代化を図ったが、結局は通俗的な写実からは脱却できずに終わった。一方硯友社は、他の社員たちの活躍や、ジャーナリズムとの連携から、文壇の一大勢力へと発展したが、紅葉の死後はその結社性を薄めていった。

可いか、宮さん、一月の十七日だ。来年の今月今夜になったならば、僕の涙で必ず月は曇らせて見せるから、月が……曇ったらば、宮さん、貫一は何処でお前を恨んで、今夜のように泣いていると思ってくれ。

——『金色夜叉』

---

[1] 中世以降、書き言葉と話し言葉が別れてしまい、口語は文章語とはならず、明治維新後、口語で文章を書こうとする運動が起こった。四迷は「～だ調」、山田美妙は「～です調」、尾崎紅葉は「～である調」を使った。最終的には自然主義文学によって確立された。

逍遥・四迷・鴎外らが小説の筆を絶(た)っていた時期に、『風流仏(ふうりゅうぶつ)』(１８８９年)や『五重塔(ごじゅうのとう)』(１８９１年〜１８９２年)など、雅俗(がぞく)折衷体[1]の作品で紅葉と人気を二分したのが幸田露伴(こうだろはん)である。露伴(１８６７年〜１９４７年)は、独学で電信技手(ぎしゅ)から作家に転じ、和漢の素養をもとにして、漢文脈系の雅俗折衷体を駆使した作風で、西洋化に批判的な知識人の共感をえた。彼は仏教を中心とした東洋思想の影響を受け、理想主義的な作風の中にも浪漫的な心情を示した。文学史上、紅葉と露伴が活躍した時代を「紅露時代」という。

> 一ツの仕事を二人でするはよしや十兵衛心になっても副になっても厭なりゃ何してもできませぬ、親方一人で御建なされ、わたしは馬鹿でおわりまする。
>
> ——『五重塔』

四、浪漫主義

浪漫主義は古典主義と啓蒙主義への反動として、十八世紀末から十九世紀前半にかけてヨーロッパで生じた主情的・主我的な芸術や思想の潮流である。日本では、半封建的社会からの「自我」の確立と解放を求め、西洋文明の刺

[1] 王朝風の雅やかな文体と現代風の俗語体をとりまぜた文体。

激のもとに、一群の青年作者が従来の文学と異なる世界を目指し、明治浪漫主義文学を開花させた。

◎ 初期の鴎外

ドイツ留学から帰国した森鴎外は、明治二十二年（１８８９年）、新声社を結成し、文芸評論誌「しがらみ草紙」を創刊した。そして、ハルトマン美学①の影響を受けた浪漫主義の立場から、評論を中心に戦闘的な啓蒙活動を展開した。特に逍遥の「早稲田文学」誌上での＜帰納的批判＞＜没理想＞の重視という主張に対して、鴎外が＜演繹的批判＞＜理想と美＞重視の立場から反論した＜没理想論争②＞（１８９１年～９２年）は、実りのないまま終了したが、文壇への刺激は大きかった。一方鴎外は、『舞姫』（１８９０年）・『うたかたの記』（１８９０年）・『文づかひ』（１８９１年）のドイツ三部作を発表するとともに、アンデルセンの『即興詩人』（１８９２年～１９０１年）の翻訳にも着手した。中でも、愛を捨て立身出世の道を選ぶ青年の苦悩

---

① ドイツの詩人ハルトマン（１８４２年～１９０６年）の哲学で、厭世的で観念論的な思想。

② 坪内逍遥が、シェークスピアの評注をするにあたり、主観的批判を避け、「記実」を専一にしたいと述べ、それはシェークスピアが大自然と同じように、あらゆる理想を内部に含み、表面にはそれを示さぬ「没理想」だから、と説いた。これに対して、鴎外は、ハルトマンの美学を援用して文学というものは、むしろ理想を具象化するものであるから、理想を没してはならないと批判し、ここにいわゆる没理想論争が始まったのである。両者の立場の根本的相違や「理想」という言葉の概念が一致していなかったため、論が実りのないまま終了した。

を雅文体で描いた『舞姫』は、近代的自我の問題を叙情的に取り上げることにより、浪漫主義を待望していた人々を魅了した名作である。

◎ 北村透谷と「文学界」

明治二十六年（１８９３年）、北村透谷（１８６８年～１８９４年）は島崎藤村や戸川秋骨らとともに雑誌「文学界」[1]を創刊し、自我の解放を目指した浪漫主義文学運動を展開した。自由民権運動に身を投じた後、文学活動に転向した透谷はキリスト教を通じて平和主義を唱え、『厭世詩家と女性』（１８９２年）などの優れた評論を発表した。また、恋愛至上主義的立場から硯友社らの文学に批判を加えるとともに、文学を功利主義的なものと考える山路愛山との間で＜人生相渉論争＞を行った。しかし最後には思想面での懊悩から、自ら死を撰ぶ結果となった。

◎ 樋口一葉

樋口一葉（１８７２年～１８９６年）は、日本で最初の女流職業作家である。中島歌子に和歌を学んだが、父・兄の死で、家計が苦しくなり、母と妹の三人の生活を支えるため、文学を生活の糧と考えた。そして、二十四歳の若さでなくなるまでの短い創作活動の期間中に出世作となった

---

[1] 浪漫主義運動を展開した文芸雑誌。初期には透谷の評論、中期には一葉の小説、後期には藤村の詩などが掲載された。

『うもれ木』（１８９２年）をはじめ、『大つごもり』（１８９４年）・『にごりえ』（１８９５年）・『たけくらべ』（１８９５年～１８９６年）などの名作を残した。これら一連の作品で、一葉は優雅な擬古文体を用いながら、明治社会の下層で苦悩する女性たちの悲劇を的確に描き出した。また、明治二十年（１８８７年）から始まり、二十九年（１８９６年）の死の直前で中断した『一葉日記』も、その文学性に加えて、明治の女性の生活記録として高く評価される。

竜華寺の信如が我が宗の修行の庭に立出る風説(うわさ)をも、美利登は絶えて聞かざりき。有(あり)し意地をば其(その)まゝに封じ込めて、此処(ここ)しばらくの怪しの現象(さま)に我れを我れとも思はれず、唯何事も恥かしうのみ有けるに、或る霜の朝、水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり。誰れの仕業(しわざ)と知るよし無けれど、美利登はなにゆえとなく懐かしき思ひにて、違い棚の一輪ざしに入れて、淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに伝へ聞く、其明けの日は、信如が何がしの学林に袖のいろかへぬべき当日なりしとぞ。

＿＿＿樋口一葉『たけくらべ』

◎ 泉鏡花の浪漫主義

泉鏡花(いずみきょうか)①は観念小説によって人気作家となったが、やが

① （１８７３年～１９３９年）、幼くして美しい母を失い、一生母性思慕は続いた。後、紅葉に師事し、『外科室』などの観念小説で作家の地位を確立。自然主義の台頭にもその芸術観は動揺することなく、ほかにも『白鷺』や、『日本橋』・『眉かくしの霊』などの浪漫的・耽美的作品を発表し続けた。

て作風を浪漫的なものへと転じてゆく。そして、言語感覚が豊富で緩急自在の律動をもつ泉鏡花固有の美文体を完成させた。伝奇的ロマンチシズムにあふれた『高野聖』（１９００年）をはじめ、『婦系図』（１９０７年）、『歌行燈』（１９１０年）などの傑作を次々に発表した鏡花は、自己の美意識による独自の文学世界を構築することに成功する。さらに、鏡花には新派劇となった作品も多く、幽界の幻想美を描いた『天守物語』（１９１７年）などの戯曲もある。

> 川からの帰り道、洞穴から鳥ほどの大きさもある蝙蝠が女に飛びついた。しかし、女は慌てることなく、「あれ、不可よお客様があるじゃないかね」と言う。
>
> ——『高野聖』

◎ 国木田独歩

民友社出身の国木田独歩（１８７１年〜１９０８年）は、はじめ日清戦争で従軍記者として名を馳せた後、さらには詩人として文名を得た。自然の美と人情の交流の真理を主題とした『武蔵野』（１９０１年）などの小説を発表した。独歩の作品は社会的小者への共感を浪漫的に描いたものが多いが、その後、写実主義を意識的に取り入れて、自然主義文学の先駆的な存在となった。

五、悲惨小説・観念小説と社会小説

日清戦争後の資本主義発展期にあって、社会の矛盾や人々の悲惨な生活を描いた作家に、『変目伝』（１８９５年）の広津柳浪、『亀甲鶴』（１８９６年）の小栗風葉、『書記官』（１８９５年）の川上眉山、『夜行巡査』（１８９５年）の泉鏡花らがいた。柳浪や風葉らの小説は、人生や社会の暗面をことさらに強調したために、悲惨小説または深刻小説と呼ばれた。一方、眉山や鏡花らの小説は、作者の観念が作品の中に露骨に表れていることから、観念小説とも呼ばれた。

民友社による「社会小説出版予言」が契機となり、社会矛盾の激化を問題視する新しい小説の論議が活発となった。その結果として、内田魯庵の『くれの廿八日』（１８９８年）や、徳富蘆花の『不如帰』（１８９８年～１８９９年）・『黒潮』（１９０２年）など、社会小説と呼ばれる作品が生まれた。また、社会主義思想を作品に移入した木下尚江の『火の柱』（１９０４年）・『良人の自白』（１９０４年～１９０６年）などは、社会主義小説とも呼ばれた。

ああつらい！つらい！もう＿＿もう婦人なんぞに＿＿生れはしませんよ。＿＿あああ！

＿＿『ほととぎす』

六、近代評論の確立

小説が多様な可能性を見出しつつある時、文芸評論もまた確立の時を迎えていた。この時期に活躍をした主な評論家は、石橋忍月（いしばしにんげつ）・内田魯庵（うちだろあん）・田岡嶺雲（たおかれいうん）・高山樗牛（ちょぎゅう）らであった。忍月は、四迷の『浮雲』に対する批評や、鴎外との『舞姫』をめぐる＜舞姫論争＞、『うたかたの記』をめぐる＜幽玄論争＞など、活発な活動を行った。魯庵は、軽妙な風刺で硯友社文学を批判し、文学の前近代性を排した。嶺雲は一葉を高く評価し、さらに、悲惨小説や観念小説の理論的な方向づけも行った。樗牛は、国家主義を肯定した日本主義を提唱するとともに、『平家物語』に題材を求めた小説『滝口入道（たきぐちにゅうどう）』（１８９４年）を発表し、好評を博した。

七、自然主義

◎ 自然主義

自然主義とは、十九世紀後半のフランスを中心に、エミール・ゾラ[1]らによって提唱された文学運動であり、自然

---

① （１８４０年～１９０２年）。フランスの自然主義作家。ゾラによって興された、人間や社会の現実を遺伝と環境を中心に科学的に追求し、客観的に描写することで当時のフランス社会に内蔵する暗黒面を暴き出そうとする文学運動がゾライズムとよばれる。

科学的方法と実証主義とを重視し、現実をありのままに描こうとした文学（ゾライズム）であった。その影響を受けた前期自然主義とも呼ばれる作家が、『はつ姿』（１９００年）の小杉天外（１８６５年〜１９５３年）と、『地獄の花』（１９０２年）の永井荷風らであった。その後、ゾラの思想を発展させたものが、日本における自然主義（後期自然主義）となった。その大きな特徴は、ゾラの写実的観察態度と、自我の解放を目指した浪漫主義とが一体化するという、日本独自の発展を遂げた点にあった。そのため、日本の自然主義は自己告白が主流となり、社会的な広がりを持つことができずに人生を諦観してしまうという限界を、はじめから内包していたといえる。その結果、日本の自然主義は、やがては私小説①や心境小説②への道を歩むこととなる。

◎ 島崎藤村

藤村（１８７２年〜１９４３年）は、本名春樹で、長野県の生まれ。生家の没落で上京する。キリスト教の影響や戸川秋骨らとの交友から文学を志し、１８９３年、「文学界」の創刊に参加し、さらに『若菜集』などにより詩人としての文名を得た。その後小説『破戒』（１９０６年）を発

---

① 私小説の一種で、作者の心情をより深く描き出したもの。
② 作者の身辺の出来事や心情を一人称で語る小説形式。自然主義の自己告白小説から始まり、日本近代文学独特のものとされる。

表し、自然主義の代表的な作家となった。『破戒』は、被差別部落出身の青年教師瀬川丑松が、差別と戦う先輩猪子蓮太郎の影響や自身の良心の呵責から、最後には「素性を隠せ」という父の戒めを破るまでの苦悩を描いた作品である。この作品は、差別という社会問題を取り上げるとともに、自我解放の欲求という心理的要素も加えて、近代的リアリズムに満ちた自然主義文学の出発点にふさわしい小説となっている。しかし、当時の読者は丑松の自我の苦悩のみに目を向け、『破戒』のもつ社会小説としての可能性には、正当な評価を与えなかった。『破戒』の成功後、藤村は「文学界」同人との交友を描いた自伝的作品『春』（１９０８年）を発表し、私小説的作風を見せた。続いて、二つの旧家の没落の様相を、解決を与えることなく正面から描いた『家』（１９１０年～１９１１年）を発表し、自然主義的リアリズムという藤村の作風を確立させた。このほかに、姪との過ちを赤裸々に描いた『新生』、父をモデルに幕末から維新の激動の時代を描いた『夜明け前』、詩人から小説家に転じる契機となったとされる『千曲川のスケッチ』なども有名である。

蓮花寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に転宿を思ひ立つて、借りることにした部屋といふのは、其蔵裏つゞきにある二階の角のところ。寺は信州下水内郡飯山町二十何ヶ寺の一つ、真宗

に付属する古刹で、丁度其二階の窓によりかかって眺めると、銀杏の大木を経てて飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前に見るやうな小都会、奇異な北国風の屋造、板葺の屋根、または冬期の雪除として使用する特別の軒庇から、所々に高く顕れた寺院と樹木の梢まで一すべて古めかしい町の光景が香の中に包まれて見える。ただ一際目立って此窓から望まれるものと言へば、現に丑松が奉職して居る其小学校の白く塗った建築物であった。

——島村藤村『破戒』

◎ 田山花袋

漢学を学び、また私塾で英語を学んで、詩人として出発した田山花袋（１８７１年～１９３０年）は、その後感傷味の強い小説を書き、ゾラなどヨーロッパ自然主義作家の影響を受け自然主義の作風に転じた。花袋は、女弟子への性的執着を告白した『蒲団』（１９０７年）によって、藤村と並ぶ自然主義の代表的作家となった。主観を加えず客観の内部にも立ち入らず、ただありのままに現象を描くという「平面描写」[①]の手法で自然主義を定着させた花袋は、『生』（１９０８年）・『妻』（１９０８年～１９０９年）・『縁』（１９１０年）．の三部作を完成させる。また、記録をもとに調査を加え、才能を持ちながらも貧困のために挫折してゆく

① 対象の内部に立ち入らず、作者はただ見たまま触れたままの現象を描くという小説創作の方法。

青年の姿を描いた『田舎教師』(1909年)は、きわめて文学的価値の高い作品とされている。

> 夜着の襟のびろうどの際立って汚れて居るのに顔を押し付けて心のゆくばかりなつかしい女の匂いを嗅いだ。
>
> ——『蒲団』

◎ 徳田秋声

徳田秋声(1871年~1943年)は、硯友社の同人であった。初め紅葉の門下生として深刻小説風の作品を発表していたが、結婚や師紅葉の死を契機に、自然主義に転じてその代表的な作家となった。秋声は、徹底した客観主義の作風で、自然主義の理念にもっとも忠実な作家の一人であった。主な作品に、男女の愛を描いた『新世帯』(1908年)をはじめ、『足跡』(1910年)・『黴』(1911年)・『爛』(1913年)・『あらくれ』(1915年)などがある。

◎ その他の自然主義作家

その他の自然主義作家には、正宗白鳥[1]・岩野泡鳴[2]・近松秋江・間山青果らがいた。白鳥の、知識青年の倦怠を

---

[1] (1879年~1962年)、小説のほか、戯曲・評論もある。
[2] (1873年~1920年)、『放浪』・『断橋』・『発展』・『毒薬を飲む女』・『憑き物』の泡鳴の五部作がある。

描いた『何処へ』（１９０８年）などには、虚無的で厭世的な思想が見られ、他の自然主義作家とは異なる特徴を見せている。泡鳴は詩人として出発した後、自然主義の影響から小説に転じ、『耽溺』（１９０９年）により小説家の地位を確立した。そして、作者の主観が入った人物の目を通して人生を描写するという＜一元描写[①]論＞を提唱した。青果は、農民の悲惨な姿を描いた農村小説『南小泉村』（１９０７年～１９０９年）で注目を浴びたが、原稿二重売り事件などで小説を去り、その後は演劇会で活躍した。秋江は、『別れたる妻に送る手紙』（１９１０年）によって文名を得た。客観性と本能の告白という秋江の作風（痴情文学とも呼ばれる）は、日本の自然主義の持つ特性をすべて兼ね備えたものであった。

◎ 自然主義の評論

自然主義を擁立する立場の評論家には、長谷川天渓（１８７６年～１９４０年）や島村抱月（１８７１年～１９１８年）がおり、いずれも「早稲田文学」に関係していたため「早稲田派」とも呼ばれている。天渓は、花袋が説いた「技巧否定・事実尊重」にも通じる、修飾も技巧も用いずに事実を具体化する「無飾芸術」の必要性を唱え、さらに、幻滅の悲哀や現実暴露の苦痛を代表するものが自然主義で

---

① 平面描写に対して、作品中の人物の主観視点を一つ定め、そこから対象を描くという岩野泡鳴の主張した小説の方法。

あり、近代文芸の生命であると論じた。抱月は、自然主義はロマンチシズムを通過したものでなくてはならないとした上で、美的価値を第一義としながら自然主義の構成論を展開するなど、自然主義の理論付けを行った。

八、漱石と鴎外

明治末から大正中期ごろまで、自然主義文学が、狭隘な私小説の傾向へ傾斜していく中で、はじめから彼らとは異なる立場にあって、理知を主体とした夏目漱石と森鴎外の二人の巨大な存在があった。

◎ 夏目漱石

夏目漱石（１８６７年～１９１６年）は、小説家・思想家・文明批評家である。東京都に生まれたかれは、他家の養子としての不遇の幼年時代を過ごす。東大卒業後、東京・松山・熊本で教鞭を執る。１８９７年、ロンドン国費留学するが神経衰弱となって帰国。帰国後、漱石は高浜虚子らとの交友から、写生文[1]の実践として、『吾輩は猫である』（１９０５年～１９０６年）を、子規の雑誌「ホトトギス」に連載した。作者の心情を「猫」の目に託して社会を風刺したこの小説は、予想外の好評を得た。さらに、漱石は『坊

---

① 正岡子規が「叙事文」として提唱し、虚子らが受け継いだ、対象をありのままに写し取るを主眼とした写生論の影響を受けた文章。

っちゃん』（１９０６年）や『草枕』（１９０６年）などの作品を次々に発表し、その多彩な才能を世間に示した。そして翌年には、教職を辞して、朝日新聞に入社し、最初の新聞小説『虞美人草』（１９０７年）の連載を開始して職業作家の位置を確保した。また漱石は、自然主義の余裕のなさを批判し、「低徊趣味」を説いたため、余裕派①（あるいは高踏派）と呼ばれた。しかし、漱石の内面は厭世的な暗鬱に満ちており、作品を通じて常に近代文明を批判し続けた。その後漱石は、前期三部作といわれる『三四郎』（１９０８年）・『それから』（１９０９年）・『門』（１９１０年）を発表した。『三四郎』は、地方青年が東京での生活で重ねる苦悩と失意とを描き、鷗外の『青年』と並ぶ青春小説となっている。次作の『それから』では、＜高等遊民②＞永井代助を主人公とし、友人に嫁したかつての恋人三千代との不倫の末、世間に捨てられてまでもその愛を貫こうとする決意を描いている。なお、前期三部作に代表される漱石の作品は、虚構の設定の中に作中人物を置くなど、物語の展開上でも自然主義との明確な相違が見える。修善寺の大患で一命をとりとめた漱石は、『彼岸過迄』（１９１２年）・『行人』（１９１２年～１９１３年）・『こころ』（１９１４年）から

---

① 自然主義の小説を、「余裕のない小説」と論じた、虚子の小説集『鶏頭』への漱石の序文から、長谷川天渓によって漱石ら反自然主義派に対してつけられた名称。この序文で、俗世間を離れて余裕のある態度で事物を眺める低徊趣味もといている。

② 学歴はありながらも一定の職にも就かずに暮らしている日と。

なる後期三部作を発表した。特に、自我の充足のために生じる罪の悲劇を、最後には明治の精神に殉死（じゅんし）する形で描いた『こころ』は、特に優れた作品とされている。その後も、自伝的作品『道草（みちくさ）』（１９１５年）や、夫婦間の葛藤を描きながらも病没のため未完に終わった『明暗（めいあん）』（１９１６年）などで、漱石は最後まで近代人のエゴイズムを追究し続けた。なお、漱石の最晩年の思想的境地を表すことばに、自我の超越を示す＜則天去私（そくてんきょし）①＞があった。

「然（しか）し是（これ）からは日本も段々発展するでせう」と弁護した。すると、かの男は、すました者で、「亡（ほろ）びるね」と云った。（中略）男は例の如くにやにや笑っている。其（その）癖言葉つきはどこ迄（まで）も落ち着いている。どうも見当が付かないから、相手になるのを已（や）めて黙って仕舞った。すると男が、かう言った。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」で一寸（ちょっと）切ったが、三四郎の顔を見ると耳を傾けている。

「日本より頭の中の方が広いでせう」と言った。「囚われちゃだめだ。いくら日本の為を思ったって贔屓（ひいき）の引倒しになる許（ばかり）だ」

此言葉を聞いた時、三四郎は真実に熊本を出た様な心持がした。

——夏目漱石『三四郎』

---

① 「天意に従い、我執を捨て去る」の意。近代人のエゴイズムを追究し続けた結果たどり着いた、漱石が理想とする無我の境地を表している。

◎ 森鴎外

明治二十年代以後久(ひさ)しく小説から遠(とお)ざかっていた森鴎外は、軍医の最高位に昇進した翌年の明治四十二年（１９０９年）、「スバル」の創刊とともに小説の執筆を再開し、『キタ・セクスアリス』（１９０９年）や『青年』（１９１０年〜１９１１年）などの作品を意欲的に発表した。発売禁止処分を受けた『キタ・セクスアリス』は、自然主義の性欲尊重の姿勢への批判から意図的に自身の性欲史を綴ったものであり、『青年』は漱石の『三四郎』を意識して書かれた教養小説であった。また、高利貸(こうりがし)の愛人お玉の、自我のめざめとともに生じた大学生岡田への愛を、叙情的に描いた『雁(がん)』（１９１１年〜１９１３年）は、鴎外の本来の創作の手腕(てうで)を発揮した傑作である。

自由な立場の作家と、制約を受ける立場の軍人との分裂的生き方を余儀なくされた鴎外の内面は、「レジグナチオン[1]」といった諦観(ていかん)や、「かのように哲学」[2]といった、相対主義的思想に満ちていた。さらに、明治天皇と乃木(のぎ)将軍の殉死とで受けた衝撃が契機となり、殉死をテーマとした『阿部一族(あべいちぞく)』（１９１３年）などの作品を発表するとともに、鴎外は歴史小説へその作風を転じた。その後も、『山椒大夫(さんしょうだゆう)』（１

---

[1] 『予が立場』の中で述べられている、「あきらめ・断念」といった意味のドイツ語。

[2] 『かのように』の中で述べられている。実在しないものを実在するかのように想定する考え方。

915年)・『高瀬舟』(1916年)などの歴史小説を発表した。また、鴎外は「歴史其儘」と「歴史離れ」[1]とが共存する歴史小説の創作理念を明らかにしていたが、晩年には、より「歴史其儘」志向を強め、客観的事実のみを集める史伝小説の世界へ傾倒した。その代表作が『渋江抽斎』(1916年)であるが、この作品は、資料や調査の積み重ねによって、作者の主観を交えることなく人物を再現し、それを端正な記述で表したものである。

……僕の目は坂の中程に立って、こちらを見ている女の姿を認めて、僕の心は一種異様な激動を感じた。僕は池の北の端から引き返す途すがら、交番の巡査の事を思ふよりは、此女の事を思っていた。なぜだか知らぬが、僕には此女が岡田を待ち受けていさうに思はれたのである。果して僕の想像は僕を欺かなかった。女は自分の家よりは二三軒先へ出迎へていた。

——森鴎外『雁』

九、耽美派

自然主義の「早稲田文学」に対抗し、雑誌「スバル」[2]や「三

---

[1] 歴史其儘と歴史離れ』の中で述べられている、鴎外の歴史小説の創作理論。歴史のなかの「自然」を尊重する考え方が「歴史其儘」で、歴史のなかの「自然」を変更する考え方が、「歴史離れ」とされる。

[2] 「明星」の後を継いで1909年に創刊された耽美派の歌人や作家の拠点となった文芸雑誌。

田文学」、文芸運動＜パンの会＞によった作家たちが、耽美派と呼ばれる一派であった。彼らは、美を最高のものとする芸術至上主義の立場を取り精神よりも感覚、内容よりも技巧、写実よりも虚構を重視した。この耽美派を代表する作家が、永井荷風と谷崎潤一郎である。

◎ 永井荷風

１９０８年、五年間の米・仏留学から帰国した荷風は、『あめりか物語』（１９０８年）・『ふらんす物語』（１９０９年）を相継いで発表し、かつての自然主義の作風から耽美的なものに転換した。明治四十三年（１９１０年）には、鴎外の推薦で慶応大学の教授となり、耽美派の拠点となった「三田文学」から離れた。その後は戯作者的態度で近代に背を向け、江戸情緒にふけり、享楽的な花柳趣味の『腕くらべ』（１９１６年～１９１７年）などの小説や随筆を書いた。荷風の死後発刊された日記『断腸亭日乗』も、文学的価値の高い作品である。

◎ 谷崎潤一郎

日本の耽美主義の頂点まで到達したのは谷崎潤一郎である。谷崎潤一郎（１８８６年～１９５６年）は、反自然主義の立場から徹底して官能美を求めた作家でもあった。性の追求・母性憧憬・女性崇拝を創作のモチーフとした。第

二次「新思潮」に『刺青』（１９１０年）などの作品を発表していた谷崎は、荷風の絶賛により耽美派としての作家活動を開始する。谷崎はその後も官能性を強め、性倒錯による退廃美を好んで題材とした。また、その指向から悪魔主義[①]作家とも呼ばれたが、その絢爛たる文体は極めて文学性の高いものであった。大正期から昭和初期の代表作に、女性崇拝とマゾヒズムの世界を描いた『知人の愛』（１９２４年～１９２５年）、三角関係[②]から離婚に直面した夫婦の心理を古典的雰囲気で描いた『蓼食ふ虫』（１９２８年～１９２９年）などがある。後期は古典回帰の方向に向いた。

「この絵は刺青と一緒にお前にやるから、其れを持つてもう帰るがいい」かう言つて清吉は巻物を女の前にさし置いた。

「親方、私はもう今迄のやうな臆病な心を、さらりと捨ててしまひました。___お前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ」

と、女は剣のやうな瞳を輝かした。その耳には凱歌の声がひびいて居た。

「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」清吉はかう云つた。

女は黙って頷いて肌を脱いだ。折りから朝日が刺青の面をさして、女の背は燦爛とした。

___谷崎潤一郎『刺青』

---

① 悪醜悪や怪異などの悪魔的なものに、美や快楽を見出そうとする傾向。
② 実生活上の谷崎夫妻と佐藤春夫との関係がモデルになっている。

十、白樺派

明治四十三年（１９１０年）、学習院内の三つの回覧雑誌の同人たちが集まり、雑誌「白樺」が創刊された。彼らは白樺派と総称され、反自然主義の一翼を担うとともに、エゴイズムを徹底的に肯定し、理想主義・人道主義をその主潮とした。「白樺派」には上流階級の家庭に育った若者が多かったため、生田長江により「自然主義の洗礼も受けない箱入息子の単純さ」などという酷評も受けた。これに対して和辻哲郎らが反論に立ったが、これを＜白樺論争＞と呼んでいる。大正時代後半、社会不安や労働運動の激化に伴ない、観念的なこの派の思想は揺らぎだし、有島武郎の自殺により、白樺派と大正時代の終焉が象徴されたのである。

◎ 武者小路実篤

武者小路実篤（１８８５年～１９７６年）は、白樺派の中では、指導的な存在である。東京の子爵の生まれ。学生時代に博愛・禁欲・社会救済を主張したトルストイに傾倒したが、後に積極的な自我肯定へとその思想を転じた。この時期の代表作に『お目出たき人』（１９１１年）があるが、その後人道主義傾向を強めた実篤は、理想社会の創造を目

指して、大正七年（１９１８年）、宮崎県日向市に共生農園「あたらしき村」を建設した。このころの作品に、『幸福者』『友情』（１９１９年）・自伝小説『或る男』（１９２１年～１９２３年）などがあり、ヒューマニズムの濃い理想主義思想を展開していた。第一次大戦時には戯曲『その妹』など反戦的な作品を発表したが、第二次大戦時には、戦争協力的な『大東亜戦争私観』を発表し、戦後公職追放処分を受けた。後文学者の域を越えた理想主義・人道主義的生き方を終生貫いた。

◎ 志賀直哉

「小説の神様」と呼ばれた志賀直哉（１８８３年～１９７１年）は、宮城県出身。渡良瀬川鉱毒事件をめぐり実業家の父と対立、この不和は長く直哉の創作のテーマとなった。また女中との恋愛事件から父との対立が激化し、城の崎や大山を放浪する間、自然とのふれあいの中で、対立よりも調和の生き方を求めるようになる。その結果、父との和解である。

直哉は強烈な自我と厳しい倫理観とを兼ね備え、鋭い感覚に満ちた簡潔な文体により、他の白樺派作家たちとは異なる傾向の文学を創造した。特に短編にはすぐれた才能を発揮し、『網走まで』（１９１０年）・『城の崎にて』（１９１７年）・『小僧の神様』（１９２０年）などの名作を書いた。さらに、父との長年の不和の解消を描き、近代私小説の代

表作ともされる『和解』(１９１７年）を発表した後、漱石の依頼で、唯一の長編『暗夜行路』(１９２１年～１９２３年）を執筆した。これは、主人公の心情や自然の美しさを、的確かつ端正に表現している点などから、近代文学の名作の一つに数えられる。

静かな夜で、夜鳥の声も聴えなかった。そして下には薄い靄がかかり、村々の灯も全く見えず、見えるものといへば星と、その下に何か大きな動物の背のやうな感じのする此山の姿が薄く仰がれるだけで、彼は今、自分が一歩、永遠に通ずる路に踏出したといふやうな事を考へていた。彼は少しも死の恐怖を感じなかった。然し、若し死ぬなら此侭死んでも少しも憾むところはないと思った。然し永
遠に通ずるとは死ぬ事だといふ風にも考へていなかった。

——志賀直哉『暗夜行路』

◎ 有島武郎

有島武郎(１８７８年～１９２３年)は、東京生まれ。里見弴の実兄である。初めキリスト教徒であった有島は学習院から札幌農学校（北海道大学の前身）を経て渡米するが、キリスト教に疑念を抱くとともに社会主義思想の影響を受けて帰国し、「白樺」に参加した。『カインの末裔』(１９１７年）や『生れ出づる悩み』(１９１８年）などによって文壇での名声を獲得した彼は、近代的な自我の強さから前近代的な社会と対立して最後には自滅に至る女性の生涯を描いた長編『或る女』(１９１１

年～１９１３年）を発表する。さらに、有産階級である自身の生き方に苦悩し、武者小路の「新しき村」運動を支援するとともに、社会主義運動を認める評論『宣言一つ』（１９２２年）を発表する。その後も自己の思想を生活や作品に実現する努力を試みたが、活路(かつろ)を見出せずに、最後は軽井沢(かるいざわ)で女性記者と情死という形でその生涯を終えた。

◎ その他の白樺派作家

長与善郎(ながよよしろう)[1]は、南蛮鋳物師(なんばんいものし)の悲劇を描いた『青銅の基督(きりすと)』（１９２３年）などの作品を書いた。また里見弓享[2]は、『多情仏心(たじょうぶっしん)』（１９２２年～１９２３年）で、「まごころ哲学」を説いたが、そのころはすでに「白樺」の同人からは離れ、新現実主義に近い存在だった。さらに西田幾多郎(にしだきたろう)の影響を受けた劇作家・評論家の倉田百三(くらたひゃくぞう)（１８９１年～１９４３年）は、戯曲『出家とその弟子』（１９１６年～１９１７）評論『愛と認識との出発』（１９２１年）などを著した。

十一 、新思潮派

美の世界に閉じこもった耽美派や理想を追い求める白樺

---

[1] （１８８８年～１９６１年）、東京生まれ。武者小路に感化を受け、トルストイにも親しんだ。主な作品に『竹沢先生と云ふ人』・自伝『わが心の遍歴』、戯曲『項羽と劉邦』などがある。

[2] （１８８８年～１９８３年）、有島武郎の実弟。「直の心をもって生きれば何事も許される」という、独特の「まごころの哲学」を展開した。

派とは異なり、現実を、冷静に観察し、理知的にとらえ、技巧的に表現しようとしたのが新現実主義の文学で、その代表的な人々が、同人誌「新思潮」[1]（第三次・第四次）に集まった、いわゆる新思潮派の作家たちであった。彼らは、大正文壇の主流となった。

◎ 芥川龍之介

芥川竜之介（１８９２年〜１９２７年）は、新思潮派の代表的作家であった。新原敏三の長男として東京に生まれたが、母がまもなく発狂したため、母方の実家に入籍し、芥川姓となる。養父母・伯母への心遣いや実母の狂気が彼の一生に大きく影を落とした。東大在学中に体験した初恋の挫折から、『羅生門』・『鼻』を書いた。第四次「新思潮」に発表した『鼻』（１９１６年）が漱石の賞賛を受け、文壇に登場した。初期の芥川は芸術至上主義の立場から、『地獄変』（１９１８年）などの王朝物、『戯作三昧』（１９１７年）などの江戸物、『奉教人の死』（１９１８年）などの切支丹物、『舞踏会』（１９２０年）などの開化物などの短編を次々に発表した。芥川は題材や作風を工夫し、素材を『今昔物語集』などの古典にも求めて、歴史小説に

---

① １９０７年の第一次から、１９７０年の第十八次にかけて、東大系の同人誌として断続的に出版される。第三次の主な同人は、久米正雄・山本有三・豊島与志雄・芥川龍之介・菊池寛らで、第四次は、芥川・久米・菊池らであった。

新しい領域を開拓した。また、芥川は心理分析などの技巧、構成の見事さ、洗練された文体などから新技巧派とも呼ばれ、志賀直哉と並ぶ短編小説の模範とされた。

しかし、『秋』（１９２０年）以降の後期作品では次第にその作風を変え、自身をモデルとした私小説である保吉物も創作したが、前期に比べるとやや魅力の薄い作品群となった。その後、プロレタリア文学の台頭による芸術観の動揺により、焦燥感や厭世感を抱きつつ作品を発表していた芥川は、「何か僕の将来に対するぼんやりした不安」から、自らの生命を絶った。『歯車』や『或阿呆の一生』は、芥川の死後発表された。

> この時彼の王者のやうな眼に映っていたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀誉に煩はされる心などは、とうに眼底を払って消えてしまった。あるのは、唯不可思議な悦びである。或は恍惚たる悲壮の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の厳かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその残滓を洗って、まるで新しい鉱石のやうに、美しく作者の前に、輝いているではないか。……
>
> ——芥川龍之介『戯作三昧』

◎ 菊池寛

菊池寛（１８８８年～１９４８年）は、香川県出身。京大英文科卒業後新聞記者になり、そのかたわらで小説や戯曲を発表する。常に近代の合理精神を常識的な市民生活に生かし、生活第一、芸術第二を信条とした。第四次「新思潮」に『屋上の狂人』(１９１６年)や、『父帰る』(１９１７年)などの戯曲を発表したが認められず、ようやく小説『無名作家の日記』(１９１８年)や『忠直卿行状記』(１９１８年)によって作家としての地位を獲得した。菊池寛の作品は、テーマ小説と呼ばれるほどの明快な主題や的確な心理分析、簡潔な描写を特色とした。『恩讐の彼方に』（１９１９年）は、仇討の無意味さとヒューマニズムの偉大さをテーマとした菊池寛の代表といえる。一方芥川の保吉物と同様、自身の身辺を描いた啓吉物と呼ばれる作品もあった。また『眞珠夫人』（１９２０年）以後は、現代風俗を描いた通俗小説に転じ、大衆文学の先駆者となった。その後大正十二年（１９２３年）に雑誌「文芸春秋」を創刊するとともに、＜文芸家協会＞を設立、さらには、新人育成のために直木賞と芥川賞を設けるなど、創作活動以外の文学振興の面でも大きな功績を残した。

◎ 其の他の新思潮派

漱石に師事(しじ)した久米正雄(くめまさお)[1]は、第三次「新思潮」に戯曲『牛乳屋(ぎょうにゅうや)の兄弟』（１９１４年）を発表して文名を得た。さらに、主人公が受験の失敗と失恋から自殺にいたる小説『受験生の手記』（１９１８年）や、漱石の長女との失恋を描いた長編『破船(はせん)』(１９２２年)などの作品が話題となり、その後も通俗小説の分野で活躍した。

山本有三(やまもとゆうぞう)[2]は、『波』（１９２８年）・『女の一生』（１９３２年～１９３３年)・『路傍の石』(１９３７年～１９４０年)などの作品で、理想に向かって生きる人々の姿を誠実に描き続けた。

豊島与志雄(とよしまよしお)[3]は、『野ざらし』（１９２３年）などで、知的で幻想かつ心理的な作風を示し、さらに翻訳や児童文学の世界でも活躍した。

十二、大正各派の文学

◎ 三田派

佐藤春夫(さとうはるお)や久保田万太郎(くぼたまんたろう)・水上滝太郎(みなかみたきたろう)らは、洗練された都会的センスの作品を「三田文学」に発表し、いわゆる三

---

[1] （１８９１年～１９５２年)、長野県出身。俳人・小説家・劇作家。
[2] （１８８７年～１９７４年)、栃木県出身。
[3] （１８９０年～１９５５年)、作家・随筆家・翻訳家。

田派を形成した。佐藤は詩人として出発した後、『田園の憂鬱』（１９１８年）によって小説家としての名声を獲得した。久保田は荷風の影響から、滅んで行く江戸の下町の風俗を、独特の叙情的な文体で描いた。『末枯』（１９１７年）や『春泥』（１９２８年）などが代表作である。また水上は、鏡花と荷風に傾倒し、中正なモラリストの立場から『大阪の宿』（１９２５年～１９２６年）などの市民的作品を発表した。なおこれらの作家は、耽美派に分類されることもある。佐藤春夫の友人の室生犀星は春夫と同様、詩人として出発した後、『性に目覚める頃』（１９１９年）など一連の自伝的小説を発表した。その後も詩人らしい叙情的で詩的な作風で、名作の『あにいもうと』（１９３４年）や王朝物・自伝物などの作品を発表し続けた。

◎ 奇蹟派（新早稲田派）

大正元年（１９１２年）、広津和郎（１８９１年～１９６８年）や葛西善蔵（１８８７年～１９２８年）らは同人雑誌「奇蹟」を創刊し、さらに早稲田大学を中退した宇野浩二（１８９１年～１９６１年）を加えて奇蹟派（新早稲田派）を形成した。彼らは、旧来の自然主義を継承しながらも、そこから作者の内面や身辺を描く私小説という新しい展開を示した。

広津は、『怒れるトルストイ』（１９１７年）など、理性

を重んじる鋭い評論を発表したほか、性格破綻者を描いた『神経病時代』（１９１７年）などの小説も発表した。葛西は破滅型の私小説作家の代表であり、『子をつれて』（１９１８年）などを書き、貧苦・病苦の生活を素材に、生活無能力者としての自分を冷静に描いた。宇野は饒舌の文体と滑稽・哀感に満ちた風俗小説的手法で『蔵の中』（１９１９年）などを書いて流行作家となった。

◎ 漱石山脈

漱石の周囲には、森田草平・鈴木三重吉・野上弥生子らの漱石を慕う作家や評論家が多く集まり、いわゆる＜漱石山脈＞を形成した。森田は漱石の薦めで、『煤煙』（１９０９年）を発表して話題となった。鈴木は『千鳥』（１９０６年）で文壇に登場し、大正七年（１９１８年）には雑誌「赤い鳥」を創刊するなど、児童文学の分野でも活躍した。野上は、人道主義的作品『海神丸』（１９２２年）によって文名を高めた。

◎ 大衆文学と社会主義文学

大正期には、マスコミの発達とともに通俗小説や時代小説に代表される娯楽性の高い大衆文学が成立しはじめた。その代表的作家は、『大菩薩峠』（１９１３年～１９３１年）の中里介山（１８８５年～１９４４年）や、通俗小説にそ

の作風を転じた菊池寛・大仏次郎・吉屋信子らであった。

明治四十三年（１９１０年）の大逆事件①以降、社会主義運動は弾圧を受け、「冬の時代」を迎えていた。しかし、大杉栄と荒畑寒村は運動の復活を図り、大正元年（１９１２年）に、雑誌「近代思想」を創刊させた。その後、労働者出身の作家による労働文学の必要性が説かれるとともに、宮嶋資夫の『坑夫』（１９１６年）や、宮地嘉六の『或る職工の手記』（１９１９年）などの作品が発表され、大正八年（１９１９年）には、「労働文学」などの雑誌が相次いで創刊された。さらに、大正十年（１９２１年）には、小牧近江らによる雑誌「種蒔く人」が創刊され、青野季吉らの評論が掲載された。労働文学を含むこれらの社会主義文学は、文学的には未熟であったが、後のプロレタリア文学の前史をなす働きをした。

◎ 大正期の評論

大正期の主な評論家には、漱石山脈の小宮豊隆・阿部能成・阿部次郎らがいた。彼らは反自然主義の評論を展開するとともに、理想主義者の立場から、人格主義を主潮とした＜大正教養主義＞を形成した。また、この時期の主な文学論争としては、作品の内容的価値をめぐり菊池寛と里見弴との間で行われた＜内容的価値論争＞や、散文芸術の特色をめぐり広津和郎・佐

---

① １９１０年に発生した、無政府主義者弾圧事件。幸徳秋水らが天皇暗殺計画の容疑で処刑された。

藤春夫と生田長江との間で行われた＜散文芸術論争＞などがあった。

第四節　昭和の小説と評論

一、プロレタリア文学①

大正十二年（１９２３年）の関東大震災とその後の弾圧で廃刊を余儀なくされた「種蒔く人」の同人を中心に、「文芸戦線」（１９２４年）が創刊され、プロレタリア文学運動の拠点となった。葉山嘉樹・黒島伝治・平林タイ子・青野季吉・平林初之輔らが集まって、労働者・農民の解放を目指す文学運動を推進した。しかしその後、「文芸戦線」なども分裂や統合を繰り返した末、昭和二年（１９２７年）、社会民主主義系の労働芸術家連盟（労芸）の機関誌となり、それ以後は急速に衰退していった。一方、主流となった人々は、昭和三年（１９２８年）、全日本無産者芸術連盟（ナップ②）を結成し、機関誌「戦旗」を中心に革命文学運動を展開した。小林多喜二・徳永直・窪川（佐多）稲子・中条（宮本）百合子らが登場し、その理論

① ロシア革命の影響で大正末から昭和初期にかけて起こった革命運動。
② １９２８年、日本プロレタリア芸術連盟と前衛芸術同盟が合同して結成したもので、蔵原の提案により、１９３１年日本プロレタリア文化連盟を結成するため解散し、「戦旗」も終刊。

的柱(はしら)として、蔵原惟人(くらはらこれひと)・中野重治(しげはる)・宮本顕治(けんじ)らが活躍した。特に蔵原は、階級的視点に立ったプロレタリア・レアリズムを主張した。

◎ 葉山嘉樹

葉山嘉樹（１８９４年～１９４５年）は、「文芸戦線」（「文戦」派）を代表する作家である。大正十五年（１９２６年）、石炭(せきたん)を運ぶ貨物船(かもつせん)の水夫(すいふ)たちが待遇改善を要求してストライキを行うが、最後には敗北する小説『海に生くる人々』（１９１７年～１９２３年）を書いた。葉山は、政治理論優先の小林多喜二に比べて、自己の体験に基づく情念を重視した作品が多い。名古屋のセメント会社での体験から書かれた『セメント樽(たる)の中の手紙』（１９２６年）もその一つで、これらは前期プロレタリア文学の傑作のされている。

◎ 小林多喜二

小林多喜二（１９０３年～１９３３年）は、戦旗派を代表する作家である。『一九二八年三月十五日』（１９２８年）によって注目され、蟹工船という過酷な労働条件下で、苦しみながら働く人々が搾取(さくしゅ)の仕組みに気づき、団結して闘争に立ち上がる姿を描いた『蟹工船(かにこうせん)』（１９２９年）によってプロレタリア文学運動の象徴的存在となった。そのほか、『不在地主』（１９２９年）・『工場細胞』（１９３０年）・『転

形期の人々』(１９３１年～１９３２年)・『党生活者』(１９３３年）などがある。１９３３年、特高警察に逮捕され殺された。

「俺達には、俺達しか、味方が無えんだな。始めて分かった。」

「帝国軍艦だなんて、大きな事を言ったって大金持ちの手先でねえか、国民の味方？をかしいや、糞喰へだ！」

水兵達は万一を考へて、三日船にいた。その間中、上官達は、毎晩サロンで、監督達と一緒に酔払っていた。

いくら漁夫達でも、今度といふ今度こそ、「誰が敵」であるか、そしてそれ等が（全く意外にも！）どいうふ風に、お互が繋り合っているか、といふことが身をもって知らされた。

———小林多喜二『蟹工船』

中野重治[1]は、大正十五年（１９２６年）四月、室生犀星のもとに集まっていた堀辰雄・窪川鶴次郎らと「驢馬」を創刊し、詩人として出発したが、後、評論家・小説家としても活躍し、プロレタリア文学運動の中心人物の一人となった。この時期の評論は、『芸術に関する走り書的覚書』（１９２７年）にまとめられた。労働者出身の徳永直（１８９９年～１９５８年）は、自ら体験した印刷争議を素材として代表作『太陽のない街』（１９２９年）を発表した。

---

[1] （１９０２年～１９７９年)、福井県出身。詩人・小説家・評論家。

窪川（佐多）稲子は、カフェーで働くうちに「驢馬」の同人と出会い、中野重治のすすめで、自己の体験に基づく『キャラメル工場から』（１９２８年）を続けて『幹部女工の涙』（１９３１年）などを発表し、プロレタリア作家となった。

二、新感覚派

私小説・心境小説の袋小路（ふくろこうじ）に入った既成文壇のリアリズムや革命の文学を叫ぶプロレタリア文学と対立し、西洋の前衛芸術の影響を受け、大正十三年（１９２４年）、片岡鉄平（かたおかてっぺい）・川端康成（かわばたやすなり）・今東光（こんとうこう）・中河与一（なかがわよいち）・横光利一（よこみつりいち）らは「文芸時代」を創刊し、「宗教時代より文芸時代へ」（川端康成『新しき生活と新しき文芸』）という考えのもと、既成文壇に新風を送り込もうとした。彼らは従来の写実的表現方法を否定し、擬人法（ぎじんほう）や比喩（ひゆ）などを用いて感覚面で鮮やかなイメージを描き出したため、新感覚派と呼ばれた。新感覚派は、ダダイズムや未来派、表現派などをも含めた運動を展開し、文学の芸術的立場を維持して、その後の新興芸術派、新心理主義などの芸術派の文学運動に影響を与えた。

◎ 横光利一

川端と親交（しんこう）した横光利一（１８９８年～１９４７年）は、『蠅（はえ）』『日輪（にちりん）』（１９２３年）で、新しい感覚的な表現方法

を用いて、新感覚派の中心作家となったが、『上海』（１９２８年～１９３１年）を最後に新心理主義に移った。『機械』（１９３０年）や『紋章』（１９３４年）などでは、知識人の自意識を心理的に追求し、未完の長編『旅愁』（１９３７年～１９４６年）では、東洋と西洋との対決を通して、日本的なものの肯定を示した。

◎ 川端康成

横光と並ぶ新感覚派の代表的作家である川端康成（１８９９年～１９７２年）は、孤児意識と自らの美意識に身をひそめ、東洋的虚無と日本的叙情とに包まれた作風を築いた。踊り子たちの哀歓や人間性によって主人公の心が洗われる様子を鋭敏な感覚と美しい叙情で描いた『伊豆の踊り子』（１９２６年）、親しくなった踊り子や浅草の風俗を描いた『浅草紅団』（１９２９年～１９３０年）、虚無と死に隣接した人間嫌悪の『禽獣』（１９３３年）を経て、つかの間の生命の燃焼に美意識を結晶させる主人公を、雪国の風物を背景に描いた『雪国』（１９３５年～１９３７年）によって、川端文学の完成を見ることになる。

また川端には、「掌の小説」と呼ばれるすばらしい短編小説群があり、飛躍のある文体や新しい構成を創り出した。昭和四十年（１９６８年）には、ノーベル文学賞を受賞し、「美しい日本の私―その序説」という著名な記念講演を

行ったが、四十七年（１９７２年）、ガス自殺で自らの命を絶った。

> 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなつた。信号所に汽車が止まつた。
>
> 向側の座席から娘が立つてきて、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れ込んだ。娘は窓いつぱいに乗り出して、遠くへ叫ぶやうに、
>
> 「駅長さん、駅長さん。」
>
> 明りをさげてゆつくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。
>
> ——川端康成『雪国』

三、新興芸術派

新感覚派の後に、新潮社の中村武羅夫(なかむらむらお)を中心に多くの新人が集まり、昭和五年（１９３０年）、＜新興芸術倶楽部＞を結成した。しかし、明確な文学主張を持たず、その多くが都市文化や風俗の退廃的・享楽的作風にとどまった。むしろこの派の主流ではなかった井伏鱒二(いぶせますじ)・梶井基次郎(かじいもとじろう)・堀辰雄(ほりたつお)、『ダイヴイング』（１９３４年）の船橋聖一(ふなばしせいいち)、『冬の宿』（１９３６年）の阿部知二(あべともじ)、『業苦(ごうく)』『崖の下』(１９２８年)や『途上』(１９３２年)の嘉村礒多(かむらいそた)、

『ゼーロン』(1931年)・『鬼涙村』(1934年)の牧野信一、『放浪記』(1928年〜1948年)の林芙美子らが個性的な作品を残した。

◎ 井伏鱒二

井伏鱒二（1898年〜1993年）は、独特のユーモアと哀感のある描写で、事件を立会人や傍観者の立場から対象をとらえて表現した。岩穴から外に出られなくなった山椒魚の滑稽な反応に、人間の愚かしい姿を重ねあわせた『山椒魚』（1929年）を始めとして、『鯉』（1928年）・『屋根の上のサワン』（1929年）『ジョン万次郎漂流記』（1937年）・『さざなみ軍記』（1938年）などの作品を発表し、独自の井伏文学を確立していった。

山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩家から外へ出てみようとした野であるが、頭が出口につかへて外に出ることができなかったのである。いまは最早、彼にとつて永遠の棲家である岩屋は、出入口のところがそんなに狭かつた。そして、ほの暗かつた。強ひて出て行かうところみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロップの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそはなつたが、彼を狼狽させ且つ悲しませるには十分であつたのだ。

——井伏鱒二『山椒魚』

◎ 梶井基次郎

梶井基次郎（１９０１年～１９３２年）は、高校時代から肺を病み、虚無と倦怠に虫食まれた青春を描きながら、みずみずしい感受性や繊細な観察に支えられた独自の作風を展開した。心身の病気に悩む青年の不安や焦りを鋭い感受性で描いた『檸檬』『城のある町にて』（１９２５年）・『闇の絵巻』（１９３０年）などの作品を遺したが、三十一歳の若さで病死した。

四、新心理主義

新興芸術派の解体後、新感覚派の流れに、ジョイス・ラディゲ・プルースト[1]の新心理主義の方法と導入して、意識の流れを追って人間の深層心理を芸術的に表現しようとしたのが、伊藤整[2]を中心とした新心理主義の作家らである。詩人として出発した伊藤整は新心理主義の提唱者として、評論集『新心理主義文学』（１９３２年）を発表し、『幽鬼の町』（１９３７年）で前衛的手法を試みた。横光利一の『機

---

[1] （１８８２年～１９４１年）。イギリスの小説家。『ユリシーズ』などの作品がある。ラディゲ____（１９０３年～１９２３年）。フランスの小説家。『肉体の悪魔』などの作品がある。プルースト____（１８７１年～１９２２年）。フランスの小説家。『失われた時を求めて』・『楽しみの日々』などの作品がある。

[2] （１９０５年～１９６９年）、詩人・小説家・評論家。

械』（１９３０年）や川端康成の『水晶幻想』（１９３１年）も、新心理主義の手法による作品とみなされる。

◎ 堀辰雄

新心理主義の頂点に立った堀辰雄（１９０４年～１９５３年）は、東大在学中、コクトー・ラディグ・ブルースト・リルケ[①]らの影響を受け、雑誌「驢馬」で活躍した。『ルウベンスの偽画』（１９２７年～１９３０年）などで、二十世紀文学の教養と自己の資質との融合を図った。そして、師芥川の死をモチーフとした『聖家族』（１９３０年）で作家の地位を確立した。その後、『美しい村』（１９３３年～１９３４年）・『風立ちぬ』（１９３６年～１９３８年）・『穂子菜』（１９４１年）など、知性と感性の統合や繊細な心理分析の手法による作品を書き続けた。また、「死」と「愛」の世界を、純粋と美の世界に高めながら新しい「生」を求めるという『風立ちぬ』の主題は、その後の中村眞一郎や福永武彦の活動に大きな影響を与えた。

風立ちぬ、いざ生きめやかも。（ヴァレリー）

ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私に靠れているお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返していた。それからや

---

① （１８８９年～１９６３年）、フランスの詩人・小説家。『恐れるべき子供たち』・『山師トマ』などの作品がある。

っとお前は私を振りほどいて立ち上がって行った。まだよく乾いてはいなかったカンヮスは、その間に、一めんに草の葉をこびつかせてしまっていた。

——堀辰雄『風立ちぬ』

五、文化統制下の文学

◎ 転向文学

満州事変（１９３１年）以後、第二次大戦が終わるまで、日本全国で徹底した思想統制が強行され、特に左翼思想が厳しく弾圧された。昭和七年（１９３２年）、中野重治・蔵原惟人らが検挙され、翌年小林多喜二が虐殺される中、プロレタリア文学の作家たちは転向を余儀なくされ、その苦悩などを私小説の形で告白したのが転向文学である。中野のほか、村山知義の『白夜』（１９３４年）・立野信之の『友情』（１９３４年）、高見順の『故旧忘れ得べき』（１９３５年～１９３６年）、島木健作の『生活の探求』（１９３７年～１９３８年）、本庄睦男の『石狩川』（１９３９年）林房雄の評論『転向について』（１９４１年）などがある。

◎ 中野重治

プロレタリア文学の代表として活躍した中野重治は、昭和九年（１９３４年）、党活動をしないという意味での転向

を行い、『第一章』『鈴木・都山・八十島』『村の家』『一つの小さな記録』『小説の書けぬ小説家』の転向五部作（１９３５年～１９３６年）で後退した自己の生き方を追求するとともに、『汽車の罐焚き』（１９３７年）・『空想家とシナリオ』『歌のわかれ』（１９３９年）『斎藤茂吉ノオト』（１９４０年～１９４１年）などのすぐれた小説や評論を書き続けた。

◎ 文芸復興

プロレタリア文学の衰退や社会の不安の中で、芸術派や旧世代の老大家たちが復活し、文壇が「文芸復興」の様相を呈してきた。永井荷風は『つゆのあとさき』（１９３１年）・『ひかげの花』（１９３４年）・『濹東綺譚』（１９３７年）を谷崎潤一郎は『芦刈』（１９３２年）『春琴抄』（１９３３年）・評論『陰翳礼讃』（１９３３年）・現代語訳『源氏物語』（１９３５年～１９３８年）などを、島崎藤村は歴史小説『夜明け前』（１９２９年～19３５年）を志賀直哉は唯一の長編小説『暗夜行路』（１９２１年～１９３７年）を室生犀星は『あにいもうと』（１９３４年）を、徳田秋声は『仮装人物』（１９３５年～１９３８年）・『縮図』(１９４１年末未完)などを、それぞれ発表して、独自の活動を展開した。

◎「文学界」と「行動」

昭和八年（１９３３年）、小林秀雄・川端康成・武田麟太郎・

林房雄・宇野浩二・広津和郎らが同人となって「文学界」を創刊し、文芸復興の中心的役割を果たした。既成作家・転向作家・新人作家が集まり、押し寄せつつあるファシズムから文学の本質を守ろうとした。特に注目すべきものは小林秀雄の評論活動である。

小林秀雄①は、すでに『様々なる意匠』(１９２９年)で、現代文学の動向を鋭く分析し、文芸批評家としての地位を確立しており、その後も『私小説論』(１９３５年)や、『ドストエフスキイの生活』(１９３５年～１９３７年)・『無常という事』(１９３９年～１９４３年)など活発な評論活動を展開した。小林の功績は、文芸批評を、詩や小説に対して二次的な存在ではなく、独立した地位にまで高めた点にある。小林のこの意図は、すでに『様々なる意匠』の中にも見ることができる。

> 文学の世界に詩人が棲み、小説家が棲んでいるように、文芸批評家といふものが棲んでいる。詩人にとっては詩を創る事が希ひであり、小説家にとっては小説を創る事が希ひである。では、文芸批評家にとっては文芸批評を書く事が希ひであるか？おそらくこの事実は多くの逆説を孕んでいる。
>
> ——小林秀雄『様々なる意匠』

---

① (１９０２年～１９８３年)、東京都生まれ。著名な文芸評論家。批評主体による対象を直観的に把握する方法を確立した。

その外、評論では『二葉亭四迷論』(１９３６年)の中村光夫、『道徳と教養』(１９４０年)の河上哲太郎、小説では『いのちの初夜』(１９３６年)の北条民雄、『冬の宿』(１９３６年)の阿部知二、『鶴は病みき』(１９３６年)の岡本かの子、『マルスの歌』(１９３８年)の石川淳、『厚物咲』(１９３８年)の中山義秀などが活躍した。しかし、「文学界」の思想は、戦争の進展につれて戦局順応に向かい、＜近代の超克[1]＞を唱えるに至った。

一方、「文学界」と同じ年に、小松清・舟橋聖一・阿部知二らによって創刊された「行動」は、フランス知識人の行動的ヒューマニズムの影響を受け、行動主義と能動精神を提唱した。船橋の『ダイヴイング』(１９３４年) を代表作とし、あとは時流に抗し得ず、下火になっていった。

◎ 「日本浪漫派」と「人民文庫」

プロレタリア文学の崩壊後、対照的な二つの同人雑誌「日本浪漫派」と「人民文庫」が発刊された。

「日本浪漫派」は、保田与重郎 (１９１０年～１９８１年)・亀井勝一郎 (１９０７年～１９６６年) らを中心に、昭和十年(１９３５年)に創刊され、日本的な詩精神と古典の復興を企図した。保田与重郎は、評論集『日本の橋』(１

---

[1] 西欧近代の知性に対して、日本的知性の新秩序を生みだそうとする意図であったが、結果として知識人が戦争協力するのに、合理的な役割を果たした。「文学界」(昭和１７年九・十号)。

936年)・『後鳥羽院』(1939年)などで、独特の美意識を示した。また、西洋文化による日本の近代化に異議を唱え、日本の古代への回帰を説いた。亀井勝一郎は、転向の苦悩からの脱却を試みて、『転形期の文学』(1934年)を書いたが、後に『人間教育』(1937年)・『大和古寺風物誌』(1943年)などで、日本の伝統美や倫理の世界に向かった。日中開戦後、日本主義的傾向がより顕著になり、戦地に赴く若者たちに、滅びの美学を提供するイロニーを演じる事になった。「日本浪漫派」の廃刊後は、その同人たちが「コギト」を舞台に評論活動を行った。

一方、「日本浪漫派」を現実逃避や転向による敗北と批判した武田麟太郎・高見順らを中心に、昭和十一年に(1936年)に創刊された「人民文庫」は、戦争に協力する体制文学に対抗し、リアリズムの発展を目指して「散文精神」を主張して活動したが、当局から発売禁止などの弾圧を受け、廃刊を余儀なくされた。

◎ 新人作家

文芸復興の機運に乗じ、多くの新人作家が輩出し、「昭和十年代の作家」と呼ばれる。昭和十年(1935年)に制定された芥川賞を登竜門にして、『蒼氓』(1935年)の石川達三、『草筏』(1935年)の外村繁、『普賢』(1936年)の石川淳、『暢気眼鏡』(1933年)の尾崎一雄ら

が登場する。小説では、丹羽文雄・上林暁らがいる。また、『人生劇場』（１９３３年～１９５９年）の尾崎士郎、『若い人』（１９３３年～１９３７年）の石坂洋次郎のほか、芹沢光治良・中里恒子・壷井栄など、戦後に活躍する作家たちがこのころ登場する。さらに、戦後の「新戯作派」の太宰治・坂口安吾・織田作之助らもこのころから作品を発表しはじめた。太宰は、左翼運動からの脱落による罪の意識を自虐的に描いた『晩年』（１９３６年）のほか、『ダス・ゲマイス』（１９３５年）・『富嶽百景』（１９３９年）・『走れメロス』（１９４０年）・『右大臣実朝』（１９４３年）などを発表し、織田は、人生の流転を『夫婦善哉』（１９４０年）に描き、坂口は、評論『日本文化私観』（１９４２年）を書いた。その他の評論に、三木清の『人生論ノート』（１９４１年）、和辻哲郎の『風土』（１９３５年）、石川淳の『森鴎外』（１９４１年）などがある。

◎ 戦時中の文学

昭和十二年（１９３７年）の対中開戦が始まると、日本当局は文化統制を強化し、戦争に批判的な島木健作の『再建』（１９３７年）や石川達三の『生きている兵隊』（１９３８年）などを発売禁止処分にした。一方、火野葦平の『麦と兵隊』（１９３８年）など戦意の高揚に好都合のものを利用しようとした。やがて戦争文学が流行し、昭和十七年（１

９４２年）には、<日本文学報告会>が結成され、直接的に国家権力が文学を統制するに至った。この中で、農民文学・大陸文学・生産文学・海洋文学などの国策文学ばかりが盛んになっていった。

戦争という暗い時代に、純粋（じゅんすい）に文学を守り、人間の運命と社会を見つめていたのは、代々、漢学者や中国文学者の家系に生れ育った中島敦（なかじまあつし）[①]である。中島は、中国古典や西洋文学の素養をもとに、『山月記（さんげつき）』『光と風と夢』（１９４２年）・『李陵（りりょう）』『弟子』（１９４３年）など、歴史に取材した作品を書き、戦後の実存主義文学の先駆的役割を果たした。

第五節　戦後文学

一、戦後文学の出発

昭和二十年（１９４５年）、日本の無条件降伏の形で戦争が終わるとともに、言論・表現の自由が回復され、雑誌の復刊が相継ぎ、沈黙していた既成作家たちも一斉に活動を再開した。

◎ 既成作家の復活

---

① （１９０９年～１９４２年）、東京生まれ。死後の１９４３年の『新創作』というエッセイに、文学と政治、国策とを峻別する厳しく純粋な精神が見られる。

永井荷風は、戦争中に書き溜めていた『踊子』『勲章』『浮沈』『問はずがたり』（１９４６年）を矢継ぎ早に発表した。谷崎潤一郎は、戦時中軍部の圧力で発表を停止していた大作『細雪』（１９４３年〜１９４８年）を完成させ、続いて『少将滋幹の母』（１９４９年〜１９５０年）を発表した。正宗白鳥は『戦災者の悲み』（１９４６年）・『人間嫌ひ』（１９４９年）を、志賀直哉は『灰色の月』（１９４６年）・『蝕まれた友情』（１９４７年）を、里見弴は『十年』（１９４６年）・『見事な醜聞』（１９４７年）を、宇野浩二は『思ひ草』（１９４６年）・『思ひ川』（１９４８年）を、長与善郎は『野生の誘惑』（１９４７年）などを、それぞれ発表した。

「こいさん、頼むわ。――」

鏡の中で、廊下からうしろへ這入つて来た妙子を見ると自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して、其方は見ずに、目の前に映つている長襦袢の、抜き衣紋の顔を他人の顔のやうに見据えながら、

「雪子ちゃん下で何してる。」と幸子はきいた。

――谷崎潤一郎『細雪』

中堅の作家も活動を再開し、上林暁は戦後の混乱期に病む妻を看病した体験を『聖ヨハネ病院にて』『晩春日記』（１９４６年）に描き、尾崎一雄は、母の死を契機に、生と死を静観した『虫のいろ+いろ』（１９４８年）を、外村繁は

『夢幻泡影』（１９４９年）を発表した。その他、井伏鱒二の『本日休診』（１９４９年～１９５０年）、高見順の『わが胸の底のここには』（１９４６年～１９５７年）、中山義秀の『テニヤンの末日』（１９４８年）、阿部知二『黒い影』（１９４９年）・『人工庭園』（１９５３年）、佐藤春夫の『女人焚死』（１９５１年）・『晶子曼陀羅』（１９５４年）、室生犀星の『詩のあわれ』（１９５０年）、川端康成の『千羽鶴』（１９４９年～１９５１年）・『山の音』（１９４９年～１９５４年）、伊藤整の『鳴海仙吉』（１９４６年～１９４８年）などがある。また、野上弥生子は長編小説『迷路』（１９３６年～１９５６年）を書き続け、伊藤は『日本文学史』（１９５２年～１９６９年）に着手した。

◎ 新戯作派（無頼派）

敗戦後の廃虚や秩序の混乱、世相の退廃の中に、石川淳（１８９９年～１９８７年）・坂口安吾[1]・織田作之助（１９１３年～１９４７年）・太宰治ら新戯作派（無頼派）と呼ばれる一派が生まれた。戦前新人作家として出発した彼らは、戦後になると、大いに活躍した。坂口は『堕落論』（１９４６年）で反逆的精神を説き、『桜の森の満開の下』（１９４７年）で虚無的な美を描いた。また、織田は『世相』

---

① （１９０６年～１９５５年）、ほかに『白痴』も有名。

（１９４６年）を、石川は『黄金伝説』『焼跡のイエス』（１９４６年）を書いた。その他、『リツ子・その愛』（１９４８年〜１９５０年）の檀一雄、田中英光らが新戯作派の作家とされる。

◎ 太宰治

太宰は（１９０１年〜１９４８年）、青森県大地主の子に生まれた、家庭での疎外感と過剰な自意識を背景に、独自の太宰文学を作り上げた。太宰の作品は、私生活における精神の変遷に大きく影響されるが、まず左翼運動の挫折による自虐的傾向の強い前期、自己再生の試みの中で平明で安定した世界を描く中期、戦後の混乱の中で再び自虐と自己破壊へ向かう後期、のおよそ三期に分けられる。中期には明るい作品もみえるが、後期は、俗悪な社会や偽善な道徳への反発を『ヴィヨンの妻』（１９４７年）に描き、戦後没落する貴族と新生の方向に向かう女ヒロインを『斜陽』（１９４７年）であらわし、最後『人間失格』（１９４８年）で自分の文学の総決算を試み、『グッドバイ』（１９４８年）の途中、玉川上水に身を投げて自らの生命を断った。

朝、食堂でスウプを一さじ、すつと吸つてお母さまが、

「あ。」

と幽かな叫び声をお挙げになった。

「髪の毛？」

スウプに何か、イヤなものでも入つていたのかしら、と思った。

「いいえ。」

お母さまは、何事もなかったやうに、またひらりと一さじ、スウプをお口に流し込み、すましてお顔を横に向け、お勝手の窓の、満開の山桜に視線を送り、さうしてお顔を横に向けたまま、またひらりと一さじ、スウプを小さなお唇のあひだに滑り込ませた。

——太宰治『斜陽』

◎ この時期の風俗小説

この時代には、戦後の世相や人情を写実した風俗小説も登場した。『厭(いや)がらせの年齢』（１９４７年）の丹羽文雄(にわふみお)、『雪夫人絵図』(１９４８年～１９５０年）の船橋聖一、『望みなきに非(あら)ず』(１９４７年）の石川達三、『青い山脈』（１９４７年）の石坂洋次郎、『浮雲』（１９４９年～１９５１年）の林芙美子、『帰郷』(１９４８年）の大仏次郎(おさらぎじろう)、『肉体の門』（１９４７年）の田村泰次郎(たむらたいじろう)らがいる。

◎ 新日本文学会

戦前・戦時中の厳しい弾圧から解放されたプロレタリア文学を中心とした作家たちは、戦後活動を再開し、昭和二

十一年（１９４６年）、「新日本文学会」①を結成、戦後の民主主義文学の中心となった。宮本百合子（１８９９年〜１９５１年）は、『歌声よ、おこれ』『風知草』（１９４６年）・『播州平野』『二つの庭』（１９４６年〜１９４７年）・『道標』（１９４７年〜１９５０年）を発表し、徳永直は、空襲下亡くなった妻を描いた『妻よねむれ』（１９４６年〜１９４８年）、佐多稲子は、『私の東京地図』（１９４６年〜１９４８年）、中野重治は、『五勺の酒』（１９４７年）・『むらぎも』（１９５４年）・『梨の花』（１９５７年〜１９５８年）などを書いた。中野は、『甲乙丙丁』（１９６５年〜１９６９年）に見られる革命運動批判へと向かった。

二、戦後派文学

昭和二十一年（１９４６年）に、「新日本文学」と並んで、荒正人・小田切秀雄・佐々木基一・埴谷雄高・平野謙・本多秋五・山室静によって、戦後文学を主導した同人誌の「近代文学」②が創刊された。同人たちは、プロレタリア

---

① １９４５年１２月３０日、創立大会を開き、機関誌として「新日本文学」を創刊した。その後、会員相互の対立から、会員には多くの出入りがあった。創立大会の綱領には、「民主主義的文学の創造とその普及」など五項目があげられた。

② １９４６年〜１９６４年。文学者の戦争責任、世代論、主体論、プロレタリア文学史論、日本近代作家の再評価など多岐にわたる評論を掲載。戦後文学を支えた注目すべき同人誌であった。

文学の影響を受けながらも、政治よりも人間の優位を主張して、「新日本文学」の中野重治との間に＜政治と文学＞論争を行った。

「近代文学」は、近代社会の中の個人と文学の主体性を重視して「第一次戦後派」の主流となった。加藤周一・花田清輝・福田恒存らの評論家たちも論陣をはった。

小説家では、野間宏[1]は、プリュウゲルの絵に象徴的な意味を持たせた『暗い絵』（１９４６年）で注目され、戦争の傷痕を探る『崩解感覚』（１９４８年）、日本陸軍の非人間性を暴露した長編『真空地帯』（１９５２年）を経て、全体小説である『青年の環』（１９４７年～１９６１年）へと展開した。埴谷雄高[2]が、日本近代文学には見られなかった告白・思想小説『死霊』（１９４６年～ ）を書き続けている。

椎名林三[3]は、焼け跡の日常生活と重苦しい観念とを融合させた『深夜の酒宴』と『重き流れのなかに』（１９４７年）から、日常の中に死と直面する男を描いた『永遠なる序章』（１９４８年）を経て、『懲役人の告発』（１９６９年）を書いた。中には『深夜の酒宴』は実存主義[4]的な戦後派文学の代表作とされた。梅崎春生（１９１５年～１９６５年）は、「個」と「国家」を見

---

[1] （１９０７年～１９７８年）、小説家、評論家。
[2] （１９１０年～ ）、台湾うまれ。評論家、小説家。
[3] （１９１１年～１９７３年）、小説家、劇作家。
[4] 戦後フランスで盛んになった思潮。自己にとって唯一確実な存在を肉体であるとして、そこから自己の世界を定着しようとする思想態度。

つめた『桜島』（１９４５年）で登場し、昭和四十年（１９６５年）には『幻化』を書いた。

中村真一郎[1]は、『死の影の下に』五部作（１９４６年～１９５２年）から『恋の泉』（１９６２年）・『雲のゆき来』（１９６５年）・『空中庭園』（１９６６年）へと進んだ。

一方、これら「第一次戦後派」の人々よりすこし遅れて登場した作家たちがいた。武田泰淳（１９１２年～１９７６年）は、極限状況における人間の不可解性を追求し、『審判』『蝮のすえ』（１９４７年）・『ひかりごえ』（１９５４年）・『富士』（１９６９年～１９７１年）などを書いた。福永武彦[2]は、『草の花』（１９５４年）に始まり、『冥府』『深淵』『夜の時間』（「夜の三部作」１９５４年～１９５５年）・『海市』（１９６８年）・『死の島』（１９６６年～１９６７年）年などを書いた。ほかに特に取り上げるべき作家には三島由紀夫・大岡昇平・阿部公房らがいる。

◎ 三島由紀夫

三島由紀夫（１９２５年～１９７０年）は、東京生まれで、小説家、劇作家である。『仮面の告白』（ １９４９年）・『愛の渇き』（１９５０年）・『禁色』（１９５１年～１９５３年）・『潮騒』（１９５４年）・『金閣寺』（１９５６年）などを書き、独自の官能的三島美学を展開した。その後、

[1] （１９１８年～ ）、小説家、評論家。
[2] （１９１８年～１９７９年）、小説家、仏文學者。

『鹿鳴館』『近代能楽集』（１９５６年）などの戯曲を書いて古典主義に傾斜した三島は、『憂国』（１９６１年）を経て、輪廻転生をテーマとした『豊饒の海』四部作（１９６５年〜１９６９年）を書き、自身の生命にも終止符を打って、三島美学を自らの手で完結した。

私が人生で最初にぶつかった難問は、美といふことだつたと言つても過言ではない。父は田舎の素朴な僧侶で、語彙も乏しく、ただ「金閣寺ほど美しいものは此世にない」と私に教へた。私には自分の未知のところに、すでに美といふものが存在しているといふ考へに、不満と焦燥を覚えずにはいられなっかた。美がたしかにそこに存在しているならば、私といふ存在は、美から疎外されたものなのだ。

——三島由紀夫『金閣寺』

◎ 大岡昇平

大岡昇平（１９０９年〜１９８８年）は、米軍の捕虜になった経験を生かして、戦争と個人の問題を『俘虜記』（１９４８年）で追究し、『野火』（１９５１年）では、戦争と罪の問題に迫った。また、スタンダール研究家でもあった大岡は、心理小説の手法をもとに、『武蔵野夫人』（１９５０年）・『花影』（１９５８年〜１９５９年）などの作品を書き、幅広い活動を続けた。

◎ 阿部公房

阿部公房（１９２４年～１９９３年）は、カフカを思わせる変身など超現実的な素材を扱った寓話的な小説を書いた。『赤い繭』（１９５０年）・『壁―Ｓ・カルマ氏の犯罪』（１９５１年）・『砂の女』（１９５２年）・『他人の顔』（１９５４年）・『燃えつきた地図』（１９６７年）・『箱男』（１９７３年）・『密会』（１９７７年）・『方舟さくら丸』（１９８４年）など、話題作を発表し続けた。中でも『砂の女』は、蟻地獄のような砂の穴に閉じ込められた教師を主人公に、状況と自由とを主題にした小説で、話題を巻き起こした。

そのほか、『祖国喪失』（１９５０年）・『広場の孤独』（１９５１年）・『海鳴りの底から』（１９６０年～１９６１年）の堀田善衛、『単独旅行者』（１９４８年）・『死の棘』（１９６０年～１９７６年）の島尾敏雄らが、「第二次戦後派」にあげられる。さらに、『足摺岬』（１９４９年）・『絵本』（１９５０年）の田宮虎彦らも、戦後独自の活動を展開した。

◎ 戦後の評論

昭和二十年代から三十年代前半にかけての評論活動で特筆すべきは、「近代文学」派の評論家たちであった。『知識人の文学』（１９４８年）・『芸術と実生活』（１９５８年）

の平野謙、『第二の青春』（１９４６年）の荒正人、『「戦争と平和」論』（１９４７年）・『「白樺」派の文学』(１９５４)の本田秋五、『幻視のなかの政治』(１９６０年)の埴谷雄高、『個性復興』(１９４８年)・『リアリズムの探求』(１９５３年)の佐々木基一、『文学と倫理の境で』(１９５８年)の山室静、『民主主義文学論』(１９４８年)・『人間の信頼について』(１９５４年)の小田切秀雄らが、ヒューマニズムを基本に、さまざまなテーマで評論活動を展開した。ほかに、花田清輝の『復興期の精神』(１９４６年)・『アヴァンギャルド芸術』(１９５４年)、加藤周一・福永武彦・中村真一郎の共著『１９４６・文学的考察』(１９４７年)、福田恒存の『近代の宿命』(１９４７年)・『芸術とはなにか』(１９５０年)、桑原武夫の『文学入門』(１９５０年)、竹内好の『国民文学論』(１９５４年)、高橋義孝の『森鴎外』(１９５４年)、吉田健一の『東西文学論』(１９５４年)、瀬沼茂樹の『昭和の文学』(１９５４年)などがある。また、小林秀雄・河上徹太郎・中村光夫・山本健吉らも引き続きその筆を執って活動した。

三、　第三の新人

昭和二十年代後半になると、政治性の強い「戦後派」に対し、日常のごくありふれた世界を重んじる作家たちが登場

しはじめる。いわゆる「第三の新人」と呼ばれる作家たちである。『驟雨』（１９５４年）・『暗室』（１９６９年）の吉行淳之介、『アメリカン・スクール』（１９５４年）・『抱擁家族』（１９６５年）の小島信夫、『プールサイド小景』（１９５４年）の庄野潤三、『春の城』（１９５２年）の阿川弘之、『箱庭』（１９６７年）の三浦朱門、『遠来の客たち』（１９５４年）の曽野綾子らがあげられる。特にこの派の代表的な存在は安岡章太郎・遠藤周作である。

◎ 安岡章太郎

戦争中に青春期を過ごした安岡章太郎は、自己の体験に材を採った、自虐的ユーモアのある作家として出発した。芥川賞受賞作の『陰気な愉しみ』『悪い仲間』（１９５３年）では、時代状況の中で生きる青春を的確に描き、『海辺の光景』（１９５９年）では、母親の死が家庭の崩壊につながることを描いて、私小説に新境地を開いた。近年では、人間の内部を見据えた作風へと転換している。

◎ 遠藤周作

キリスト教信者である遠藤周作は、キリスト教信仰を基盤とする西洋と多神教の日本との精神風土の異質性をモチーフとした作品が多いが、一方では、自由でとらわれのないユーモア作品をも発表している。『白い人』（１９５５年）

で第３３回芥川賞を受賞し、その後も『海と毒薬』(１９５７年)・『沈黙』(１９６６年)・『死海のほとり』(１９７３年)など、信仰の問題に迫った数々の作品を発表し続けている。特に『沈黙』は、殉教者と背教者の心理を鋭く描いて話題作となった。

司祭は足を上げた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことではなかった。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も聖らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみたされたものを踏む。この足の痛み。その時、踏むがいいと銅板のある人は司祭にむかって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分かつため十字架を背負ったのだ。

こうして司祭が踏絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。

___遠藤周作『沈黙』

四、昭和三十年代の文学

昭和三十年代に日本経済は戦前の水準に復帰し、前半は神武景気で沸立ち、「戦後は終わった」の合言葉のもと、昭和三十五年（１９６０年）池田内閣は国民所得倍増計画を

打ち出した。経済の高度成長の波に乗って、テレビ・週刊誌時代が到来、拡大を続けるマスコミと大衆社会の需要などの要因で、中間小説の流行、作家のマスメディアへの進出現象が見られ、昭和二十年代後半の「国民文学論」も立ち消え、昭和三十年代後半には、純文学の追いつめられた姿を露呈(ろてい)する純文学論争が起こった。また昭和三十五年に迎えた安保闘争(あんぽとうそう)の挫折により、作家・評論家もそれぞれの思想にしたがって別れていった。

◎ 社会派作家

昭和三十年代は、石原慎太郎(いしはらしんたろう)・開高健(かいこうけん)・大江健三郎(おおえけんざぶろう)などの、いわゆる社会派作家が活動を始める。石原は、既成道徳を否定し存在の充足感を求める若者を描いた『太陽の季節』(1955年)で芥川賞を受賞し、一躍注目を集めた。その後、政界に進出して、創作活動がほぼ停止している状態である。

開高健は、『裸(はだか)の王様』(1957年)で芥川賞を受賞した後も、『日本三文オペラ』(1959年)・『輝ける闇』(1968年)などの社会派小説を次々と発表した。また『ベトナム戦記』(1965年)などのルポタージュもある。

大江健三郎は、『死者の奢(おご)り』(1957年)注目され、『飼育(しいく)』(1958年)で芥川賞を受賞した。その後も、『個人的な体験』(1964年)・『万(まん)延元年のフットボール』(1

９６７年）などを発表する一方、『ヒロシマ・ノート』（１９６５年）などのルポタージュで、政治的立場を鮮明に示した。後、ノーベル文学賞を受賞して、世界に注目される作家となった。

その他、『パルタイ』（１９６０年）の倉橋由美子、『地の群れ』（１９６３年）の井上光晴らが、社会批判の作品を発表した。

◎ 女流作家

昭和三十年代に活躍した女流作家に、『地唄』（１９５６年）・『紀ノ川』（１９５９年）の有吉佐和子、『田村俊子』（１９５９年）の瀬戸内晴美、『流れる』（１９５５年）・『おとうと』（１９５６年〜１９５７年）の幸田文、『婉という女』（１９６０年）の大原富枝、『女坂』（１９４９年〜１９５７年）の円地文子、『湯葉』（１９６０年）の芝木好子、『挽歌』（１９５５年〜１９５６年）の原田康子らがいる。ほかに森茉莉・宇野千代・野上弥生子・佐多稲子らも活発に活動した。

◎ 中間小説

マスコミの発達とともに、純文学と大衆文学の境が次第に薄れ、中間小説が生まれた。『闘牛』（１９４９年）・『氷壁』（１９５６年〜１９５７年）・『天平の甍』（１９５７年）

の井上靖は、歴史物や西域物などを含めた幅広い分野の作品を発表した。また、『新・平家物語』（１９５０年〜１９５７年）の吉川英知、『雁の寺』（１９６１年）の水上勉、『点と線』（１９５７年〜１９５８年）の松本清張、『樅ノ木は残った』（１９６４年〜１９５６年）の山本周五郎、『楢山節考』（１９５６年）の深沢七郎らも、文学の大衆化の中で活発な創作活動を行った。

五、昭和四十年代の文学

昭和四十年代に入ると、高度経済成長の中で、一方では豊かな市民社会を作り上げるが、他方では公害や農村過疎・都会過密化などさまざまな問題を噴出させた。そのような社会状況の中で、作家たちも旺盛な創作活動を行うとともに、政治的・社会的にも積極的な発言を行った。

北杜夫は、『夜と霧の隅で』（１９６０年）の後、『楡家の人びと』（１９６２年〜１９６４年）を書き、四十年代以降も活動を続けた。高橋和巳は、『悲の器』（１９６２年）・『邪宗門』（１９６５年〜１９６６年）を書いた。さらに、『忍ぶ川』（１９７０年）の三浦哲郎、『死の島』（１９７１年）の福永武彦、『廻廊にて』（１９６２年〜１９６３年）の辻国生、『年の残り』（１９６８年）の丸谷才一、『小説渡辺華山』（１９６８年〜１９７０年）の杉浦明平、『月山』

（１９７３年）の森敦、『管絃祭』（１９７８年）の竹西寛子、『夏の流れ』（１９６６年）の丸山健二、『アカシアの大連』（１９６９年）の清岡卓行、『玩具』（１９６５年）の津村節子、『三匹の蟹』（１９６８年）の大庭みな子、『深い河』（１９６９年）の田久保英夫、『鶸』（１９７２年）の三木卓、『空気頭』（１９６７年）の藤枝静男、『砧をうつ女』（１９７２年）の李恢成、『感傷旅行』（１９６３年）の田辺聖子らが活躍した。また柴田翔は、芥川賞受賞作『されどわれらが日々―』（１９６４年）で、挫折した若者の苦悩を描き、その後も話題策を発表している。

◎ 内向の世代

昭和四十年代の文学状況のもう一つの特徴として、私的な感性に即して時代をとらえようとする作家群の登場がある。彼らは、政治・社会よりは自我の問題に関心を持ち、非日常的側面や都会における人間関係のなかに不安や生存の意味を探る。人々に「内向の世代」と呼ばれる。『円陣を組む女たち』『杳子』（１９７０年）の古井由吉、『笑い地獄』（１９６９年）・『挟み撃ち』（１９７３年）の後藤明生、『時間』（１９６９年）・『走る家族』（１９７１年）の黒井千次、『司令の休暇』（１９７１年）の阿部昭、『徳山道助の帰郷』（１９６７年）の柏原兵三らがいる。また、川村二郎・柄谷行人・秋山駿らの評論家も、「内向の世代」の批評家に数

えられる。

◎ 小川国夫

「内向の世代」の代表的作家である小川国夫(おがわくにお)は、地中海沿岸旅行に材をとった『アポロンの島』(1957年)を処女作(しょじょさく)に、『海からの光』(1968年)・『試みの岸』(1972年)などで、明晰(めいせき)な文体で表現し、その単純化された対象の奥に深い暗部(あんぶ)のあることを象徴し、端正な小説世界を形づくった。ほかに『生のさ中に』(1967年)・『或る聖書』(1973年)・『逸民』(1986年)などの代表作がある。

六、昭和三十年代以後の評論

昭和三十年代の主な評論には、加藤周一の『雑種(ざっしゅ)文化』(1956年)、中村光夫の『二葉亭四迷』(1958年)、伊藤整の『小説の認識』(1955年)、唐木順三(からきじゅんぞう)の『中世の文学』(1955年)、山本健吉の『古典と現代文学』(1955年)、吉田健一(よしだけんいち)の『文学概論』(1959年~1960年)、福田恒存の『人間・この劇的なるもの』(1955年~1956年)、江藤淳(えとうじゅん)の『夏目漱石』(1956年)、河上徹太郎の『日本のアウトサイダー』(1958年~1959年)、亀井勝一郎の『日本人の精神史研究』(1959年

～１９６６年)、吉本隆明の『芸術的抵抗と挫折』(１９５９年)、磯田光一の『殉教の美学』(１９６４年)などがある。

昭和四十年代以降の評論には、吉本の『言語にとって美とは何か』(１９６５年)、秋山駿の『内部の人間』(１９６７年)、小林秀雄の大著『本居宣長』(１９６５年～１９７６年)、饗庭孝男の『反歴史主義の文学』(１９７２年)、山崎正和の『鴎外 闘う家長』(１９７２年)、柄谷行人の『畏怖する人間』(１９７２年)、上田三四二の『うつしみ』(１９７８年)、中島健蔵の『回想の文学』(１９７７年)、大岡信の『紀貫之』(１９７１年)、江藤淳の『自由と禁忌』(１９８４年)、磯田光一の『昭和作家論集成』(１９８５年) などがある。

七、昭和五十年代以後の文学

昭和五十年代になると、経済大国、国民の九割が中流意識を持っているという社会状況の中で、文学もますます多様化し、戦後生まれの作家と読者、新しいテクノロジーの浸透などの現象が見られ、テープによる作品の享受など、電子出版の普及などのもとに、文学のあり方もなんらかの変容を余儀なくされている。

戦後世代の作家が次々と登場し、既成作家の活躍とも平行して文学の多様化が進行する。さらに、『窓ぎわのトット

ちゃん』などのノンフィクションも登場する。主な新人作家に、『岬』（１９７５年）・『鳳仙花』（１９８０年）の中上健次、『限りなく透明に近いブルー』（１９７６年）の村上龍、『泥の河』『螢川』（１９７７年）の宮本輝、『ふたつの春』（１９７９年）の増田みず子、『退屈しのぎ』（１９７４年）・『九月の空』（１９７８年）の高橋三千綱、『遠雷』（１９８０年）の立松和平、『女ともだち』（１９８１年）の中沢けい、『風の歌を聴け』（１９７９年）・『ノルウェイの森』（１９８７年）の村上春樹らがいる。

既成作家の作品に、檀一雄の『火宅の人』（１９７５年）、有吉左和子の『複合汚染』（１９７８年）、安岡章太郎の『流離譚』（１９７６年～１９８１年）、井上靖の『本覚坊遺文』（１９８１年）・『孔子』（１９８７年～１９８９年）、小島信夫の『別れる理由』（１９８１年）、中野孝次の『麦熟るる日に』（１９７８年）、吉村昭の『破獄』（１９８３年）、加賀乙彦の『岐路』（１９８８年）、山口瞳の『血族』（１９７９年）・『家族』（１９８３年）などがある。その他、大衆作家の作品に、野坂昭如『一九四五・夏・神戸』（１９７６年）、五木寛之『四季・奈津子』（１９７７年～１９７９年）、渡辺淳一『遠き落日』（１９７９年）、向田邦子『思い出トランプ』（１９８０年）、井上ひさし『吉里吉里人』（１９８１年）、つかこうへい『蒲田行進曲』（１９８２年）、なだいなだ『影の部分』（１９８５年）などがある。ほかに、

司馬遼太郎・連城三紀彦・立原正秋らがいる。

第六節、劇文学

一、演劇改良運動

明治初めの演劇は歌舞伎が中心で、能楽や舞楽などの伝統芸能は大衆の目に触れることはなかった。明治政府は開化政策の一環として、演劇改良に取り掛った。特に伊藤博文は、西洋の演劇を模範とするよう歌舞伎界を指導した。その結果、明治十九年（１８８６年）に演劇改良会が設立され、品位のある高尚な演劇、上流階級の社交場にもなりうる劇場などを目指した。このように明治前半の演劇は政治的背景のもとに展開した。

◎ 散切物と活歴物

演劇改良の試みとして、新しい社会風俗を描く散切物と史実を忠実に描こうとする活歴物がある。前者は、明治政府の散髪脱刀令（１８７１年）が出て、男役が散切頭で西洋渡来のものや新しい言葉を用いて世相を写した新世話物で、後者は服装や動作、せりふ、人物などを考証して歴史的事実を尊重して上演した「活歴史」物である。しかし、いずれも劇的なおもしろさに乏しかったために大衆の支持

を得られなかった。作者には河竹黙阿弥、福地桜痴、依田学海などがいる。なお、地方では江戸以来の歌舞伎が行われていた。

◎ 新史劇

散切物や活歴物と入れ替わるようにして文学者の作品が劇界に登場した。坪内逍遥は旧歌舞伎や活歴物の荒唐無稽で非芸術的内容を批判し、シェークスピアの戯曲を翻訳する一方、『桐一葉』（１８９４年）・『牧の方』（１８９６年）など新史劇と発表、上演して成功した。森鴎外も外国の劇を翻訳するとともに『日蓮上人辻説法』（１９０６年）などの劇を発表した。新史劇以降の歌舞伎を新歌舞伎と呼ぶことになった。

◎ 新派劇

明治二十年代に一時的に人気を呼んだ演劇に壮士芝居と書生芝居がある。これは、政治的圧力を受けた自由民権運動の人々が演劇を通して自らの主張を訴えようとしたものであるが、劇構成や演技が未熟だったために長続きしなかった。ただ、この中から独立した伊井蓉峰は森鴎外や依田学海の支持もあって男女混合の劇を始めた。徳富蘆花『不如帰』、尾崎紅葉『金色夜叉』、泉鏡花『女系図』『滝の白糸』など文芸作品を脚色して上演し、人々の人気を博

した。これが新派（しんぱ）と呼ばれる。

二、新劇運動

外国文化や思想が紹介され、近代的精神が浸透する明治後半から演劇の世界に新劇の運動が起こり、模索と分裂を繰り返しながらも発展していった。

◎ 文芸協会と自由劇場

文芸協会[①]は文壇における自然主義運動と呼応（こおう）して、明治三十九年（１９０６年）坪内逍遥とその弟子島村抱月ら早稲田系の文学者によって設置したもので、シェークスピアの『ヴェニスの商人』・『ハムレット』、イプセンの『人形の家』などを上演し好評を得たが、大正二年（１９１３年）で解散した。

小山内薫（おさないかおる）と演劇視察で洋行（ようこう）してきた二代目市川左団次（いちかわさだんじ）が芸術至上主義的理念を持って自由劇場を設立した。イプセンやチェーホフなど西洋近代劇の紹介に力を入れた。

---

① １９０６年設立。島村抱月を中心としたもので、逍遥の、歌舞伎と外国演劇の統合をめざす考えと、抱月の、近代演劇を導入・発展させる考えとが対立した。松井須磨子が新時代の女優として頭角を表した。１９１３年解散した。

三、大正期の演劇

この期になると、松竹が大劇場をつぎつぎに買収し、歌舞伎俳優も昭和四年までにほぼすべて専属にさせてしまったため、歌舞伎界は松竹のものになってしまった。一方、創作戯曲が盛んに書かれるようになったのもこの時期で、西洋の翻訳劇に刺激されて小説家が戯曲を発表するようになり、劇団所属の劇作家も翻訳や創作を行って、数々の名作が生まれた。新劇界の動きは、文芸協会の解散（１９１３年）後に芸術座[①]が結成されるが、抱月が他界し大正八年（１９１９年）解散した。芸術座を退団した沢田正二郎は、演劇は大衆より半歩前進した内容を持つべきだと主張し、大正六年（１９１７年）、大衆演劇を目指す新国劇を結成した。

◎ 築地小劇場

１９１９年自由劇場が解散した後、小山内薫は土方与志とともに大正十三年（１９２４年）、専用の劇場をもつ築地（つきじ）小劇場を創設し、演出や演技の研究に力を入れるとともに、

---

① 第一回公演は大正二年で、出し物はメーテルリンクの『内部』と『モンナ・ヴァンナ』であった。特に須磨子の演じたサロメ、カチューシャ、アンナ・カレーニナは有名であった。抱月が大正七年急死した後、翌年須磨子は『カルメン』公演中に縊死して抱月を追った。

劇団の組織を部門制にするなど多方面で改革に力を注いだ。開設後しばらく翻訳劇を上演したが、日本の創作劇も行うようになり、坪内逍遥の『役の行者』は空前の人気を博した。しかし、小山内の他界により昭和四年解散した。

四、昭和期の演劇

大正から昭和にかけて少女歌劇や軽演劇、剣劇などが多くの観客を集め、歌舞伎では尾上菊五郎・中村吉右衛門が大衆の支持を広く受けていた。その多くは新作物で、現代劇も上演された。一方、歌舞伎界の古い体質や待遇に不満をもつ俳優が結束し、河原崎長十郎・中村翫右衛門らが中心となって昭和六年（１９３１年）に前進座を設立した。一時衰退していた新派は、昭和十年代に入ると次第に人気を回復していった。

◎ 新劇

多くの足跡を残した築地小劇場の解体後、新劇界はプロレタリア演劇[1]と芸術派[2]の二つの流れに別れた。前者は土方与志の新築地劇団、村山知義らの新協劇団などであるが、おりからの軍国主義の中で弾圧を受け、昭和十五年（１９

① プロレタリア運動を受け、社会の俗悪と闘い、社会主義思想の浸透を図ろうとする演劇。

② 戯曲を文学として位置づけ、舞台における芸術性を高めようとする。

４０年）に解散させられた。一方、後者は雑誌「劇作」掲載の戯曲を上演した築地座、岸田国士を中心に結成された文学座があり、いずれも創作戯曲を盛んに上演した。

五、戦後の演劇

戦時中比較的安泰だった歌舞伎は、戦後一時、連合軍の規制を受けたが、その後は順調に発展し、今日の隆盛にいたる。新派も安定した活動を行い、能楽などの伝統芸能も復活する。さらに国立劇場の建設もあって、演劇活動は活発化している。

新劇も、文学座・俳優座・民芸を始めとして活動を再開する。新しい劇団も次々に生まれ、写実的演技に反逆する前衛的作品も目立ってくる。主な戯曲に、森本薫『女の一生』、木下順二『夕鶴』、加藤道夫『なよたけ』、三好十郎『炎の人』、三島由紀夫『鹿鳴館』、福田恒存『龍を撫でた男』、中村光夫『汽笛一声』、阿部公房『どれい狩り』、山崎昭和『世阿弥』などがある。

練習問題

次の文章の空欄を補うのに最も適当な語句を後から選んで、符号で答えてください。

わが国の近代詩は、外山正一らによる「(A)」に始まる。その後これを芸術的に完成の域にまで高めたのが、森鷗外による訳詩集「(B)」である。さらに島崎藤村は、青春の恋愛体験を第一詩集「(C)」で歌いあげた。藤村の影響を受けた(D)や蒲原有明は、浪漫的詩風を受け継ぎながらも象徴詩の試みを行い、さらに(E)は、訳詩集「(F)」で、フランスの象徴詩の移入を行った。

(ア)海潮音　(イ)新体詩抄　(ウ)于母影　(エ)若菜集(オ)上田敏(カ)薄田泣菫　(キ)北原白秋　(ク)島崎藤村　(ケ)三木露風(コ)高村光太郎

(一) 次の各問いに答えてください。

問一　次の(ア)—(オ)の中から、「明星派」から出た歌人以外のものを一つ選んでください。

(ア)与謝野晶子　(イ)吉井勇　(ウ)石川啄木　(エ)佐々木信綱　(オ)北原白秋

問二　次のA群と関係の深いものをB群から一つずつ選んでください。

A (1)正岡子規　(2)河東碧梧桐　(3)水原秋桜子　(4)桑原武夫　(5)中寸草田男

B (ア)第二芸術論　(イ)新傾向俳句　(ウ)月並俳句　(エ)人間探求派　(オ)プロレタリア俳句　(カ)馬酔木　(キ)俳句革新運動

（二） 次の各問いに答えてください

問一　次の中から二葉亭四迷と関係のないものを二つ選んで、番号で答えてください。

（１）写実主義　（２）浮き雲　（３）文学界　（４）言文一致　（５）勧善懲悪　（６）ロシア文学　（７）小説総論

問二　次の中から自然主義作家を二人選んで、番号で答えてください。

（１）島崎藤村　（２）夏目漱石　（３）森鴎外　（４）志賀直哉　（５）正宗白鳥　（６）和泉鏡花

問三　次のＡ群と関係の深いものをＢ群.Ｃ群からそれぞれ一つずつ選んでください。

Ａ　（１）夏目漱石（２）永井荷風（３）武者小路実篤（４）太宰治　（５）掘辰雄　（６）小林多喜二（７）井伏鱒二　（８）横光利一　（９）三島由紀夫　（１０）遠藤周作　（１１）小川国夫　（１２）野間宏　（１３）中島敦　（１４）井上靖　（１５）大江健三郎

Ｂ　（ア）蟹工船（イ）沈黙（ウ）機械（エ）金閣寺（オ）斜陽　（カ）聖家族（キ）闘牛　（ク）三四郎（ケ）山椒魚　（コ）飼育　（サ）友情　（シ）すみだ川（ス）アポロンの島　（セ）山月記　（ソ）真空地代

C　(a) 第一次戦後派　(b) 第二次戦後派　(c)余裕派
(d) 新感覚派(e) 第三の新人　(f) 内向の世代　(g) プロレタリア文学 (h) 社会派　(I) 白樺派　(j) 新心理主義　(k) 中間小説　(l) 新興芸術派　(m) 新戯作派　(n) 耽美派
(o) 実存主義文学の先駆

后　记

随着这本教材即将出版，我的心更加不安起来了。如果能给我更多一点的时间，我会……但现在已经不是说这些的时候了。

在日本留学的时候，由于缺乏日本文学史的基础知识，无论在学业还是研究上都吃了不少苦头。很后悔上大学的时候没有学习日本文学史。而实际上当时也没有开设日本文学史的课程。

回国后建议学校开设了日本文学史课程。当时请的是日本籍教师。外教的课讲得也算不错，但学生们接受得并不太好。经过调查，我发现其中原因一方面是外教把不好学生的脉搏；另一方面是没有合适的教材。原版日本文学史教材倒也有一些，但不是数量少就是版本旧，不能够满足也不适合中国学生的需要。因此我萌生了编写日本文学史教材的念头。但编写日本文学史教材不是一件简单的事情，它需要编写者具有很高的日本文学造诣。我虽然有过几年的研究经历，

但毕竟时日尚浅。这种想法一提出也受到了朋友的忠告。

最后，一种不能控制的欲望还是让我做了这件自我折磨的事情。这本教材总算出来了。就算是一个不熟的果子，暂且献给那些需要的人吧！

在此我要向给予我大力支持和帮助的国际关系学院王信、苏民育二位先生和河北大学的日籍教师本田典国先生、日研所张玉柯先生以及河北大学领导、教务处、出版社的诸位先生表示衷心感谢！

本书由张如意主持编写，参与编写工作的还有温荣姹、刘金柱、穆晓楠、李芳、李奇术、周林薇、史艳玲、邢雪艳等几位老师。

最后，真诚希望使用本书的老师、同学和专家、学者提出批评意见，以便今后进行修订。

编者　张如意

2004 年 5 月

［Ｇｅｎｅｒａｌ Ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ］
书名＝日本文学史
作者＝张如意编者
页数＝２４５
ＳＳ号＝１１４２０１２１
ＤＸ号＝
出版日期＝２００４年０８月第１版
出版社＝河北大学出版社

书名
前言

目次